

第4章 第V調査区

第1節 はじめに

堺市大平寺に所在する万崎池遺跡は標高24~26m前後の洪積段丘上に位置し、東は石津川氾濫原に向かう段丘崖で面され、北は万崎団地の沖積面に向かって下降する段丘崖によって囲われている。西と南は顕著な地形的な特徴は見られないが、わずかな段丘崖（西方）と埋没谷によって面される。

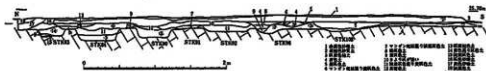
調査は昭和55年8月から昭和56年4月迄行なわれ、本調査区では約6,000m²を全面調査した。

第2節 微地形と層序 (図版103・105)

黄褐色粘質土を呈する地山面は調査区の西端から東に向かって徐々に下降している。現在調査区周辺には広い水田が南北に長い階段状をなして営まれている。耕地化の際、西側を削平し、東端を一部盛土する造成が行なわれている。本来段丘上であり堆積土はそれ程厚くはなかったであろう。表土及び耕作土を除くと、厚さ10cmの床土（黄褐色土）の下に地山（黄褐色粘土・茶褐色砂礫土）が現れた。

一見広範で平坦な段丘面上に小規模な埋没谷が調査区の南東端部及び、北東端部に検出された。それらは調査区東側の石津川段丘崖近くで褐色礫層を埋土とし、幅10~20mを測るものであった。南側の埋没谷は調査区を東西に横断する形で検出され、その上面に、溝・井戸・濠等が掘削され、南北両岸にピット群・土坑基群等がひろがっていた。北東隅の埋没谷は最奥部の僅く一部が調査区にかかった程度であったが、弥生後期や平安前期の遺構面を形成する基盤となっていた。その埋土は濃褐色又は茶褐色砂礫である。弥生後期以降の遺物包含層（斜面堆積層）もこうした埋没谷周辺にわずかに残存していた。これらは10cm前後の厚さで、茶灰色を呈し、砂質が強い。中世期の土器を出土するものが多かった。

遺構のありかたと大きな関連性を有するこれらの小規模埋没谷は、一見平坦に見える台地の縁辺から中央部に向かって数多く存在するであろう。こうした微地形の復原が今後の考古学調査の大きな課題である。



第63図 調査区西端南北断面図

第3節 遺構

A 弥生時代（図版104・106・110上段、付図13）

前期の遺構は不明であるが、N16-a地区のビット群1より壺口縁部が若干出土している（第77図-23）。

ビット群1は径約50cmのはほぼ円形のビット11を中心に7基のビットによって構成される。ビット1は埋土茶褐色で炭が若干混じっている。他のビットは径20～30cm前後で出土遺物は殆どない。

中期についてはM16地区周辺に土器片が少量みられ（第77図-9）、K14地区では石鏃も出土している（第76図-10）が、遺構として限定できるものはなかった。

弥生後期から古墳時代初頭にはビット群2・3、竪穴住居跡2棟、土壇、溝等が検出されている。以下、北東隅から南西方向に遺構の概略を記す。

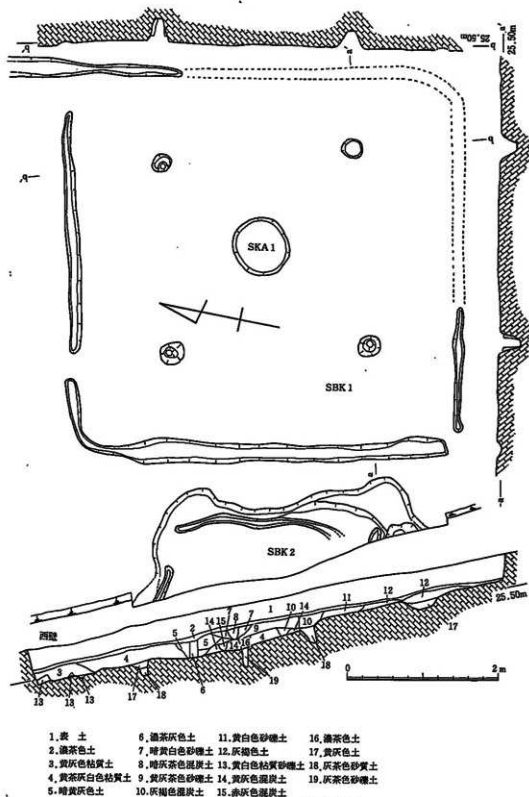
調査区北東部K14地区の周辺で、平安期ビット群に混じって、ビット34・37、SKA18、SDA9等が検出された。SDA9によって面された北東側と南西側のいずれにも、ビット、土壇が認められ、弥生後期の小集団が存在したのであろう。SDA9は暗灰褐色土で埋まり、長さ14m、幅20cm前後を測り弧状を描く細い溝であった。出土遺物は細片で弥生時代のものであるかどうかは不明であったが、他遺構との関連や埋土の状況から弥生後期のものであろう。SKA18は調査区北東隅で検出された。東西1.0m、南北0.8mの長方形を呈し、暗灰褐色土に若干の炭が混じった埋土である。ビット34には山陽系の壺が圧縮されたように埋め込まれていた（第77図-7）。SDA9の北西隅に接して存在し、径30cmを測り、埋土は灰褐色土であった。ビット37は、径25cm、深さ27cmで埋土は灰褐色炭混じり土で、ビット35・36と並び楕を形成する。平安前期の可能性も強い。

調査区中央やや南寄りのL15-C付近でも数個の弥生期と考えられるビットが検出され、ナスカイト片も出土している。出土遺物は細片で時期も決め難いが、埋土の状況、周辺包含層内出土弥生式土器のありかたから、ビット群3の南側にSDA9を隔てて存在する小グループ、ビット群2としておきたい。

竪穴住居址（第64図；図版106）

弥生時代後期から古墳時代前半にかけての遺構として調査区南西隅に2棟検出された。

SBK1 N17-d地区で検出された。南南西から北北東にゆるやかに傾斜する地盤に、一辺5.2mを測る方形の平面プランが確認された。地山は黄褐色粘土と、黄褐色砂礫層が接する箇所で、全体に砂礫層に寄って建てられている。中央に径75cm、深さ6cmの炉があり、四本柱は径30cm前後であった。住居跡の北東隅からは排水溝と思われる溝が北流し、黄灰褐色土により埋没していた。この溝の上面は、北7mの地点まで、幅員を拡大しながら続くが、そこでSDA2を切断しており、上層については住居跡の排水溝に規定された古代～中世にかけての溝と考えられた。四周の側溝は南東部が欠失して不明であるが、その他は、幅15cm、深さ5cmを保ちつつろうじ



第64图 SBK 1 - 2 平面图·断面图

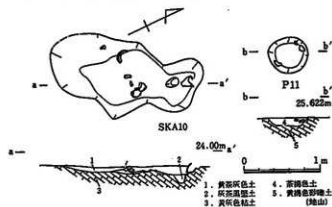
第6表 SBK1ピット測量表

ピット	掘方直径	埋 土	柱直径	深 さ	形 状
1	24cm		12cm	17cm	円
2	26cm	暗灰褐色礫混り土		4cm	円
3	30cm	暗茶色礫混り土	18cm	24.3cm	円
4	31cm		18cm	21.3cm	円

はN-15°-Wであった。中央の土質は径50cmを測り、埋土に炭が混じっていた。炉跡と考えておきたい。出土遺物（第77図-8）から、弥生時代末期から古墳時代初頭のものと考えられる。

SBK2 N17-d区西端において、隅丸方形の平面プランの北東部が検出された。一辺3.5m、深さ15cm前後、柱穴や炉跡は不明である。周溝は幅15cm、深さ10cmを測る。N-17°-Wの方位でSBK1とほぼ等しいが、距離的には近接しすぎており、同時併存は不可能である。地山は黄褐色粘土層で埋土は灰褐色及び、灰茶色土が主体で、床面は黄茶灰色粘質土、黄灰色炭混り土が見られた。更に市道の下に続いていると考えられ、周溝の位置やプランの形態が不整形な事もあり、2~3棟の切り合いも考えられよう。標高は25.5m~25.6mを測り、SBK1同様南から北にゆるやかに降っている。遺構検出の際、上面に平安期と考えられるピットが確認され、住居跡内に遺物も認められず、時期は平安時代以前であろうとしか言えないが、平面プラン、細片遺物、SBK1の埋土等との関連からはSBK1と同時期の遺構としておく。

土質（第65図；図版110上段）



第65図 弥生時代ピット及び土質平面図・断面図

で、深さは10cmを測った。

北側から3基の楕円形土壇が切り合った結果と見えなくもない。土壇底面がやや窪み、埋土が南側でやや異り、遺物の位置のかたよりがそれを物語るかのようである。その場合は長径0.8~1mの小土壇群となる。遺物は北側壁面に甕、中央に高坏脚、甕が出土している。

B 古墳時代

土壇群（図版107・109上段・110下段、第63・66~69図）

で残存していたものである。住居跡の埋土は殆ど削平され、南半は床面も欠失し、地山の礫層が確認された。床面は北辺及び西辺で認められたにすぎない。いずれも褐色粘質土であった。住居跡の方位

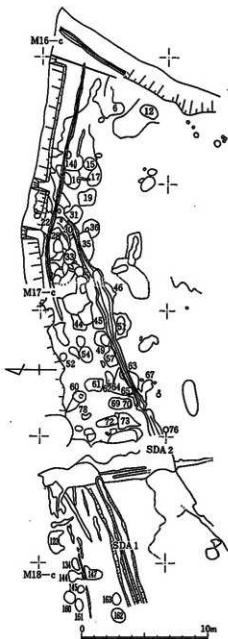
SKA10 調査区北東部J15-c区南端に位置し、東北隅のピット群3と同時期のものと考えられた。長軸方向は北東-南西で長さ2.0m、幅1.0m、深さ10cm前後を測った。埋土は黄茶灰色土で、平面形は不整形であった。遺物は北半部に多く出土し、北端の底面には灰茶色の堅い埋土のピットが検出されている。長径16cm、楕円形

調査区の西南隅、M16-c、d区・M17-c、d区を中心に約200基の土墳が検出された。その形状は円・楕円・隅丸方形を呈し、規模は0.5mから2m近いものまでである。その検出状況は表土・床土を除去した時点で、東西に走る中世溝とともに不明瞭なプランが見えはじめ、ところどころに完形に近い須恵器等が出土しはじめるといった様相であった。検出当初は黄色粘土又は緑黄色粘土の地山に刻まれた不整形遺構として認められた。その周縁を明確に検出するにつれ、1~1.5mの楕円形土墳の切り合いが判明してきたのである。その埋土は中央部に紫灰色粘土がブロック状にはいる他は、地山の黄色粘土と極似し、切り合いの確認、先後関係の追求は困難を極めた。このようにして全調査区の総面積6,000㎡の1/6にも満たない小面積であったが、多くの日数と人力を費す結果となった。調査は先ず平面プランを確認し、長軸・短軸にトレンチを設定し、土墳底面及び壁面を確認して後、断面写真・実測を行った。更に遺物の有無を確認しつつ、土墳を4分割して掘り下げ、上層・中層・下層・地山の土壌サンプルを柱状に採集した。このように掘り進むなかで最も障害となったのは雨水の流入であり、その防止に努力したが、浅い埋折谷という立地条件もあり、困難な作業となった。²⁾

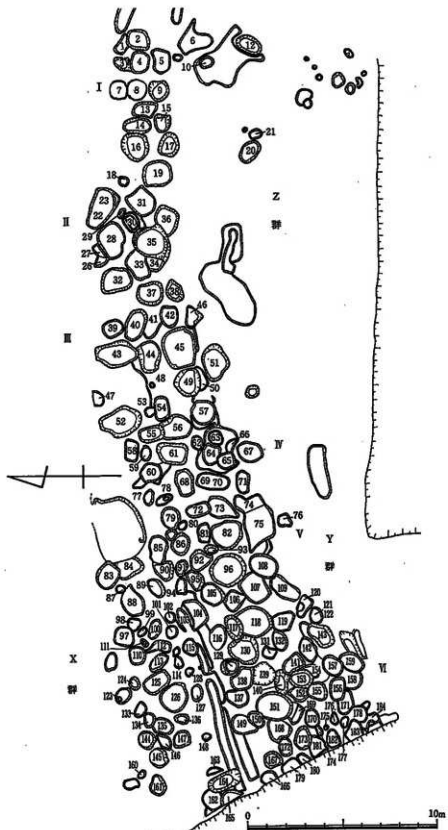
土壌群の法量・主軸方位・底面レベル値・形態・紫灰色土の位置・出土遺物・切り合い関係については第7表の通りである。ここではこれらの個別事象の全体的傾向について述べたい。まず立地について説明し、次に切り合い及び群の集中度について概観し、続いて土墳自体のありがたを述べ、最後に出土遺物について説明する。

立地 台地北側斜面及び浅い埋折谷中に堆積した黄緑灰色粘土層に掘削されている。標高25~25.5m前後に位置する。谷が微妙に南西方向に屈曲する地点を境にして、土壌群の規模・形態・集中度が異なっていた。

埋土の切り合い関係 地形の若干の変化と、土壌の集中度により、東半をZ群、西半をY群と



第66図 土壌群上層遺構平面図



第67图 土坡群平面図及び遺構番号

第7表 土 横 一 覧 表 (1)

 (Y : 弥生式土器)
 (PS : 須恵式土器)
 (PH : 土師器)

土横 番号	法 量 (cm)			方 位	底面レベル (T.P.+m)	形 状	紫灰色土 の 位 置	出 土 遺 物	より古い土横	より新しい土横
	長軸	短軸	深さ							
1	115	66	22	N-69°-W	24.90	だ円				→ 2
2	120	106	20	N-17°-W	25.01	ほぼ円			← 1	→ 4
3	(70)	62	20	N-14°-E	24.90	だ円	上層			→ 4
4	110	100	16	N-22°-W	25.10	ほぼ円		PS(6C), Y	← 3- 2- 5	
5	130	114	19	N-88°-E	25.11	だ円	中・下層			→ 4
6	142	128	27		25.23	だ円?				
7					24.92	だ円?				→ 8
8	140	(130)	20	N-77°-W	25.00	ほぼ円	上・下層	PH	← 7	→ 9
9	105	100	24	N-38°-W	25.06	だ円	中層	PS(6C)	← 8-13	
10	76	60	14	N-28°-W	25.17	だ円			←11	
11	190	75	44	N-26°-W	24.82	だ円				→10
12	141		30	N-23°-E	25.06	だ円		PS(6C後)		
13	120	98	18	N- 5°-E	25.12	だ円	上・中層			→ 9・14
14	156	(76)	22	N- 4°-W	25.08	だ円	下層		←13	→16
15	95	90	22	N-89°-E	25.12	円		PH(6C), PS(5~7C)	←17	
16	150	130	20	W-E	25.12	だ円	中層		←14	
17	130	105	35	N-70°-E	25.05	だ円	中層	PS, PH, Y		→15
18	55	50	6	N-11°-E	25.23	円				
19	150	130	16	N-10°-W	25.17	隅丸方形	中層	PH, PS (6C末~9C初)		
20	132	86	18	N-46°-W	25.18	だ円				
21	68	49		N-15°-W	25.33	だ円				
22	232	130	17	N-60°-W	25.10	だ円	下層	Y, PH		
23	22と合併									
24	104	(52)		N-85°-W	24.95	だ円				
25	130	114	19	N-88°-E	25.11	だ円	中・下層			
26	58		18		25.18	だ円		石炭		→27・28
27	70	60	10		25.20	ほぼ円			←26	→28
28	195	98	8	N-87°-E	25.22	だ円			←27・26	
29	60	35		N-42°-W						→30
30	108	50	8	N-64°-E	25.25	だ円			←29	
31	152	120	15	N-52°-E	25.16	隅丸方形	下層	Y(V)		
32	168	126	18	N- 8°-W	25.17	だ円	下層	Y	←33	
33	164	110	8	N-58°-E	25.25	だ円	下層		←34	→32・35

第7表 土 質 一 覧 表 (2)

土質 番号	注 量 (cm)			方 位	地面レベル (T.P.+m)	形 状	栗沢色土 の 位 置	出 土 遺 物	より古い土城	より新しい土城
	長軸	短軸	深さ							
34	62	60	10		25.15	ほぼ円				→35・33
35	165	(150)	30	N-2°-E	25.10	だ円	下層	Y, ナスカイト	←33-34	→36
36	120	115	16	N-71°-W	25.22	だ円	中層		←35	
37	141		10	N-10°-E	25.23	だ円	中層			
38	120	68	12	N-62°-E	25.19	だ円	下層	Y, ナスカイト		
39	112	92	8	N-27°-W	25.24	だ円			←40	
40	172	100	27	N-70°-W	25.03	だ円	中層	Y	←41	→39
41	140	(64)	16	N-65°-W	25.15	だ円	下層			→40→42
42	120	106	20	N-80°-E	25.12	だ円	中層		←41	
43	(230)	120	14	N-S	25.10	だ円	下層		←44	
44	174	100	24	N-88°-E	25.12	だ円	中層	Y, PH (第77図-17)		→43
45	218	192	23	N-81°-E	25.10	だ円	中・下層		←46	→49
46	108	90	17	N-70°-W	25.18	ほぼ円	下層	PH or Y		→45
47	58	(50)	5		25.21					
49	145	144	24	N-78°-E	25.12	だ円	中層	PH	←50・45	
50	(140)	(34)	8	N-78°-E	25.20					→49・51
51	190	136	23	N-88°-E	25.12	だ円		Y(V), P.S., PH(第77図-5)	←50	
52	220	136	20	N-22°-W	25.10	だ円	下層			
53	60	55	10	N-28°-W	25.23	円				→54
54	128	80	12	N-82°-E	25.20	だ円	下層	Y, P.S(8C)	←53・56	
55	130	84	14	N-11°-W	25.19	だ円	下層	P.S(5C)末、 埋没		→56
56	150	140	20	N-S	25.14	だ円	中層	P.S(6C)埋没 (第79図-1)	←55	→54
57	135	120	12	N-57°-W	25.20	ほぼ円	下層			
58	112	60	7	N-84°-W	25.25	だ円				→59
59	76	60	10	N-73°-W	25.20	ほぼ円			←58	
60	120	96	30	N-27°-E	25.04	だ円	中層	P.S(第79図-2)		
61	155	98	18	N-3°-E	25.11	だ円				
62	84	68		N-75°-E	25.21	だ円				
63	88	75	8	N-48°-E	25.19	ほぼ円			←64	
64	98	62	14	N-58°-W	25.26	だ円	中層		←63	→65
65	100	92	14	N-18°-W	25.14	円	中層		←64・66	
66	56		6		25.16				←65	→67
67	148	110		N-23°-E	25.28	だ円			←66	

第7表 土 壌 一 覧 表 (3)

土壌 番号	法 量 (cm)			方 位	底面レベル (T.P.+m)	形 状	紫灰色土 の 位 置	出 土 遺 物	より古い土壌	より新しい土壌
	長軸	短軸	深さ							
68	150	88	20	N-74°-E	25.16	だ円		Y or PH		
69	180	92	15	N-8°-E	25.21	だ円	中層	PH(6C), PS(5C)		
71	128	70	8	N-88°-E	25.27	だ円				
72	130	76	16	N-17°-W	25.23	だ円			←73	
73	183	108	14	N-26°-E	25.30	だ円	上層			→72・82
74	150	33	6	N-20°-W	25.22	だ円				
75	170	133	8	N-71°-E	25.16	だ円				
77	89	50	11	N-74°-W	25.26	だ円	上層			
78	95	40	8	N-29°-W	25.26	だ円		PS		→79
79	115	98	12	N-88°-W	25.21	だ円	下層		←78	→80
80	54	50	7	N-55°-W	25.26	円			←79	
81	103	74	20	W-E	25.14	だ円		PS(5C)		
82	165	120	24	N-10°-W	25.09	だ円	中層	PS(5C後)	←73	
83	(137)	122	22	N-49°-W	25.15	だ円	下層		←84・87	
84	115	40	32	N-35°-W	25.02	だ円	上層	PS(6C), PH?		→83
85	150	104		N-83°-W	25.31	だ円			←90	
86	112	104	10	N-55°-W	25.26	円	上層			
87	55	40	8	N-12°-E	25.30	だ円			←88	→83
88	(135)	112		N-47°-E	25.14	だ円		PS(第78図-21)		→87
89	112	78		N-40°-E	25.10	だ円				
90	(96)	95	25	N-72°-E	25.06	だ円	中層			→85・91
91	82	80	26	N-51°-E	25.13	楕円	中層	PH	←90	→95
92	123	100	11	N-10°-W	25.37	円		(6C)	←95	→93
93	78	66	12	N-S	25.24	だ円			←92	
94	(106)	(84)			25.14					
95	(120)	(86)	10	N-58°-E	25.24	だ円	上層		←91	→92→105
96	190	(150)	20	N-8°-W	25.11	だ円	下層	Y, PS(6C) 提痕	←107	
97	110	102	17	N-9°-E	25.26	円			←98	
98	76	50	8	N-50°-E	25.24	楕円				→97・100
99	66	44	8	N-43°-W	25.25	楕円				
100	110	60	17	N-9°-E	25.18	円			←98	→112
101	72	70	22	N-86°-E	25.20	円	中層	PS(6C)提痕		
102	70	62	14	N-47°-E	25.11	円	中層			

第7表 土 壌 一 覧 表 (4)

土壌 番号	法 位 (cm)			方 位	底面レベル (T.P.+m)	形 状	深灰色土 の 位 置	出 土 遺 物	より古い土壌	より新しい土壌
	長軸	短軸	深さ							
103	133	50	6	N-66°-E	25.22	だ円		PS(5・6C)	←104	
104	150	94	16	N-30°-E	25.25	だ円	中層			→103
105	135	105		N-58°-E	25.10	だ円			←95	→106
106	108	100	30	N-54°-E	25.12	だ円	中層	Y, PS(6C) 燧, PH	←105・107	
107	165	118	27	N-45°-W	15.10	だ円	中層	PH(第77区-21)	←109→108	→106→96
108	155	120	22	N-65°-E	25.15	だ円		Y, PS燧類	←107→109	
109	175		30	N-41°-E	25.08	だ円	中・下層	Y		→108→107
110	102	90	20	N-85°-W	25.22	楕円方形	中層		←111	
111	50	(30)	22	N-52°-E	25.10	ほぼ円	中層			→110
112	95	78	14	N-26°-E	25.20	だ円	中層		←100	→113
113	120	70	14	N-42°-W	25.25	だ円			←112	→125
114	70	50		N-88°-E						
115	100	61	23	N-46°-E	25.15	だ円	下層			
116	140	(80)	13	N-69°-E	25.27	ほぼ円				→117・SD104
117	142	86	32	N-69°-E	25.05	だ円	上層	Y, PS(古), PH	←116・118・130	
118	158	156	20	N-14°-E	25.20	だ円	中層	Y(V), PS (第78区-10)	←119・130	→117
119	130	96	30	N-45°-E	25.14	だ円	中・下層			→132・118
120	115	56	22	N-61°-W	25.24	だ円	下層			SD103の下層
122	90	70	26	W-E	25.19	ほぼ円				SD103
123	100	86	20	N-40°-W	25.22	ほぼ円		Y, PH		
124	73	58	26	N-76°-W		円	中層	PS(6C)		
125	150	80	20	N-38°-E	25.173	だ円	中層	PS(6C前) (第79区-3)	←113	
126	160	130	22	N-44°-E	25.22	だ円	中・下層			
127	90	60	26	N-87°-W	25.18	だ円	中層			
128	54	40	23	N-68°-W	25.28	だ円	上・下層	PS(6C?)		
129	103	66	20	N-19°-W	25.23	ほぼ円	中層		←138・130	SD104
130	162	(150)	26	N-50°-E	25.156	だ円		PS燧、(第79区 -3)(6C?)	←138・139	→117・118・129
131	72	60	14	N-20°-E	25.35	円		Y		
132	121	82	15	N-71°-E	25.30	だ円	中層		←119	
133	82	50	20	N-50°-E	25.22	だ円	上層	Y		
134	80	60	15	N-85°-W	25.30	だ円	中層	Y	←135	
135	105	(80)	20	N-23°-E	25.14	だ円	中層			→134・146・147
136	78	56	14	N-12°-W	25.34	円	上層			

第7表 土坑一覽表(6)

土坑 番号	法 量 (cm)			方 位	底面レベル (T.P.+m)	形 状	赤灰色土 の 位 置	出 土 遺 物	より古い土坑	より新しい土坑
	長軸	短軸	深さ							
137	122	(76)	35	N-22°-E	24.96	ほぼ円	中層			--138 SK281・SD104
138	(130)	120	30	N-86°-W	25.19	だ円	下層		--137・139	--130・129
139	125	(96)	33	N-44°-E	25.14	円	中層	Y	--140	--138・130
140	121	60	24	N-82°-W	25.17	だ円	下層			--139・153・154・ 141・151
141	126	80	14	N-36°-W	25.28	だ円	上・中層		--140	--142・153
142	140	80	22	N-72°-E	25.20	だ円	下層	Y	--141・154	
143	160	110	32	N-53°-E	25.05	円	下層			
144	96	93	20	N-40°-E	25.24	ほぼ円	中層	PS(6C)提瓦	--146	
146	110	60	29	N-49°-E	25.19	だ円	中層	Y(?)	--135・145・147	--144
147	99	84	20	N-15°-W	25.24	だ円	上層	Y	--135	--146
148	空測時消滅									
149	105	88	35	N-7°-E	25.08	だ円	中・下層			--150
150	105	86	38	N-48°-E	25.16	ほぼ円		PS(6C)	--149	--151・153
151	185	150	30	N-18°-E	25.12	だ円	中層	PS(第78図-22)	--140・143・150・ 152・168・169	
152	100	(82)	16	N-32°-W	25.26	だ円	下層	Y, PS(6C・ 6C半)		--155・151・ 153・169
153	122	100	30	N-13°-E	25.16	ほぼ円	中層	Y, P, H, PS	--140・141・150・ 152・154・155・156	
154	(48)		19	N-14°-W	25.22	だ円			--140・155	--153・142
155	106	(80)	24	N-46°-E	25.19	だ円	下層		--152	--153・154・156
156	120	94	16	N-89°-E	25.18	だ円	中層	Y	--155・158	
157	125	96	22	N-40°-E	25.15	だ円	中層		--159・158	
158	120	(100)	36	N-40°-E	25.03	だ円	中層	Y		--156・159・157
159	140	100	31	N-22°-E	25.056	だ円			--158	--157
160	60	55	12	N-40°-W	25.56	ほぼ円	下層	PS(5C末~ 6C前)		
161	112	90		W-E	25.29	だ円				
163	(96)	(96)	24		25.20	ほぼ円	中層			--164
164	184	74	30	N-26°-W	25.15	だ円	中層		--163	
165	(130)	(62)			25.44				--162	
166	60	40	30		25.12		中層			
167	90	90	32	N-22°-W	25.15	ほぼ円	中層			
168	100	55	24	N-75°-E	25.18	円	下層		--169	--151・172・153
169	(56)	(42)	16		25.26		下層		--152	--151・170・168
170	100	80	14	N-87°-E	25.28	だ円	下層		--169・174	
171	92	85	16	N-83°-E	25.23	だ円	上・中層		--103・178・183	--177

第7表 土 墳 一 覧 表 (6)

土墳 番号	法 量 (cm)			方 位	底面レベル (T.P.+m)	形 状	赤灰色土 の 位 置	出 土 遺 物	より古い土墳	より新しい土墳
	長軸	短軸	深さ							
172	108	70	24	N-83°-W	25.20	だ円	中層		←188	
173	130	96	30	N-86°-W	25.10	だ円	下層		←181	
176	60	50	10	N-66°-W	25.30	だ円				→177
177	68	54	19	N-79°-W	25.20	円			←176・64・ 171・183	
178	110	78	22	N-4°-E	25.14	円	中・下層			→171・183
179	(58)	44	12		24.24		下層			
180	60	(50)	23	N-40°-E	25.18		下層			
181	(115)	(75)	30	N-64°-E	25.15	だ円	中層		←182	→173
182	(102)	(86)	23	N-82°-E	25.23	だ円				→181
183	100	88	20	N-76°-W	25.18	だ円	上層		←178	→171・177

☆ 48・76・121・145・162・174・175は欠番
121は122と同じ？

し、北西群をX群と仮称した。Z群にはSTK1~STK19のI群と、STK20~STK36のII群、STK37~STK51のIII群、STK52~STK80のIV群に細分される。これらの土墳群の先後関係を示す接点はSTK1→2、3→4、2→4、5→4、更に7→8→9へと続く一群と13から西へ14→16と続くものがみられた。17→15は東へ向って続く動きである。以上I群中で時期の判明する遺物を含む土墳は4・9では6世紀後半頃のものが最も新しいものであった。I群西半は、等高線に平行に切り合うものがみられ、東半には谷内より谷の上方向へ連続する動きが認められた。

7・8世紀代の遺物を含む19から西方のII群では26→27→28及び29→30、34→33→32、34→35→36と続く弥生式土器を少量出土する土墳群が展開する。ここでも、谷内から谷上に続く動きと、コンターに平行する動きが若干うかがえた。II群に至っても弥生式土器、サヌカイトを出土する土墳群が多い。41→40→39、41→42、46→45、50→49、50→51といった斜面中央から谷内と谷上に向う2つの動きがみられた。III群は55→56→54、53→54、58→59、63→67に至る6度の切り合いが認められた。時期も5・6世紀及び7・8世紀のものが含まれている。

IV群では73→72、73→82、78→79、90→91→95→92、¹⁰⁵106、109→108→107→106とやや複雑な切り合いが増え、西半に弥生期の遺物を含むもの、東半には須恵器を出土するものにほぼ2分できる。このようにY群では多数の切り合い関係が認められ、時期差も古墳時代後期~奈良時代が中心で、弥生後期のものも混じっている。IV群では158→157、152→155→153、178→183→177、182→181→173、137→138→130→118→117等の動きがみられ、谷内より谷上方向に向う動きがかすかに見られる。北西のX群は、88→87→83、98→97、111→110、100→112→113→125、135→147→146→144がみられ、西半に弥生期の遺物を含むものが若干



第68図 土坑群時期別分布図

みられた。

群の集中度 I群~Ⅱ群はほぼまとまって15基前後集中している。しかしⅣ、Ⅴ群には30~50基と集中し、切れ目が見付け難い。

時期別の集中度 30~40は弥生期の遺物を含み、107~150についても同様の土壌が多く見られた。弥生期の遺物はナスカイト切片や土器細片が多く、SKA10の如く、遺物が据え置かれた状況で出土したものはない。また埋土の状況も、須恵器出土土壌と大きく変わった状況はない。ここでは須恵器出現以前の可能性の強い土壌群と考えておく。

5世紀後半から6世紀代にかけての須恵器を出土する土壌は46・82・117等の10基程度であった。6世紀後半代の土壌は4・9・55・56・84・92・96・106・108・125・146・150・152・153等、20~30例みられる。これらより新しい土壌も存在し、時期は決め難いが須恵器が出土するものが15~20基みられる。

更に7・8世紀以降と考えられる土壌は20・54・154・157の4例であるがいずれも東西溝の下層に位置し、その混入の可能性も捨てきれない。これらはI・II群の間とIII・IV群の間にあり、最も新しい時期のものと考えらるにふさわしい位置を示すものであろうか。

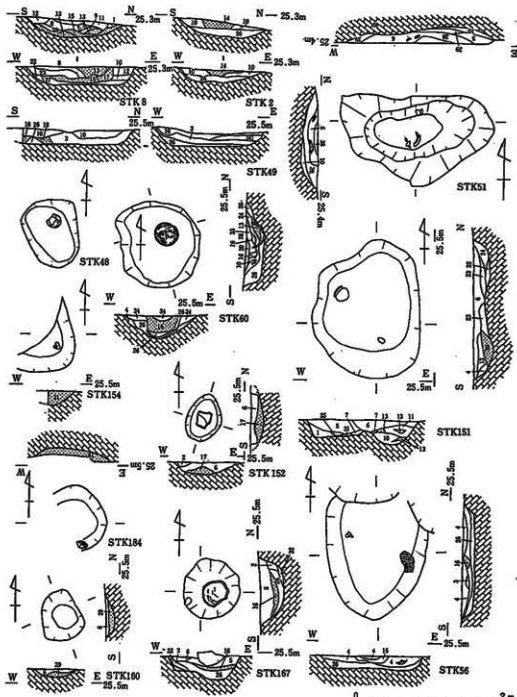
法量 長軸の長さによってa=1.5m以上、b=1~1.5m、c=0.5~1m、d=0.5m以下の4類に分類した。Z群にはa13基、b20基、c12基、d4基の49基が確認された。Y群にはa10基、b39基、c40基、d6基が数えられ、X群にはa1基、b8基、c22基、d4基が存在した。Z群には大型のものが67%、X・Y群には44%と、大型のものが東に向かうにつれて大きくなっている事が解った。また時期別には須恵器を伴わない土壌は60cm以上1m以下のものが、4基、

第8表 万崎池遺跡第V調査区土壌群法量(長軸)一覽表

	Z 群(東半)	Y 群(西半)	X 群(北西隅)	計	+4区C群
1.5m以上	13 (26.5%) △	10 (10.5%) △	1 (2.8%) ▼	24(13.4%)△	25(9.4%)
1~1.5m	20 (40.8%) △	39 (41 %) △	8 (23.8%) ▼	67(37.4%)△	86(32.2%)
0.5~1m	12 (24.5%) ▼	40 (42.1%) ▼	22 (62.8%) △	74(41.3%)▼	127(47.6%)
0.5m以下	4 (8.2%)△▼	6 (6.3%) ▼	4 (11.4%) ▼	14(7.8%)▼	29(10.8%)
計	49 (100%)	95 (99.9%)	35 (99.8%)	179(99.9%)	267(100%)

第9表 万崎池遺跡第IV調査区土壌群法量一覽表

	C 群(北部)	B 群	A 群(南部)	計	4・5地区土壌総計
1.5m以上	1 (1.1%) ▼	2 (2 %) ▼	3 (3.1%) ▼	6 (2.1%) ▼	30 (6.5%)
1.0~1.5m	19 (21.9%) ▼	31 (31.9%) △	19 (19.8%) ▼	69 (24.5%) ▼	136 (29.6%)
0.5~1m	53 (60.2%) △	48 (49.5%) ▼	56 (58.3%) △	157 (55.9%) △	231 (50.2%)
0.5m以下	15 (17.0%) △	16 (16.5%) △	18 (18.8%) △	49 (17.4%) △	63 (13.7%)
計	88 (99.9%)	97 (99.9%)	96 (100%)	281 (99.9%)	460 (100%)



- | | | | | | |
|----------|----------------|---------------|---------------|-----------------|---------------|
| 1. 灰色土 | 7. 灰褐色土(黄色土混り) | 14. 黄褐色土 | 20. 褐色混り黄灰色土 | 27. 黄灰色粘質土(灰分強) | 34. 黄灰色砂質土 |
| 2. 灰茶色土 | 8. 黄灰色土(灰分強) | 15. 暗褐色土 | 21. 茶褐色混り黄褐色土 | 28. 黄褐色粘質土 | 35. 黄褐色土 |
| 3. 灰茶黄色土 | 9. 黄灰色土(砂質) | 16. 淡褐色土 | 22. 灰色粘質土 | 29. 黄灰色粘質土 | 36. 灰茶褐色堅土 |
| 4. 灰黄色土 | 10. 黄灰色土 | 17. 黄灰色混り黄灰色土 | 23. 灰黄色粘質土 | 30. 黄灰色粘質土 | 37. 灰黄色粘土(地山) |
| 5. 灰黄褐色土 | 11. 黄褐色土 | 18. 淡褐色混り黄灰色土 | 24. 灰黄色粘質土 | 31. 緑灰色土 | 38. 黄褐色粘土 |
| 6. 灰褐色土 | 12. 黄褐色土 | 19. 淡褐色混り黄茶色土 | 25. 黄灰色粘質土 | 32. 黄灰色粘土 | 39. 黄灰色土 |
| | | | | 33. 灰黄色粘質土 | 40. 黄褐色土(地山) |

第69图 土壌平面図・断面図

bが10基、aが9基数えられた。aはZ群に6基、Y・Z群に3基存在した。5世紀後半から6世紀のものは、aがY群に1基、bがX・Y群に3基、Z群に1基見られ、cはX・Y群に1基のみ数えられる。6世紀後半のものは、aが4基、bが8基、cが4基数えられた。その他に須恵器を伴うものは、aに2基、bに4基、cに4基数えられた。7・8世紀のものは、いずれもb類で3基数えられた。

以上のことから法量が大きく東寄りに検出される須恵器を含まない土壌群と、西寄りに法量が余り大きくなく須恵器を伴う土壌群とが存在する事が判明した。また、各時期毎にも、小群毎についても、大・中・小の土壌規模の格差が見られる事も指摘し得た。

埋土の状況 いずれの土壌も上部を削平され、土壌ごとの切り合いも激しく、完形の土壌は少数である。調査により確認し得た埋土の状況は一般に中・下層に紫灰色粘質土が含まれ、上層に黄色粘土がブロック状にみられた。上層の黄色粘土は地山と余り変らない。手ざわりが地山よりやや堅く土っぽい状況である。これらの堆積状況から土壌の下層及び中層に有機物を廃棄し、土壌を掘削した際の土砂をただちに埋め戻した状況を考える事ができる。(粘土取りの穴と仮定すれば掘り返した粘土を再び埋戻す必要はない) こうした埋土の状況は全ての土壌にほぼ共通し、掘削(切り合い)→有機物の廃棄→埋め戻しの順序は均質に行われたと考えられる。

形態 隅丸長方形・長楕円形・楕円形・円形・隅丸方形とに分類された。第4調査区の多くや、Y群については、切り合いが多く原形すら判らないものも多い。形態が判明しているものの多くは楕円形で、深さ30~50cmを測る。隅丸長方形・長楕円形・小形円形のものも概して10~20cmと浅い。埋納物の形状・規模・埋納の状態により異なるものと思われる。形態分布のありかたは、規模の大きな土壌が、群の中心に集まり、小円形のものとその周辺に配置されているように見えた。

須恵器を含まない土壌群は西半と東半に分けられる事は先述した通りであるが、西半については、北西部の群に小形円形もしくは小形楕円形のものも多く、南西部の群のものは中・大形の楕円形の土壌が多く見られ、規模・形態の差と立地の差がみられた。東半の群は大形楕円形又は大形円形のものも多く見られた。

古墳時代中期の須恵器を出土する土壌は中央やや西寄りに散在する。大形のもの(Y群=82)が群の中央に存在し、周辺に中形長楕円形のもの認められ、X群には小形円又は小形楕円形のものが見られた。

古墳時代後期及び、古墳時代と考えられるが時期を確定し得ない須恵器を出土する土壌は、東端(I群)に中、小規模の楕円形土壌が存在し、中央(II・III群)に大形楕円・中形円形土壌がみられ、中央やや西寄り(Y群)に大形楕円形・中形楕円形・小形円形(93)が存在し、西端に小形楕円が多く集まり、その中に大形楕円形土壌(151・118)が含まれている。北西のX群には中形長楕円形土壌が2~3基みられる他は小形楕円形・小形円形のものが多い。

7・8世紀の土壌はI群、II群、III群に1~2基づつみられ、いずれも中形楕円形に近いものであった。

以上の事から、須恵器を含まない時期の土壌群には、形状・法量のまとまりが認められ、須恵器を含む時期の土壌群には、大形のものを中心とした複数の形状・法量を持った土壌群が認められた。

方位 方位は激しい切り合いや削平により当初のものとの変化が大きく把握が難しかった。また円形の土壌の主軸を決める事も恣意的なものとなり、余り意味がなくなってしまう。ここではそうした事柄を省いて、簡単に時期・法量との関係について触れておきたい。

須恵器を伴わない土壌はⅠ群では東へ50°前後振れる土壌がみられ、Ⅱ群にかけては西へ8°、東へ10°位振る土壌が3基認められた。Ⅲ群東寄りにはN-60°~80°-E及びN-70°-Wが3~4基存在した。Ⅰ群のものは谷の上場に出現し、谷の下方及び上方に接続する。Ⅱ群のものも同様に接続する。それぞれの群には方位・法量・形態が似ている。Ⅳ群・Ⅴ群に認められる須恵器を伴わない土壌群のうち、Ⅳ群はN-41°-E、N-45°-Wと軸の振れが大きく、Ⅴ群はN-13°・22°・23°・44°・89°-EとN-15°・82°・85°-Wの2~3方向が認められた。Ⅳ群は等高線に平行するもので、切り合いもその方向に沿って西から東へと動き、Ⅴ群は谷底から谷上に向う切り合いの北側の群(149・137・138他)と南側の(158・154・142他)といった等高線に平行する群とに分けられた。Ⅴ群は、円形に近い楕円形の小さなものが多いが、等高線に平行するものであった。

5世紀後半から6世紀前半代と考えられる土壌は、Ⅵ~Ⅷ群に散在するが、N-74°-EとN-0°・10°・11°・70°-Wの2類が見られ、等高線に平行する(46・68・81・103)と、直交する(5・82・123)とに分類できた。

須恵器を含むものについては、Ⅰ群西半にN-70°・89°-Eと等高線に平行するものがあり、Ⅵ~Ⅷ群には、N-88°・27°-Eと異なる方位を持つ土壌がみられた。前者は谷の上位にあり、等高線に平行するやや規模も大きく、長楕円形を呈するものである。後者は谷中央寄りで、円に近い楕円形を呈す。Ⅳ群には93と規模の小さい楕円形土壌がほぼ南北方向に存在している。Ⅴ群には118・129・130のa類と170・167・151・155のb類、更に西側調査区外へと続く177・183他のc類が存在した。時期は断定し得ないがa類はN-14°・50°-E、N-19°-Wと方位は分散し形態も円に近く、法量は大・中・小がそろい、切り合いも谷中から南の谷上へと向っているようであった。b類は6世紀後半代の須恵器を出土する土壌と一群をなしている。N-18°・46°・87°-Eを測り、方位はまばらであるが、楕円形のものが中心で、中規模のものの中に大規模な151が混じっている。c類はN-76°・79°-Wと谷の上部に近い南端部に位置し等高線に平行しているようである。

6世紀後半代の須恵器を出土する土壌はⅠ群に(12・4・9)が見え、いずれも単独又は切り合いの最後に位置する。12は単独で東斜面に位置し、楕円形を呈する。4・9は北斜面に位置し、円形に近くN-22°・38°-Wを向く。Ⅲ群55・56・⁶⁹/₇₀はN-0°・8°-Eとほぼ北向きで、Ⅳ群92・96・106・108は円又は楕円形を呈し、N-8°・10°-WとN-54°-Eを呈す。Ⅴ群には

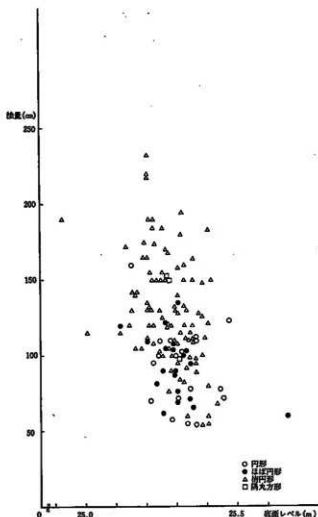
150・152・153のグループと西端調査区外へ続くグループが存在する。X群には125・126他が存在し、いずれも楕円形又は円形が多くN-13°・38°・48°・49°・76°-E、N-32°・68°-Wと分散の傾向が強い。

7〜8世紀代の須恵器を含む土壌は19=N-10°-W、54=N-82°-E、159=N-22°-E、157=N-40°-Eを測り、中形で楕円形土壌が多い。

以上の事から、土壌群の方位は掘削される立地と連接する方向が、関係していると考えられ、法量や、形態についてもゆるやかな規則性が認められるようであるが、画然たるものではない。須恵器を含まない土壌は比較的均質的で、6世紀後半代のもは法量の大小、軸の差が見られ、立地条件は余り反映されていないようである。

底面レベル 土壌群は浅い谷部に限定されて立地している。それに基づいて谷部の交差を想定すれば、それまで開折されていた小谷が、基地として利用される事により開折が止り、埋積が開

第10表 土壌長軸及び底面深高の関係



始される事になるであろう。同じ形状のものを前後の時間差の中で埋納した場合、先に埋めたものは底面レベルが深く、時間をおいた後に埋蔵したものは掘り込み面が上昇し、底面レベルは上昇しているであろう。つまり同一形態・同一法量のものは底面レベルが深いものほど古く、浅いものほど新しいと推定されるのである。この場合問題になるのは、掘削土壌の傾度である。数多く掘削しなければならなかった区域と、それほど掘削に時間的接近がなく、ゆるやかに掘削を進行させた場合の浅谷埋没の具合が異なるとすれば、これも絶対的なものとは言えないであろう。とりあえず、法量と底面レベル値の関係を見てみると、第10表のように示される。

Z群は、大規模な楕円形を呈し、底面レベルが低いものが多く、Y群は平均的分布を示し、X群は小

規模で、底面レベルの高いものが目立ってくる。

土器のありかた

周辺の土器 遺物は床土除去時及び中世遺構掘削時に散漫に出土しており、土壌上面もしくは上層にあったものが移動させられ、発掘調査により検出されたと考えられる。第4調査区では土壌群の南方で甕の底部が地上上に据えられた状態で出土している。須恵器環・甕体部等が上層には含まれていた。甕は小破片が多かったが、環は比較的個体復原可能なものがみられた。これらは土壌内土器と同一個体であったり、接合し得るものであったりする。どのような状況で、土壌群周辺に集まったものであろう。可能性としては①各土壌掘削時の供献土器②土壌群内単位の祭祀用土器③土壌群全体で行なわれた祭祀用土器④単に集落周辺の土器が流れてきたもの。①は出土土器数が少数で、均質的であり考え難い、②は、土壌内に据えられた土器の意味と集落使用土器の器種が無作為に出土するのではなく、環・壺・高環等が目につき、偏った器種組成を呈する事より考え難い。以下個別土壌内より出土する土器の接合関係に注目し、そのありかたを述べよう。

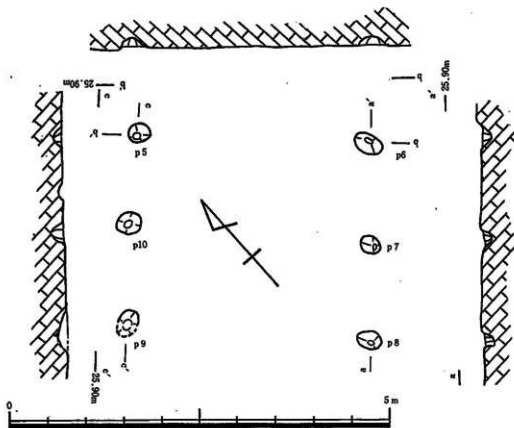
各土壌内出土土器 (図版 111) その出土状態より6類に分類できた。(Ⅰ)底面に棺状に据えられるもの(60)(Ⅱ)底面に10~20cmの土器破片を枕状に置くもの(Ⅲ)土壌中央に10~20cmの土器片を伏せるもの(Ⅳ)上層にはほぼ完形の壺等がみられるもの(Ⅴ)土壌上面に完形品が落ち込んだもの。(Ⅵ)小破片で埋土に混じって偶然はいったもの。以上である。(Ⅰ)・(Ⅱ)に使用される土器は須恵器甕・依壺がみられ(Ⅲ)には依壺や提瓶もみられた。(Ⅳ)・(Ⅴ)には須恵器の環・高環・壺等が用いられ(Ⅵ)には弥生式土器片、ナスカイト片、石鏝も含まれ、須恵器の甕や環の破片等もはいつている。

接合資料 Z群では土器の接合は認められない。④は須恵器提瓶(体部)で、土壌(144・101・96・108・55)より出土している。これらの土壌は切り合いの新しいものが多く、X・Y群の東寄りに集まっている。⑤は須恵器甕(第79図-3)の体・底部片である土壌125・58・92及び土壌130上層、更に包含層M17-d3地区より出土している。これらの土壌は切り合いも新しく分布もZ・Y群の東側とAによく似た状況である。⑥は土壌160と128から出土している。X群にみられる須恵器大型甕である。⑦も須恵器甕で、東西13m、南北14mの範囲の土壌から出土する土器が接合したものである。⑧は土壌54・82・96から出土している。Y群東寄りにみられる、須恵器壺破片であった。

出土須恵器は6世紀後半代のものが中心であった。出土地点はZ群西方のⅢ群から西に偏っていた。つまり、6世紀後半代の土壌の内、Ⅰ群のもの(=遺物が少ない)と、Ⅲ・Ⅳ群のもの(=底に据えるものがみられる。接合資料もみられる。)に差が見られた。またⅤ群とⅥ群の東半部が一群を形成し、接合資料が豊富であった。Ⅲ群中央に一群、西南端に一群存在し、X群も一群を形成している。

C 平安時代の遺構

孤立柱建物 (図版 112~113、第70~72図)



第70図 SBP 1平面図・断面図

SBP 1 (第70図) N17-d区で検出され、1間×2間以上で面積8.7㎡以上の小規模な掘立柱建物である。標高25.5mで主軸方向N-40°-Eを示す。柱穴は削平され、深さ15cm前後しか残っていない。掘方埋土は褐色系の土で、柱痕には茶褐色炭泥り土がみられた。遺物は殆ど含まれず、土師器細片が散点みられるのみであった。

SBP 2 (第71図) K15-d区で検出された1間×3間の掘立柱建物で、標高24.6mの黄灰色粘土上に存在する。建物東端は近世の耕作により段を為し、下降している。SBP 3より一段高い位置にある。主軸はほぼ東西方向でN-4°-Wを測る。これはSKA24に平行し、K14-a地区の欄Cと平行する。柱穴掘り方は30~40cmの円形を呈し、深さ10~15cm、柱痕径20cm弱である。柱間は東西1.6~1.8m、南北は3m強とやや広い。約15㎡のひろさである。

SBP 3 (第72図) K15-c区で検出された2間×5間(28.3㎡)の掘立柱建物で標高23.8m前後の平坦な黄灰色粘土の地山上に位置する。長軸は東西方向に保ち、N-75°-Eを指す。SDA 8及びSBF 1、M17区SDA 2にはほぼ平行している。柱穴は径40cm前後と他の建物(SBP 1・2)より大きく、深さは削平が著しく、10cm前後しか残存していなかったものも含まれる。建物南辺の柱穴は殆ど残っていない。埋土は黄灰色を中心としており、柱穴はやや暗い灰褐色土であった。柱穴内より黒色土器及び土師器が出土しており、平安時代前半~中葉の遺

第11表 平安時代掘立柱建物ビット一覧表

		掘り方径	深度	形状	柱穴径	遺物
SBP1 ビット	5	40×28cm		楕円		土師器細片
	6	35×30cm		楕円		
	7	25cm(褐色粘質土)	16cm	円	14cm(暗茶灰色炭混り粘質土)	
	8	26cm(黄褐色粘質土)	11cm	円	11cm(濁黄褐色炭混り粘質土)	
	9	28cm		円		
	10	31cm(黄茶色炭混り土)	15cm	円	17cm	
SBP2 ビット	12	29cm(黄色混り暗灰褐色土)	30cm	円	22cm(暗灰褐色土)	土師器片
	13		2cm		10cm(暗灰褐色土)	
	14	15cm(灰褐色土)	23cm		15cm	
	15	28cm(灰黄褐色土)	9cm		15cm(暗褐色土)	
	16	19cm	18cm		13cm(暗灰褐色土)	
	17	24cm	32cm		16cm(灰褐色土)	
	18	30cm	26cm		(灰褐色土)	
	19	24cm	39cm		12cm(灰褐色土)	
	20	21cm	20cm		(暗灰褐色土)	
	21	21cm(黄色混り灰褐色土)	19cm		15cm(暗灰黄褐色砂質土)	
	SBP3 ビット	22	28cm(灰褐色土)	12cm	円	
23		30cm(灰褐色土)	17cm	円	11cm	弥生式土器(柱穴内)
24		39cm(灰褐色土)	20cm	円	16cm	土師器・黒色土器(柱穴内)
25		40cm(灰色土)	14cm	円		
26		35cm(灰褐色土)	9cm	円	20cm	
27		32cm(灰褐色土)	8cm	円	17cm	
28		32cm(灰褐色土)	18cm	円	18cm	
29		30cm(黄灰褐色砂質土)	16cm	円	11cm	
30		38cm(黄灰褐色砂質土)	9cm	円	12cm	
31		18cm(黄灰色粘質土)	6cm	円		
32		36cm(灰褐色粘質土)	18cm	円	19cm	土師器
33		30cm(黄灰色粘質土)	5cm	円	18cm	

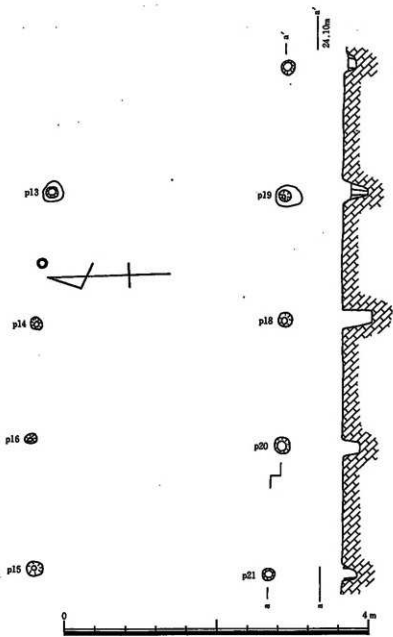
標と考えている。

ビット群 (第73図; 図版113)

ビット群4 調査区中央南端M15地区で検出された径40~50cmのビット群である。標高24.2m~24.5mに位置する。東西方向の谷の南岸斜面地にあたる。埋土は茶灰色土で5~10個検出された。M14地区の調査区南壁下層に堆積していた奈良~平安期の土器群に関連するものであろう。

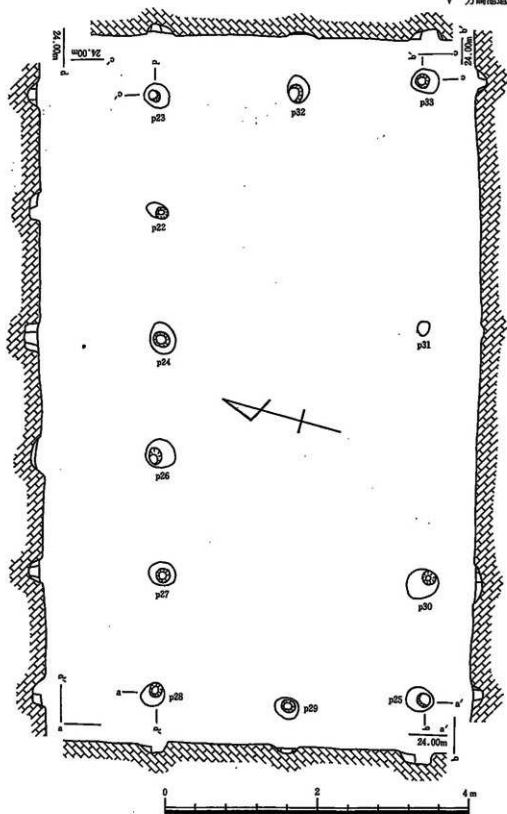
ビット群5 調査区北東部、J~K-13~14地区に集中する柱穴群である。弥生後期の土器・

SKA 2

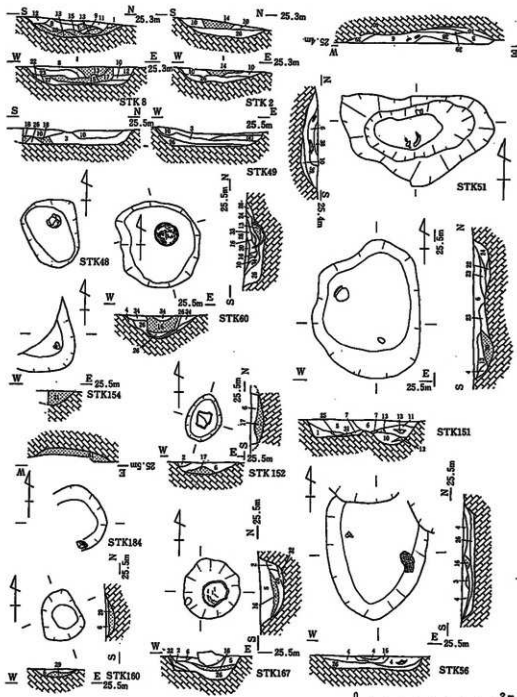


第71図 SBF 2 平面図・断面図

ビットと入り混じっており、建物の復原は成し得なかったが、7個のビットが東西方向に約2m間隔で並びSBF 1と認定し得るものがみられた。東端のビットの間隔がやや広く、西側6個により5間×2間以上の独立柱建物の可能性も強い。柱穴径は30cm前後の円又は楕円形で、柱底径15cm前後を測る。このSBF 1の南側には、SBF 2・3が柱穴3個による構成で認められる。SBF 1は方位がN-75°-EであったがSBF 2はN-70°-E、SBF 3はN-88°-Eを指す。標高は24.6mから25mの間に位置している。



第72図 S B P 3 平面図・断面図



- | | | | | | |
|----------|----------------|---------------|---------------|-----------------|---------------|
| 1. 灰色土 | 7. 灰褐色土(黄色土混り) | 14. 黄褐色土 | 20. 褐色混り黄灰色土 | 27. 黄灰色粘質土(灰分強) | 34. 黄灰色砂質土 |
| 2. 灰茶色土 | 8. 黄灰色土(灰分強) | 15. 暗褐色土 | 21. 茶褐色混り黄褐色土 | 28. 黄灰色粘質土 | 35. 黄褐色土 |
| 3. 灰茶黄色土 | 9. 黄灰色土(砂質) | 16. 淡褐色土 | 22. 灰色粘質土 | 29. 黄灰色粘質土 | 36. 灰茶褐色堅土 |
| 4. 灰黄色土 | 10. 黄灰色土 | 17. 黄褐色混り黄灰色土 | 23. 灰黄色粘質土 | 30. 黄褐色粘質土 | 37. 灰黄色粘土(地山) |
| 5. 灰黄褐色土 | 11. 黄褐色土 | 18. 淡褐色混り黄褐色土 | 24. 灰黄色粘質土 | 31. 緑灰色土 | 38. 黄褐色粘土 |
| 6. 灰褐色土 | 12. 黄褐色土 | 19. 淡褐色混り黄茶色土 | 25. 黄灰色粘質土 | 32. 黄灰色粘土 | 39. 黄灰色土 |
| | | | | 33. 灰黄色砂質土 | 40. 黄褐色土(地山) |

第69图 土壤平面图・断面图

bが10基、aが9基数えられた。aはZ群に6基、Y・Z群に3基存在した。5世紀後半から6世紀のものは、aがY群に1基、bがX・Y群に3基、Z群に1基見られ、cはX・Y群に1基のみ数えられる。6世紀後半のものは、aが4基、bが8基、cが4基数えられた。その他に須恵器を伴うものは、aに2基、bに4基、cに4基数えられた。7・8世紀のものは、いずれもb類で3基数えられた。

以上のことから法量が大きく東寄りに検出される須恵器を含まない土壌群と、西寄りに法量が余り大きくなく須恵器を伴う土壌群とが存在する事が判明した。また、各時期毎にも、小群毎についても、大・中・小の土壌規模の格差が見られる事も指摘し得た。

埋土の状況 いずれの土壌も上部を削平され、土壌ごとの切り合いも激しく、完形の土壌は少数である。調査により確認し得た埋土の状況は一般に中・下層に紫灰色粘質土が含まれ、上層に黄色粘土がブロック状にみられた。上層の黄色粘土は地山と余り変らない。手ざわりが地山よりやや堅く土っぽい状況である。これらの堆積状況から土壌の下層及び中層に有機物を廃棄し、土壌を掘削した際の土砂をただちに埋め戻した状況を考える事ができる。(粘土取りの穴と仮定すれば掘り返した粘土を再び埋戻す必要はない) こうした埋土の状況は全ての土壌にほぼ共通し、掘削(切り合い)→有機物の廃棄→埋め戻しの順序は均質に行われたと考えられる。

形態 隅丸長方形・長楕円形・楕円形・円形・隅丸方形とに分類された。第4調査区の多くや、Y群については、切り合いが多く原形すら判らないものも多い。形態が判明しているものの多くは楕円形で、深さ30~50cmを測る。隅丸長方形・長楕円形・小形円形のものも概して10~20cmと浅い。埋納物の形状・規模・埋納の状態により異なるものと思われる。形態分布のありかたは、規模の大きな土壌が、群の中心に集まり、小円形のものとその周辺に配置されているように見えた。

須恵器を含まない土壌群は西半と東半に分けられる事は先述した通りであるが、西半については、北西部の群に小形円形もしくは小形楕円形のものも多く、南西部の群のものは中・大形の楕円形の土壌が多く見られ、規模・形態の差と立地の差がみられた。東半の群は大形楕円形又は大形円形のものも多く見られた。

古墳時代中期の須恵器を出土する土壌は中央やや西寄りに散在する。大形のもの(Y群=82)が群の中央に存在し、周辺に中形長楕円形のもの認められ、X群には小形円又は小形楕円形のものが見られた。

古墳時代後期及び、古墳時代と考えられるが時期を確定し得ない須恵器を出土する土壌は、東端(I群)に中、小規模の楕円形土壌が存在し、中央(II・III群)に大形楕円・中形円形土壌がみられ、中央やや西寄り(Y群)に大形楕円形・中形楕円形・小形円形(93)が存在し、西端に小形楕円が多く集まり、その中に大形楕円形土壌(151・118)が含まれている。北西のX群には中形長楕円形土壌が2~3基みられる他は小形楕円形・小形円形のものが多い。

7・8世紀の土壌はII群、III群、IV群に1~2基づつみられ、いずれも中形楕円形に近いものであった。

以上の事から、須恵器を含まない時期の土壌群には、形状・法量のまとまりが認められ、須恵器を含む時期の土壌群には、大形のものを中心とした複数の形状・法量を持った土壌群が認められた。

方位 方位は激しい切り合いや削平により当初のものとの変化が大きく把握が難しかった。また円形の土壌の主軸を決める事も恣意的なものとなり、余り意味がなくなってしまう。ここではそうした事柄を省いて、簡単に時期・法量との関係について触れておきたい。

須恵器を伴わない土壌はⅠ群では東へ50°前後振れる土壌がみられ、Ⅱ群にかけては西へ8°、東へ10°位振る土壌が3基認められた。Ⅲ群東寄りにはN-60°~80°-E及びN-70°-Wが3~4基存在した。Ⅰ群のものは谷の上場に出現し、谷の下方及び上方に接続する。Ⅱ群のものも同様に接続する。それぞれの群には方位・法量・形態が似ている。Ⅳ群・Ⅴ群に認められる須恵器を伴わない土壌群のうち、Ⅳ群はN-41°-E、N-45°-Wと軸の振れが大きく、Ⅴ群はN-13°・22°・23°・44°・89°-EとN-15°・82°・85°-Wの2~3方向が認められた。Ⅳ群は等高線に平行するもので、切り合いもその方向に沿って西から東へと動き、Ⅴ群は谷底から谷上に向う切り合いの北側の群(149・137・138他)と南側の(158・154・142他)といった等高線に平行する群とに分けられた。Ⅴ群は、円形に近い楕円形の小さなものが多いが、等高線に平行するものであった。

5世紀後半から6世紀前半代と考えられる土壌は、Ⅵ~Ⅷ群に散在するが、N-74°-EとN-0°・10°・11°・70°-Wの2類が見られ、等高線に平行する(46・68・81・103)と、直交する(5・82・123)とに分類できた。

須恵器を含むものについては、Ⅰ群西半にN-70°・89°-Eと等高線に平行するものがあり、Ⅵ~Ⅷ群には、N-88°・27°-Eと異なる方位を持つ土壌がみられた。前者は谷の上位にあり、等高線に平行するやや規模も大きく、長楕円形を呈するものである。後者は谷中央寄りで、円に近い楕円形を呈す。Ⅳ群には93と規模の小さい楕円形土壌がほぼ南北方向に存在している。Ⅴ群には118・129・130のa類と170・167・151・155のb類、更に西側調査区外へと続く177・183他のc類が存在した。時期は断定し得ないがa類はN-14°・50°-E、N-19°-Wと方位は分散し形態も円に近く、法量は大・中・小がそろい、切り合いも谷中から南の谷上へと向っているようであった。b類は6世紀後半代の須恵器を出土する土壌と一群をなしている。N-18°・46°・87°-Eを測り、方位はまばらであるが、楕円形のものが中心で、中規模のものの中に大規模な151が混じっている。c類はN-76°・79°-Wと谷の上部に近い南端部に位置し等高線に平行しているようである。

6世紀後半代の須恵器を出土する土壌はⅠ群に(12・4・9)が見え、いずれも単独又は切り合いの最後に位置する。12は単独で東斜面に位置し、楕円形を呈する。4・9は北斜面に位置し、円形に近くN-22°・38°-Wを向く。Ⅲ群55・56・⁶⁹/₇₀はN-0°・8°-Eとほぼ北向きで、Ⅳ群92・96・106・108は円又は楕円形を呈し、N-8°・10°-WとN-54°-Eを呈す。Ⅴ群には

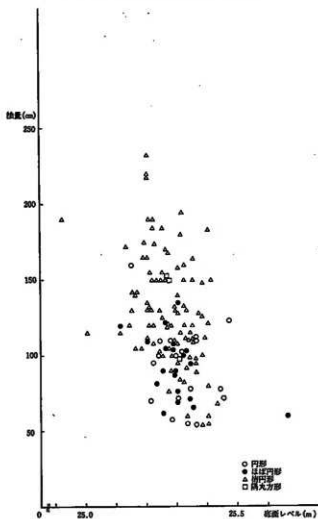
150・152・153のグループと西端調査区外へ続くグループが存在する。X群には125・126他が存在し、いずれも楕円形又は円形が多くN-13°・38°・48°・49°・76°-E、N-32°・68°-Wと分散の傾向が強い。

7〜8世紀代の須恵器を含む土壌は19=N-10°-W、54=N-82°-E、159=N-22°-E、157=N-40°-Eを測り、中形で楕円形土壌が多い。

以上の事から、土壌群の方位は掘削される立地と連接する方向が、関係していると考えられ、法量や、形態についてもゆるやかな規則性が認められるようであるが、画然たるものではない。須恵器を含まない土壌は比較的均質的で、6世紀後半代のもは法量の大小、軸の差が見られ、立地条件は余り反映されていないようである。

底面レベル 土壌群は浅い谷部に限定されて立地している。それに基づいて谷部の交差を想定すれば、それまで開折されていた小谷が、基地として利用される事により開折が止り、埋積が開

第10表 土壌長軸及び底面深高の関係



始される事になるであろう。同じ形状のものを前後の時間差の中で埋納した場合、先に埋めたものは底面レベルが深く、時間をおいた後に埋蔵したものは掘り込み面が上昇し、底面レベルは上昇しているであろう。つまり同一形態・同一法量のものは底面レベルが深いものほど古く、浅いものほど新しいと推定されるのである。この場合問題になるのは、掘削土壌の傾度である。数多く掘削しなければならなかった区域と、それほど掘削に時間的近接がなく、ゆるやかに掘削を進行させた場合の浅谷埋積の具合が異なるとすれば、これも絶対的なものとは言えないであろう。とりあえず、法量と底面レベル値の関係を見てみると、第10表のように示される。

Z群は、大規模な楕円形を呈し、底面レベルが低いものが多く、Y群は平均的分布を示し、X群は小

規模で、底面レベルの高いものが目立ってくる。

土器のありかた

周辺の土器 遺物は床土除去時及び中世遺構掘削時に散漫に出土しており、土壌上面もしくは上層にあったものが移動させられ、発掘調査により検出されたと考えられる。第4調査区では土壌群の南方で甕の底部が地上上に据えられた状態で出土している。須恵器環・甕体部等が上層には含まれていた。甕は小破片が多かったが、環は比較的個体復原可能なものがみられた。これらは土壌内土器と同一個体であったり、接合し得るものであったりする。どのような状況で、土壌群周辺に集まったものであろう。可能性としては①各土壌掘削時の供献土器②土壌群内単位の祭祀用土器③土壌群全体で行なわれた祭祀用土器④単に集落周辺の土器が流れてきたもの。①は出土土器数が少数で、均質的であり考え難い、②は、土壌内に据えられた土器の意味と集落使用土器の器種が無作為に出土するのではなく、環・壺・高環等が目につき、偏った器種組成を呈する事より考え難い。以下個別土壌内より出土する土器の接合関係に注目し、そのありかたを述べよう。

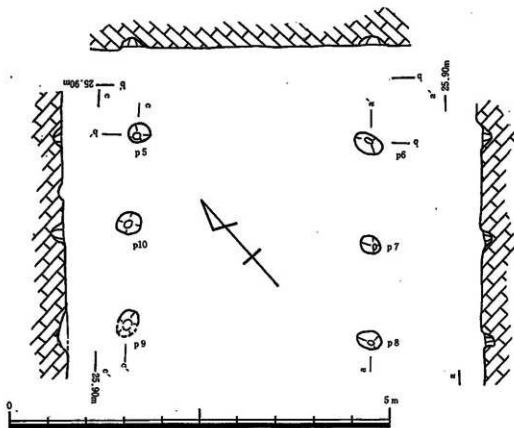
各土壌内出土土器 (図版 111) その出土状態より6類に分類できた。(Ⅰ)底面に棺状に据えられるもの(60)(Ⅱ)底面に10~20cmの土器破片を枕状に置くもの(Ⅲ)土壌中央に10~20cmの土器片を伏せるもの(Ⅳ)上層にはほぼ完形の壺等がみられるもの(Ⅴ)土壌上面に完形品が落ち込んだもの。(Ⅵ)小破片で埋土に混じって偶然はいったもの。以上である。(Ⅰ)・(Ⅱ)に使用される土器は須恵器甕・依壺がみられ(Ⅲ)には依壺や提瓶もみられた。(Ⅳ)・(Ⅴ)には須恵器の環・高環・壺等が用いられ(Ⅵ)には弥生式土器片、ナスカイト片、石鏃も含まれ、須恵器の甕や環の破片等もはいつている。

接合資料 Z群では土器の接合は認められない。④は須恵器提瓶(体部)で、土壌(144・101・96・108・55)より出土している。これらの土壌は切り合いの新しいものが多く、X・Y群の東寄りに集まっている。⑤は須恵器甕(第79図-3)の体・底部片である土壌125・58・92及び土壌130上層、更に包含層M17-d3地区より出土している。これらの土壌は切り合いも新しく分布もZ・Y群の東側とAによく似た状況である。⑥は土壌160と128から出土している。X群にみられる須恵器大型甕である。⑦も須恵器甕で、東西13m、南北14mの範囲の土壌から出土する土器が接合したものである。⑧は土壌54・82・96から出土している。Y群東寄りにみられる、須恵器壺破片であった。

出土須恵器は6世紀後半代のものが中心であった。出土地点はZ群西方のⅢ群から西に偏っていた。つまり、6世紀後半代の土壌の内、Ⅰ群のもの(=遺物が少ない)と、Ⅲ・Ⅳ群のもの(=底に据えるものがみられる。接合資料もみられる。)に差が見られた。またⅤ群とⅥ群の東半部が一群を形成し、接合資料が豊富であった。Ⅲ群中央に一群、西南端に一群存在し、X群も一群を形成している。

C 平安時代の遺構

孤立柱建物 (図版 112~113、第70~72図)



第70図 SBP 1平面図・断面図

SBP 1 (第70図) N17-d区で検出され、1間×2間以上で面積8.7㎡以上の小規模な掘立柱建物である。標高25.5mで主軸方向N-40°-Eを示す。柱穴は削平され、深さ15cm前後しか残っていない。掘方埋土は褐色系の土で、柱痕には茶褐色炭泥り土がみられた。遺物は殆ど含まれず、土師器細片が散点みられるのみであった。

SBP 2 (第71図) K15-d区で検出された1間×3間の掘立柱建物で、標高24.6mの黄灰色粘土上に存在する。建物東端は近世の耕作により段を為し、下降している。SBP 3より一段高い位置にある。主軸はほぼ東西方向でN-4°-Wを測る。これはSKA24に平行し、K14-a地区の欄Cと平行する。柱穴掘り方は30~40cmの円形を呈し、深さ10~15cm、柱痕径20cm弱である。柱間は東西1.6~1.8m、南北は3m強とやや広い。約15㎡のひろさである。

SBP 3 (第72図) K15-c区で検出された2間×5間(28.3㎡)の掘立柱建物で標高23.8m前後の平坦な黄灰色粘土の地山上に位置する。長軸は東西方向に保ち、N-75°-Eを指す。SDA 8及びSBF 1、M17区SDA 2にはほぼ平行している。柱穴は径40cm前後と他の建物(SBP 1・2)より大きく、深さは削平が著しく、10cm前後しか残存していなかったものも含まれる。建物南辺の柱穴は殆ど残っていない。埋土は黄灰色を中心としており、柱穴はやや暗い灰褐色土であった。柱穴内より黒色土器及び土師器が出土しており、平安時代前半~中葉の遺

第11表 平安時代掘立柱建物ビット一覧表

		掘り方径	深度	形状	柱穴径	遺物
SBP ピット	5	40×28cm		楕円		
	6	35×30cm		楕円		
	7	25cm(褐色粘質土)	16cm	円	14cm(暗茶灰色炭混り粘質土)	土師器細片
	8	26cm(黄褐色粘質土)	11cm	円	11cm(濁黄褐色炭混り粘質土)	
	9	28cm		円		土師器細片
	10	31cm(黄茶色炭混り土)	15cm	円	17cm	
SBP 2 ピット	12	29cm(黄色混り暗灰褐色土)	30cm	円	22cm(暗灰褐色土)	
	13		2cm		10cm(暗灰褐色土)	
	14	15cm(灰褐色土)	23cm		15cm	
	15	28cm(灰黄褐色土)	9cm		15cm(暗褐色土)	
	16	19cm	18cm		13cm(暗灰褐色土)	
	17	24cm	32cm		16cm(灰褐色土)	
	18	30cm	26cm		(灰褐色土)	
	19	24cm	39cm		12cm(灰褐色土)	
	20	21cm	20cm		(暗灰褐色土)	
	21	21cm(黄色混り灰褐色土)	19cm		15cm(暗灰黄褐色砂質土)	
	SBP 3 ピット	22	28cm(灰褐色土)	12cm	円	14cm
23		30cm(灰褐色土)	17cm	円	11cm	弥生式土器(柱穴内)
24		39cm(灰褐色土)	20cm	円	16cm	土師器・黒色土器(柱穴内)
25		40cm(灰色土)	14cm	円		
26		35cm(灰褐色土)	9cm	円	20cm	
27		32cm(灰褐色土)	8cm	円	17cm	
28		32cm(灰褐色土)	18cm	円	18cm	
29		30cm(黄灰褐色砂質土)	16cm	円	11cm	
30		38cm(黄灰褐色砂質土)	9cm	円	12cm	
31		18cm(黄灰色粘質土)	6cm	円		
32		36cm(灰褐色粘質土)	18cm	円	19cm	土師器
33		30cm(黄灰色粘質土)	5cm	円	18cm	

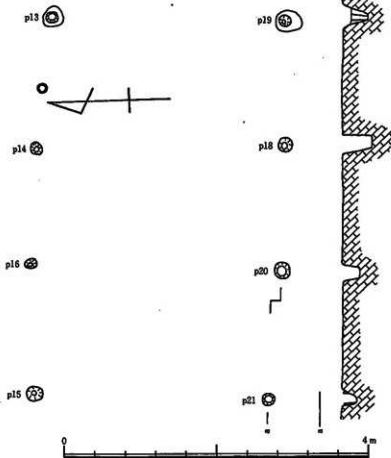
標と考えている。

ピット群 (第73図; 図版113)

ピット群4 調査区中央南端M15地区で検出された径40~50cmのピット群である。標高24.2m~24.5mに位置する。東西方向の谷の南岸斜面地にあたる。埋土は茶灰色土で5~10個検出された。M14地区の調査区南壁下層に堆積していた奈良~平安期の土器群に関連するものであろう。

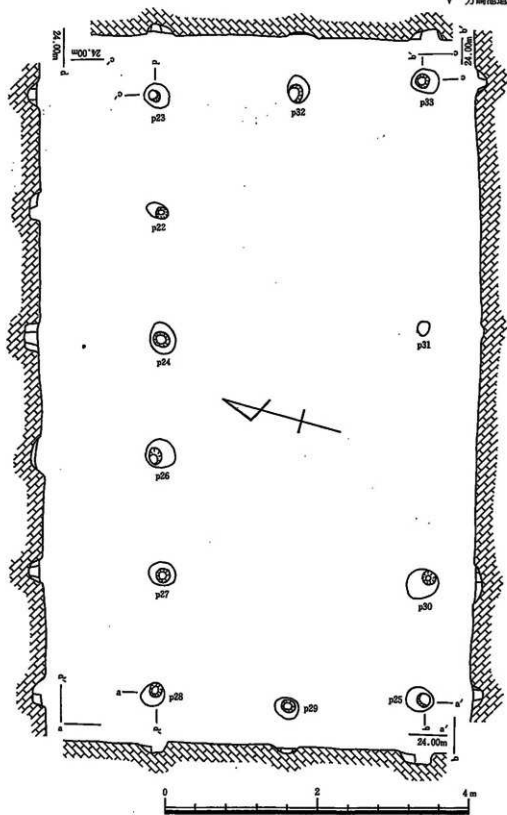
ピット群5 調査区北東部、J~K-13~14地区に集中する柱穴群である。弥生後期の土器・

SKA 2

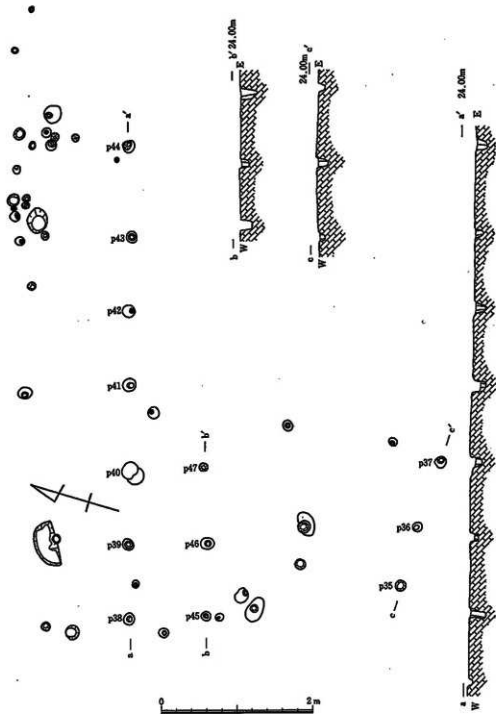


第71図 SBF 2 平面図・断面図

ピットと入り混じっており、建物の復原は成し得なかったが、7個のピットが東西方向に約2m間隔で並びSBF 1と認定し得るものがみられた。東端のピットの間隔がやや広く、西側6個により5間×2間以上の独立柱建物の可能性も強い。柱穴径は30cm前後の円又は楕円形で、柱底径15cm前後を測る。このSBF 1の南側には、SBF 2・3が柱穴3個による構成で認められる。SBF 1は方位がN-75°-EであったがSBF 2はN-70°-E、SBF 3はN-88°-Eを指す。標高は24.6mから25mの間に位置している。



第72図 S B P 3 平面図・断面図



第73図 SBF1、ピット群5平面図・断面図

溝

SDA1 (第66図) SDA2の北側にはほぼ平行して流れる2条の溝が合流したものである。東端はSE1と続く。北側にはほぼ平行する幅10cm以下の小溝が数条みられ、この溝に伴う耕作の痕跡と考えられた。幅70cm前後、深さ10~20cmの溝が2条合流し、近世には埋設している。須恵器窯壁片と思われる遺物(図版242-10)が出土している。

SDA2 調査区西南隅M17地区に東西に流れる幅0.5~1.2m長さ約30mの小溝である。西端部は調査区外へ続き標高25.5m、東端はSP6に流れ込み、谷へと続いている。出土遺物は、下層の土壌群から出土する須恵器や弥生式土器の破片がみられるが、一部近世の陶器も含まれていた。深さ20~30cmで、埋土は灰褐色土であった。

SDA5 調査区中央南端に東西に流れる数条の溝がみられ、最も古い時期のものが、平安時代まで遡ると考えられるものである。最終的に埋設するのは近代に至ってからである。最も多く出土する遺物は近世のもので、関連すると考えられる土壌や井戸も近世のものが多い。幅60cm~1m、長さ30~40mを測る。平安時代から中世の土層は東半下層にのみ残っていた。

SDA8 K14地区に東西方向に流れる幅0.5~0.7m、長さ約18mのほぼ直線のもので深さ5~10cmである。黄色粘土層がやや風化した地山に掘削され、埋土は灰黄色粘質土である。遺物は、土師器細片のみであった。溝の東側の延長上にSBP3の長軸中央があたり、SBF1ともほぼ平行しこの時期に該当する遺構と考えられる。周辺SKA14や15にも奈良時代の須恵器が出土し、近世における削平を受けているが、まとまりをもった古代の遺構群のひとつと想定された。

D 近世の遺構

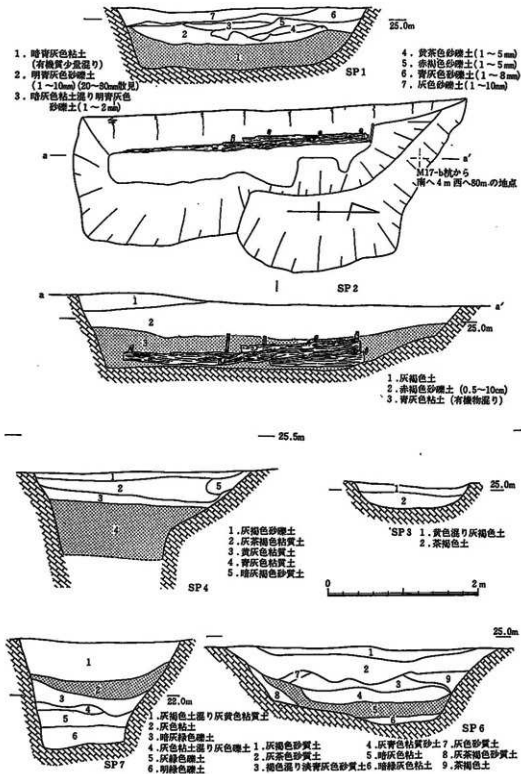
土壌・溝・井戸

段丘面上に掘削された近世の遺構に居住と関連するものは少ない。溝・池・井戸等、農耕に伴う灌漑用の水利遺構が多かった。東端の段丘崖上には、SKA19~21がみられ、SKA17やSE5がSDA11とともに機能していたようである。またSKA13・14とSDA10、SKA9・5、SDA4とSE2、SDA3とSP7等が関連していたと思われる。つまり、現在では、段丘面上の溝や、ポンプアップした土管から流して単一の水源によると見られる耕地も、近世までは、段々をなす南北に長い水田の一枚毎に水路と貯水土壌・井戸が伴ったと言えるのである。

それぞれの埋土は灰色砂又は暗灰褐色砂質土で、下層には粘土がみられた。

淵 (第74図; 図版115)

調査区南西部において東西方向に延びる埋設谷が存在する。その中には江戸時代の遺物を含む円形の井戸と、長方形の淵が連続して設けられていた。SP3やSP4にはSDA1が対応し、SP6にはSDA2が対応する。おそらく台地上に灌漑用水を導く為の施設と思われる。いずれも灰褐色砂質土及び灰黄色粘質土を埋土とし、下層に暗灰色粘土層が貯っている。下層の暗灰色粘土は直接地山(黄青色礫土及び黄青色粘土)に接しているものが一般であるが、更に下層に暗緑灰色粘土や灰緑色礫土の堆積するものも含まれる。いずれも近世~近代の遺物が含まれ、埋土も共通する。



第74図 SP1~7遺構平面図・断面図

SP1 調査区の東端に位置し、大平寺集落が乗る台地の分水嶺にあたる地点である。東西6m以上、南北3.2mを測る長方形で、深さ70~80cmを測る。底面は平坦で、T.P.+24.4mを測る。上層厚さ50cm中の灰色砂礫土、青灰色砂礫土、暗灰色粘土混り明青灰色砂礫土、黄褐色砂礫土、明黄褐色砂礫土等が堆積し、下層は厚さ約30cmにわたって暗青灰色粘土が堆積し、有機物も含まれていた。

出土遺物には近世染付等が含まれていた。

SP2 SP3の更に西方約1mに存在する。東西9m、南北4.5m、深さ約1mを測る長方形で、東岸には護岸用の杭列と板材が設置されている。底面はほぼ平坦で、壁面は北側がなだらかで、南側が急傾斜であった。底面の絶対高はT.P.+24.4mである。上層は灰褐色土及び、赤褐色砂礫土が20~50cmの厚さで堆積し、下層は青灰色粘土層が約40cmの厚さでみられた。

遺物は近世染付、瓦、木製下駄等が出土した。

SP3 SP4の西方1mに位置する。上層に黄色混り灰褐色土、下層に茶褐色土層がみられる。東西3m、南北1.5mを測る長方形で、底面はほぼ平坦である。深さ約15cmを測った。

SP4 SP6の西方10mの位置に存在する円形の井戸である。東西3.7m、南北3mを測る。深さは1m以上で底面は確認し得なかった。上層には灰褐色砂礫土・灰茶褐色粘質土・黄褐色粘質土・暗灰褐色砂質土等、酸性土層が約40cmみられ、下層には70cm以上の青灰色粘質土層が堆積していた。

SP6 SP7の西8mにあたる。東西に長い長方形で底面は南側がゆるやかなスロープで北半部が丸く窪んでいる。東西6.5m、南北3.6m、深さ1mを測る。底面の絶対高はT.P.+23.8mを測った。

上層には灰褐色砂質土が約15cm堆積し、その下に灰茶色砂質土が30cm前後みられ、続いて褐色混り淡青灰色砂質土、灰色砂質土、茶褐色土等が10~20cm堆積していた。ここで更に下層の灰青色粘質砂土層と南北の壁面からの続き方がやや異なる事が指道できる。灰青色粘質砂土層は下層の暗灰色粘土の中に包まれるように堆積していた。暗灰色粘土は厚さ約20cmで有機物を含む。更に北半部の窪みには暗緑灰色粘土が約10cmの厚さでみられた。

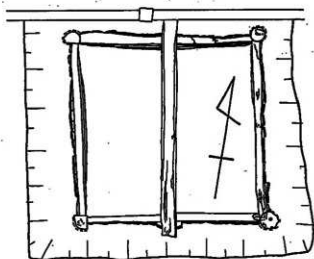
出土遺物には近世染付、瓦等がみられる。

SP7 は調査区中央南端に位置する。南北2mを測り、深さ1.3mである。上層は灰褐色土混り灰黄色粘質土が50cm堆積し、中層に灰色粘土が20cm堆積していた。下層60cmには灰色粘土混り灰色礫土・灰緑色礫土・明緑色礫土が堆積していた。

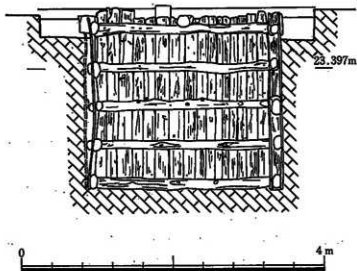
出土遺物には近世染付等がみられる。

E 近代井戸 (第75図; 図版115)

SE8 調査区中央やや南東寄りに木枠井戸が検出された。東西内側2.3m、南北内側2.25mとほぼ正方形を呈す。四隅に25cm前後の柱を建て、ほぞ穴をあげ、横木を35~40cmの間隔で5段、渡している。その外側に幅10~20cm、厚さ1cm前後、長さ2.2mの板材を並べている。その上に



近世井戸



第75図 SE3平面図・断面図

想定し得る若干の遺物の検出に留っている。その場合も、調査区の南・北側に東西に入り組む小谷の周辺に散見される。

弥生後期から古墳時代の初頭に至り、調査区内の北と南の段丘面上は活況を呈し、竪穴住居、土壇、ピット群がみられ、それを区画し、取り巻く環状の溝も検出された。古墳時代中・後期に多数掘削される土壇基群もこの時期から開始された可能性も考えられる。

この時期に東北丘陵上に確認される遺跡としては小阪遺跡^④・野々井遺跡^{②-③}・半田遺跡^⑤等が知られている。最も広範囲に調査されている野々井遺跡では、環濠がめぐり、竪穴住居跡群が検出され、遺跡立地も、河岸段丘から中位段丘面上に上った所にあたる。立地の面では高地であり、農耕社会の集落立地としては不適当と考えられるが、農耕への依存度や、埋没谷の面積及びその利用度と

は、中央南北方向に径15cm程、長さ2.3m程の材木を横たわせ、更にその上に東西方向で板材を並べて蓋にしていた。掘り方は東西3.6m、南北3.3mを掘り、青灰色砂礫土で埋めていた。

遺物は殆どなかった。

F 小結

万崎池遺跡第Ⅰ調査区で検出された遺構について若干のまとめを行なう。時代を遡って土地利用の変遷を念頭に置きつつ述べる事にする。

旧石器・縄文時代は第Ⅰ調査区の南と北に谷が存在し、徐々に埋没する状況にあった。その周辺に狩猟・採集の為に人類が行動した事は遺物によって類推できる。

弥生時代後期までは顕著な遺構が存在せず、当調査区外に居住地が営まれたと

の関係から生活空間として適当であった可能性も考えられる。

古墳時代中・後期を中心に多数の群集土壌が調査区南西の埋没谷周辺に検出された。埋土の均質性、規模・立地・形態・出土遺物等、特別他と隔絶する様子は窺えない。しかしその群としてのありかたは時代、切り合いの方向等の差を見ても一定のゆるやかな規則性が見られた。当初不定形遺構としてしか認識し得ず、上層における遺物、切り合い関係を充分記録できなかった事がくやまれる。今後、段丘面の小規模埋没谷（例＝①段丘礫層の間にある灰黄色粘土、②段丘シルト層の中にみられる灰緑色粘土等々）の中と縁辺には土壌群が検出される事を予想して調査が行なわれなければならない。そうした慎重調査の積み重ねにより、土壌群の時期毎の単位が抽出され、遺構主体の散や集団の規模が復元されるであろう。これらの土壌の性格は、壺・環・高環の供献と破損貯蔵容器の中心主体への転用等の遺物のあり方、紫灰色粘質土の位置、切り合いの連続性等から一定の丁寧な精神的配慮を伴う、有機物の埋納であったと言える。土器の伴わない土壌も、有機物による供献が考えられる。また約 200基の土壌が群集し、一定のグループ毎にまとまって連続的に切り合う事は、そうした有機物の埋納を無秩序に行ったものでないと証明できる。万崎池遺跡第Ⅶ調査区の土壌群は、弥生後期・古墳時代前期から奈良平安時代に至る約 700年の間、この地で⁵⁾そうした精神的紐帯によって結合した集団の基地として利用した痕跡と言えるのではないだろうか。

奈良・平安時代 8・9世紀代の遺物は後世の遺構内や、包含層から若干出土している。L14・15、M14～16地区に比較的多く見られ、調査区に南接して生活跡が存在する可能性が高い。9世紀後半から10世紀後半にかけてはこの台地上の北端と南端に集落が存在した。SBP1・2は1×3間の小規模なものである。SBP3は2×5間と大きく、SBF1も建物跡の可能性を残している。集落内の建物相互に規模の差がみられ、存続期間も長くなく、周辺に灌漑用施設が見られない事が指摘される。段丘上は依然、原野のままであった。段丘縁辺の埋没谷に遺物の若干の集中がみられ、建物群もそれに近接している。これらの集落は調査区南側の太平寺集落の地下に存在するであろう8・9世紀の建物群が、拡大して新たにこの段丘面に出現したものと考えられる。その際、段丘全面に集落が展開し、本格的な耕地が営まれたといった形跡はない。万崎池の埋没谷に構築されたと考えられる池の水を管理し、それによって新たに拡大された、又は復活した、洪積段丘の縁辺の耕地を管理した建物群であろうか。⁶⁾

近世 これらの段丘面が耕地と化すのは近世前期以降である。その後もL16地区以西には至らず、それより低い段丘面上に水路を設け、井戸・土壌を掘削し、水を確保し肥料を貯蔵したのであった。これらも時間的累積の結果であり、西端の面から徐々に東に向けて土壌や水路の数が増してゆく様子がうかがえた。

調査区西南部埋没谷中には大形土壌が東西に並び、水溜場の様相を呈していた。これらの施設から北に伸びる溝はなく、西南から流入する溝と、東方に流出する溝のみ検出されている。これらの灌水施設は西南方向の水田又は畑から排水されたもので、一旦ここに溜めておいて後、北側

の段丘面上の耕地に運搬されたものであろう。現在、この谷の上に石津川からポンプアップして
いる土管が埋め込まれている。これはそうした近世の水利関係を物語るもので、今でも台地北東
部を潤している。

第4節 遺物

1 旧石器・縄文時代・弥生時代の石器

ナイフ形石器は、調査区北東部J・K・L13～15地区の表土及び床土等からの出土と、南西部、
土壌群内から出土するものに分かれる。いずれも、段丘上に開折された小谷の周辺又はその内部
より出土しているのである。

縄文時代も旧石器時代同様、当調査区では石器しか確認されていない。石鏃・石匙が南西区と
北区で出土していた。

旧石器時代 (第76図一1～6; 図版238)

今回出土した旧石器と考えられるものはすべて後世の包含層中にあり2次堆積物である。図示
した6点以外に、風化した剥片、チップも数点ある。6点のうちナイフ形石器が4点(1～3・
6)、翼状剥片が1点(5)、石核様剥片1点(4)である。いずれもササカイト製である。1
はファーストフレイクを素材とし、1・2・3は翼状剥片を素材としたいわゆる国府型ナイフ形
石器である。6はやや縦長の剥片を素材とした切出し形をしたナイフ形石器である。1～3は松
葉分類による形態Aとされているものであり、6は形態Bになるか形態Cになるか即断できな
いがCとした方がよいようである。打面部から側辺にかけて腹面から剝離調整が施されている。
5は翼状剥片である。4は一部に自然面を残す横長の剥片を素材とした石器であるが、比較的
大きな剝離をなされている。それが石核としての剝離なのかもしれないが、ナイフ形石器としての
背部調整とすることも可能であろう。しかしナイフ形石器の背部調整としては余りに粗大であり、
一応ここでは石核様剥片としておく。

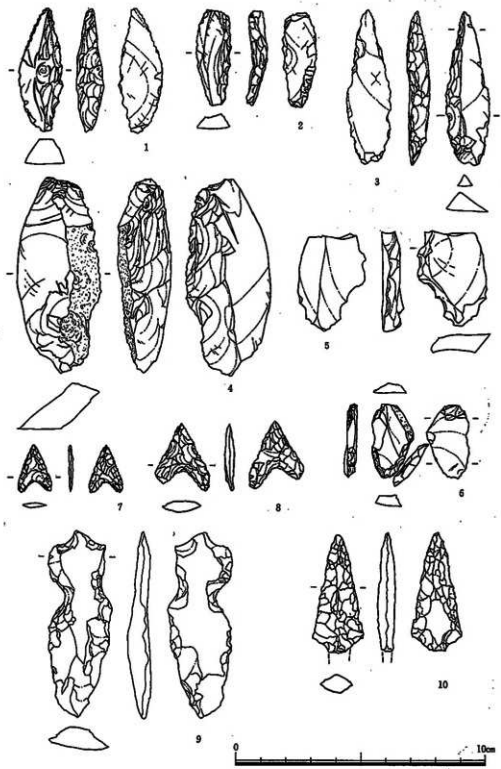
今回報告した一連の旧石器は先に述べたように2次堆積物であることから、遺物の同時代性に
問題が全くないとはいえないが、6を含めて、同時期のものとして間違いないと考えられる。

縄文時代・弥生時代 (第76図一7～10; 図版238)

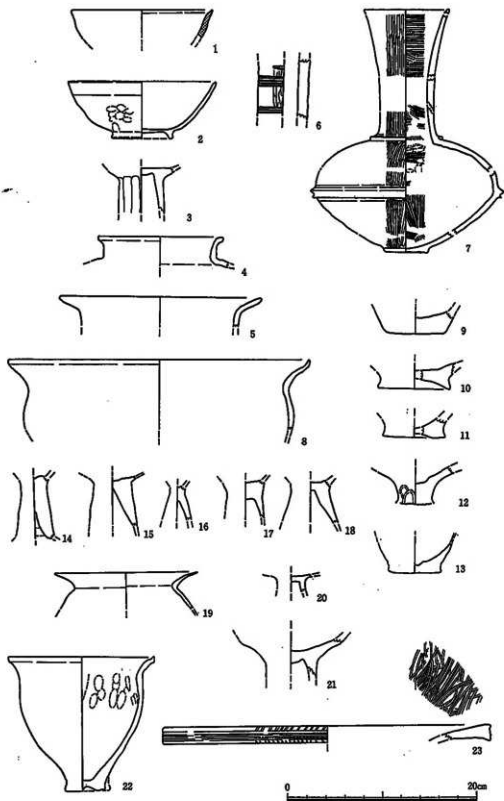
本地区から検出された遺物には打製石器を伴う縄文時代・弥生時代の遺物はなく、すべて原位
置を保ったものは存在しない。7・8の石鏃もいずれの時代に相当するのかわかるにはしえない。
10の尖首式の石鏃は弥生時代中期以降のものであろう。9は石匙様の石器としておく。石匙とし
ては余りに異様であることと、腹面の調整が全周全面にわたっていないことによる。石匙の未製
品とすべきかもしれない。

2 弥生時代 (第77図; 図版239)

前期と考えられる大形壺の口縁部がビット11より出土する他は、中期の土器片も少量で、全て
底部片(第77図一11)でもあり詳細は不明であった。



第76图 石 器



第77图 弥生式土器・土師器・黑色土器

後期から古墳時代初期には堅穴住居も検出されており、その周辺に遺物も幾つか見られる。なかでもビット34、SKA10から出土した長頸壺、甕、高坏脚部は周辺の遺構とともに本調査区北側の様相を特徴づけるものである。

長頸壺はビット内に圧縮して押し込められた状態で出土した。内面はハケ目、外面は全体に乾磨きしている。頸部付け根と体部中央に凸帯がみられ山陽系土器の特徴を有す。肩部がやや張り気味で頸部が太い事が、純粋な山陽産と言えない点である。胎土も淡黄褐色で砂岩粒を含んでいる。高坏脚と似た調整・胎土であった。

甕は胎土の色調が茶褐色系で使用の際に火を受けた事も加味されるが、前者の壺類とはやや異った状況である。

調査区南側の土壌群及びSBK1周辺にも土器片がみられた。(第77図8・9)

SKA1から出土した甕は大形で、胎土は粗く、黄色味が強い。外面は若干のハケ目調整をナゲ消し、内面もナゲ調整を施していた。土壌群周辺には他に底部片が散点出土しており、体部外面に叩き目痕、底部外面に木葉痕を残すものもみられる。(第77図9～13)

3 古墳時代 (第78～80図)

土壌群周辺と、その北側台地上に集中して、須恵器環・高坏・壺・甕・伎瓶・提瓶・土師器高坏・甕等々が出土している。

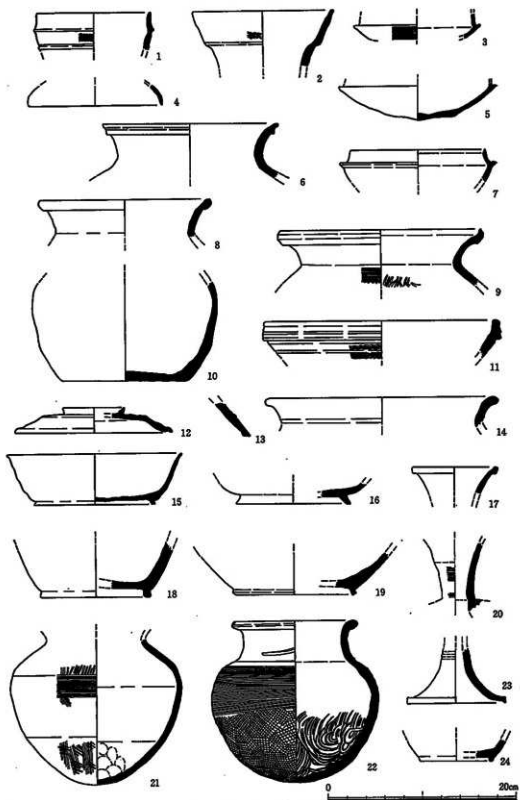
須恵器は内面叩きを擦り消している甕や壺も見られ、5世紀後半から認められる。甕や壺の口縁部を見ると、古式の範疇に属するものも存在する(第78図1・2・6)。一般的には、6世紀後半代の壺が多く目についた。これも6世紀中葉に遡るものもあり、7世紀代に降ると考えられる壺・甕類も見られた。また埴壺(第80図10)の出土も認められ、生活との関連も若干窺えた。大形の装飾付甕(第80図16・図版244—5)も存在し、集落出土土器組成より貯蔵形態が多く、供膳形態が少ないという器種組成比率の変化は認められたが、土器そのものの形態は集落出土のものと同様でなく、埴、器台、単頸壺、台付長頸壺等はみられない。

土師器の場合は、高坏が目立った。数は少ないものの、大きさや、調整の異なる高坏脚部が10点前後出土している。(第77図14～18・20・21)また甕も少数認められたが、高坏同様、残存状況が極めて悪く、調整等の観察はできなかった。(第77図19)

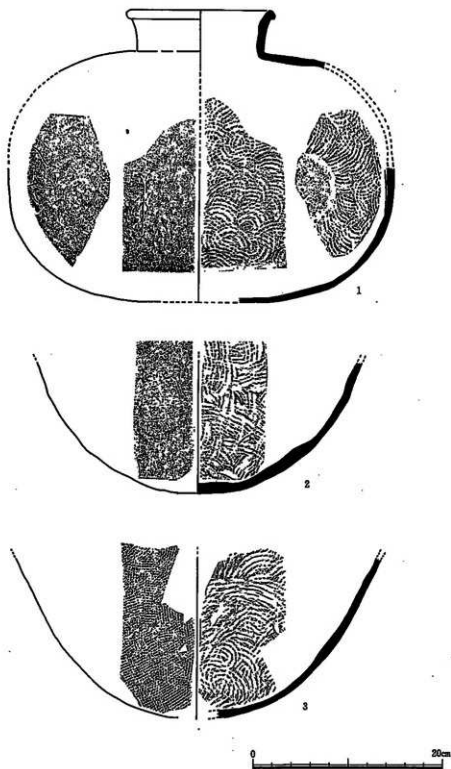
4 奈良時代 (第81図)

8世紀代の遺物も、調査区南西の土壌群に多くみられた。それ以外にこの時期の遺物は、調査区南側に東西に走る小谷の周辺及びその中に幾つか堆積していた。SDA7出土の須恵器は8世紀前半のものも多く、M15・16地区周辺包含層出土の8世紀代の土器と同様の状況がみられ、M14地区南端付近には9世紀代の須恵器・土師器が出土する様相と若干の相異が認められた。更に土壌群上層には8世紀後半から末葉のものも多く、出土地点の差と、遺物の時期の差に若干の関係性が認められた。

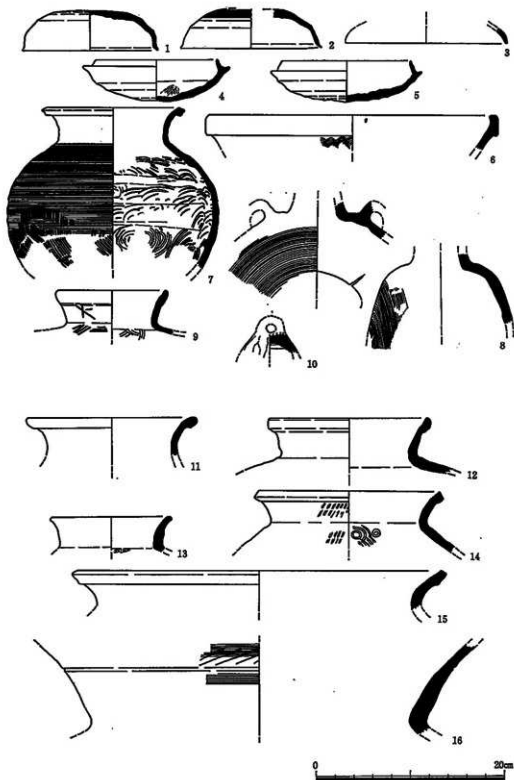
M14・15地区では土師器・甕・坏と伴に須恵器甕・坏・壺も含まれているが、M16～17地区で



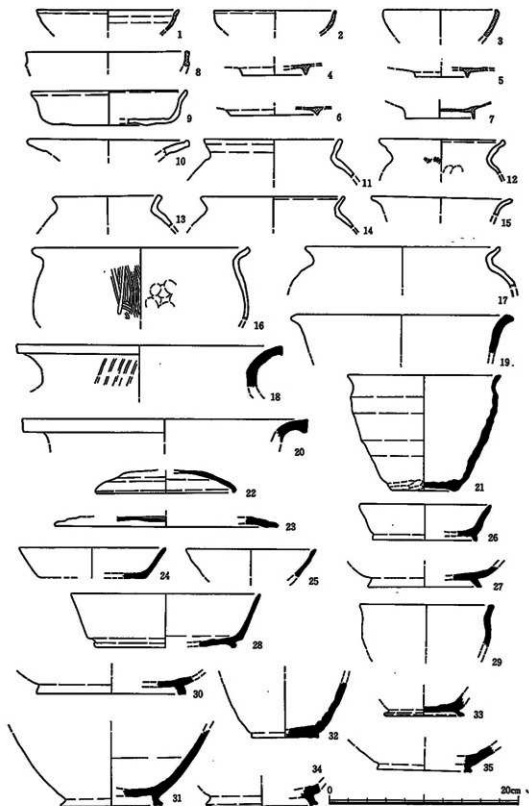
第78圖 土城縣他出土須惠器



第79圖 土墳群出土須恵器



第80图 土城群周边出土须惠器



第81图 M14区南壁下层出土器物位

は、環・環蓋・壺・碗・細頸壺・高環、土師器高環等が出土していた。また土城群内より出土する俵蓋の破片の内で大型の7～8世紀代と考えられるものも認められた。

5 平安時代 (第81図)

調査区北側でピット内より土師器環・黒色土器碗等が出土し、調査区南側、M14・15地区で、須恵器鉢・壺、土師器壺・環・黒色土器碗・鉢等が出土している。調査区北側の遺物は柱穴内に完形品の土師器環を埋納したもので祭祀的色彩が強い。(第77図一2) 調査区南側M14地区出土土器は、壺・環等、土師器の日常土器が多く含まれ、生活臭の強いものであった。

6 鎌倉・室町時代 (第82図)

出土量は極めて少量で、瓦や、東播磨系鉢が調査区南西寄りの谷部周辺で確認されるのみであった。また瓦質の摺鉢も含まれていた。遺構・遺物とも極めて少量で、当時期の特徴と言えます。

7 江戸時代 (第82図)

北西区、L15・K14区において、渕焼大壺や須恵器壺の破片や白磁小碗片が出土しているが、殆どは、M16～18区のSP及び、東西谷の兩岸の斜面堆積層から出土したものである。渕焼(地格・火舎)伊万里焼(皿・碗)唐津焼(碗・鉢)備前焼(壺・摺鉢)等が主要な遺物であった。いずれも17世紀から18世紀にわたる近世陶器で、井戸・近世洲内に比較的多数含まれるものであった。伊万里焼の茶碗は、高台周辺の青色の圈線や、内面の釉のかきとりの有無、「雪餅甍」(図版243-4)「網目文様」等々の文様構成の変化等を追求する事により、幾つかのグループに分類できた。

瓦は丸瓦が数点出土している。凸面に面取り風のナデを施し、凹面に布目が残る(図版243-6)。

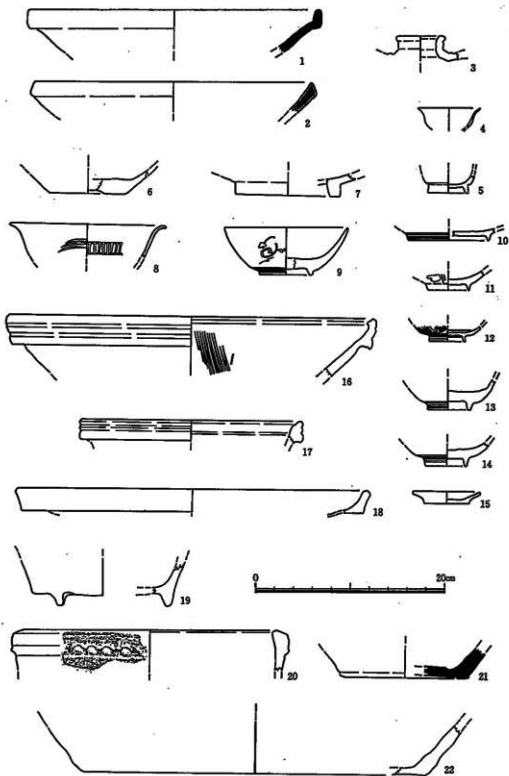
一石五輪塔(図版243-7・8・9) 五輪塔は密教において創始された塔形で、一般に下方から方形の地輪、円形の水輪、三角形の火輪、半月形の風輪、団形の空輪を積み重ねた形式のものをいう。この地水火風空は密教という宇宙生成の五大要素であり、五輪塔の塔形は、その宇宙の根源である胎藏界大日如來の三球形そのものであると説く。

密教の盛行と共に五輪塔の造立は流行した。鎌倉時代以降は全国的に広まり、各宗派で用いられたことが、多くの遺例よりわかる。五輪塔のなかで、一石で作られ高さが50cm、幅15cm角内外の細長い小五輪塔を一石五輪塔として区別する。これは室町時代以降に庶民の墓塔として多く作られ、大阪南部に特に多い。

この調査でも表土掘削時に一石五輪塔が検出された。材質はいずれも和泉砂岩である。

8は、地輪を欠き、残存高24.1cmである。各輪の法量は、水輪が高さ7cm、幅10cm、奥行き10.5cm、火輪が高さ7.4cm、幅10.5cm、奥行き10.5cm、風輪は高さ3.5cm、幅8.3cm、奥行き7.7cm、空輪は高さ6.2cm、幅8.5cm、奥行き7.3cmである。空輪から順に「有」(キ)・「万」(カ)・「丁」(ツ)・「万」(バ)の梵字を配したものである。形態から見て江戸時代のものである。

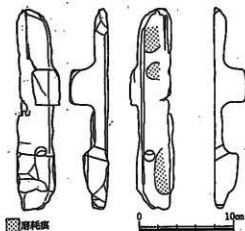
9は、地輪と水輪の一部のみ検出した。地輪も下部が少し欠損している。地輪に法名、没年月日を刻む近世庶民墓塔としての性格が顕著な例で、木遺物も地輪に(向かって右より)「延享元(=1744)



第82圖中・近世遺物

年甲子「秋月智貞信(女か)」「七月十一日」と三行に刻まれている。また各面中央上部に正面「水」(ア)左側面「水」(ア-)裏面「水」(アン)右側面「水」(アク)の梵字が刻まれ、磨滅が激しいが水輪にも正面に「水」(バ)左側面に「水」(バ-)の梵字が読みとれるので、各輪の四方に発心門・修行門・菩提門・涅槃門の四門の梵字を記していたと思われる。法量は残存高27.4cm、地輪の高さ22.6cm、幅12.7cm、奥行き11.5cm。水輪の幅11.4cm、奥行き10.3cmである。

7はほぼ完形で検出されたが、表面の磨滅が激しい。地輪には(向かって右から)「寛永二年」⁽¹⁶⁵⁴⁾「道西禅門」「十一月十五日」と三行に刻まれている。残存高52cm。各輪の法量は、地輪高さ16.8cm、幅13.5cm、奥行き13.3cm、水輪高さ7.5cm、幅13.5cm、奥行き12.5cm、火輪高さ6.2cm、幅13cm、奥行き12.8cm、風輪高さ12.7cm、幅11cm、奥行き11cm、空輪高さ7.8cm、幅10cm、奥行き9.5cmである。正面のみに梵字を刻んだと思われる痕跡がある。



第83図 SP2出土下駄

木製品には、SP2出土の下駄が存在する。かなり使い込まれ後方の歯が半分以上減っている。足の指があたる部分は窪んでいた。

8 小結

万崎池遺跡第Ⅶ調査区において出土した遺物は遺物整理箱50個前後にすぎないが、その内容は旧石器時代から近世に至るまで連続として人々の生活の跡が窺える状態であった。

旧石器時代の石器はナイフ形石器4点が検出され、野々井^①・鈴ノ宮遺跡^②と伴に東北丘陵周辺の旧石器研究の貴重な資料として位置づけられるものであった。

るものであった。

縄文時代も石器が若干認められたにすぎなかったが、太平寺遺跡や西浦橋遺跡において出土している縄文式土器及び石器との比較検討、更に美木多遺跡^③・鈴ノ宮遺跡^④・上遺跡^⑤・万町北遺跡^⑥等との関連についても注目される。

弥生時代に至って当遺跡に土器がみられるに至る。特に後期から古墳時代初頭の土器が多く、古墳との関係を物語る壺も出土している。鈴ノ宮遺跡や、上遺跡・西浦橋遺跡・菱木下遺跡等弥生中期の沖積段丘上の遺跡や野々井^⑦・小阪遺跡^⑧等後期末から古墳時代初頭の遺跡出土遺物との比較検討が必要である。

古墳時代と認定し得る土器は須恵器が中心で、殆どが土壇群周辺から出土しており、杯・壺・甕等の口縁部等のありかたから、中期から後期にかけて連続と土壇群が営まれた事が判明した。またその内容についても提瓶・壺・高杯・裝飾付大形甕を含み、古墳出土の土器群と余り変わらない事が判った。しかし数量や、他の装飾品、鉄製品等のありかたは比較し難いへだたりがみら

れたのである。

奈良時代の遺物は8世紀前半代のもとの8世紀末から9世紀代にかかるものにと大別され、それぞれ、出土地点にかたよりが見られた。

平安時代には台地北側に集落が出現し、掘立柱内に埋納された坏が出土している。この資料は調査区南壁において検出した土器群とはほぼ同時期のもので、池田寺跡南北溝¹¹⁾、と壘中遺跡井戸¹²⁾の中間に位置づけられるもので、9世紀中様から後半代のものであろう。調査区南壁より出土した土器群は古い時期のものもみられたが、黒色土器のありかたから9世紀後半から10世紀代のもとのと考えられ、貝塚市島中遺跡¹³⁾・岸和田市栄ノ池遺跡¹⁴⁾よりやや古い様相を示す。共存する須恵器鉢は胎土も悪く、造作も粗いもので、(第81図21)「陶邑」古窯跡群で製作されたものとするれば最も新しい段階に属すると考えられ、「陶邑」末期の供給範囲と製作器種を示す好例と言える。

鎌倉・室町期の遺物は東播磨煎り鉢と、瓦質搦鉢のみであった。その口縁部の拡度割合から14世紀後半及び15世紀代のもとのと考えられ、第IV調査区の中世土壌基造営時期に該当するものである。

江戸時代の遺物には、淡焼大甕が余りみられず、伊万里焼壺・皿、備前焼搦鉢・壺等とともに淡焼地烙・火合が含まれ、段丘上の耕作関連遺構の周辺から出土する遺物の割に生活臭の強いものであった。

第5節 ま と め

万崎池遺跡第V調査区約6,000㎡の調査前の課題は、①太平寺跡の存在と範圍の確認、②「陶邑」古窯跡群北地域における古墳時代集落及び窯跡の存在、③段丘面上の耕地開発とその変遷等であった。調査成果は当初の想定を大きくうまわり、新たな課題が山積する結果となった。以下時代順に、課題を述べ、まとめにかえたいと考える。

1 旧石器・縄文時代の様相は、後世の遺構及び包含層から出土するサヌカイト・ナイフ形石器・石鏃等によって窺え、当時の地形環境も、段丘面上に2～3条の小規模な埋没谷の存在が確認され、その後の生活を規程している事々々多岐にわたって考察しうる資料として把握された。今後プライマリーな包含層及び遺構が検出され得る可能性が高い。

2 弥生時代後期から古墳時代初頭に至り、小規模な溝と、若干のピット群及び土壌群が検出された。小規模なSDA9が集落をとり巻くものか判定し難いが、ピット及び土壌群に埋葬遺構と考えられるものも含まれており、集落と墓域の関係を示す例となろう。その場合、菱木下・西浦橋遺跡や、鈴ノ宮遺跡の如く、墓制を方形周溝墓により構成する遺跡との関係を考えねばならない。ほぼ同時期と考えられる野々井遺跡第1地区の堅穴住居跡群は、溝に囲まれており、何らかの関連が考えられる。まず時期差も検討する必要がある。

3 群集する土壌群中にも須恵器を伴わず、切り合い関係の古いものが含まれ、古墳時代前半まで遡るものかと考えられる一群があり、一定のまとまりを示していた。つまり台地上には、弥

石 巻

図号	図号	種 別	造 築・地 区・層 位	高・幅・厚(m) 数値	備 考 (石材・その他)
76-1	208-1	Flint フライツ ナイフ型石	K15-e1	4.0 X1.7 X1.0	7.0 g * 中サイズ
2	2	埋 石	L15-dE 残層	3.85x1.45x0.62	3.3g *
3	3	黄緑褐色の ナイフ型石	M15-B 北東部 現代土 灰褐色砂質土	6.18x1.83x0.75	7.5g *
4		埋石の 型 7	GTK16	7.81x3.38x1.86	29.3g *
5	238-4	炭状物	M-N-17-18 遺積	4.01x2.87x0.80	8.5g *
6	5	塊状土層底	SDA 3 (6) 下層	3.0 X1.68x0.45	2.5g *
7	6	石 塊	M16-dE GTK16周辺 黄褐色土層片状黄褐色土	1.86x1.34x0.21	6.3g *
8	7	石 塊	M15-dE 黄土・灰土	2.73x2.22x0.45	1.5 g *
9	8	石 塊	K15 黄褐色土	7.51x2.43x0.53	15.8g *
10	9	石 塊	K16-a3 黄土・褐色土内	4.83x2.00x0.78	5.7g *

弥生式土器・土師器・黒色土器

図号	図号	種 別	造 築・地 区・層 位	数 量(m)	成 形・ 測 量	青銅土・包銅・漆・その他
77-1		黒色土器	P44(P46) 灰褐色土	口16.3、高(3.0)	(外)内径ヘラミガキ。(内)口径1径。	糠炭、砂鉄(中一層)、埋積物・土師
2	243-3	土師器	P41 暗灰褐色土	口15.4x15.4x8.3、高6.9	(内)口径1径。	糠炭、土師器内、埋積物(中一層)埋積物・(内)埋積物、灰褐色土
3	241-7	土師器	M16-e3, 4 割面	高(4.0)	(外)ヘラ型ナド。(内)口ナド。	糠炭、砂鉄(中)、赤褐色土、黄土
4		土師器	GTK18 黄褐色土	口13.3、高(3.0)	(外)内径ナド。	砂鉄(中)、(外)赤褐色土・(内)埋積物、土師
5		土師器	GTK15 灰褐色土	口20.9、高(3.1)	(外)内径ナド。	砂鉄(中一層)、灰赤褐色土、黄土
6		弥生式土器	高野 弥生P19 No. 3	口径 3.4、高(5.5)	(外)細口ヘラミガキ。(内)灰褐色土層4層下層3層。	糠炭、砂鉄(中)、(外)灰赤褐色土・(内)埋積物、黄土
7	239-1	弥生式土器	高野 P24 灰褐色土	口 8.8、高 4.4、腹径26.5	(外)ナブのみミガキ。(口・腹)ハナメ(1層/1cm)。(内)口・腹ナド。	糠炭、砂鉄(中)、埋積物(中一層)埋積物・(内)埋積物、黄土
8	4	弥生式土器	SKA 1 茶褐色砂粘土	口13.4、高(7.0)	(外)ハナメのみナド。(内)ナド。	中々包、砂鉄(中一層)、赤褐色土埋積物・(内)埋積物、黄土
9	244-20	弥生式土器	M16-e1 褐色土	口6.0、高(2.0)	(外)赤の埋積物。(内)中々包。(内)ナド。	中々包、砂鉄(中一層)。(内)赤褐色土・(内)埋積物、黄土
10	17	弥生式土器	M17-b4, d2 湖内灰褐色土	高 7.5、高(3.0)	(外)ナド。(内)中々包。	砂鉄(中一層)、黄褐色土、土師
11		弥生式土器	SKA18 黒褐色土	高 8.4、高(2.1)	(外)ナド。(内)中々包ナド。	砂鉄(中一層)。(外)埋積物・(内)埋積物、黄土
12	244-19	弥生式土器	M16-dE 茶褐色土・黄褐色砂粘土	高(4.0)	(外)中々包ナド、口径ナド。(内)口縁。	中、砂鉄(中一層)。灰赤褐色土、黄土
13	239-5	弥生式土器	SDA 2 灰褐色土	高 3.4、高(1.9)	埋積物不可知。	糠炭、砂鉄(中一層)。(外)赤褐色土・(内)埋積物、黄土
14	244-13	土師器	M17-d, N17-b 灰褐色土	高(6.0)	(外)割面美しい。(内)シロツのちり積り。	糠炭、砂鉄(中一層)、埋積物・(内)埋積物、黄土
15		土師器	M17-d, N17-b 灰褐色土	高(6.0)	(外)割面美しく埋積物不可知。(内)ナド。	糠炭、砂鉄(中一層)、埋積物・(内)埋積物、黄土
16		土師器	M16-e1 褐色土	高(3.0)	(外)内径ナド。	中々包、砂鉄(中一層)、灰赤褐色土、黄土
17	244-12	土師器	GTK44 灰褐色土	高(3.0)	(外)内径ナド(割面が進行)。	中々包、砂鉄(中一層)、灰赤褐色土、黄土
18		土師器	M16-e1 褐色土	高(4.0)	(外)ナド。(内)口径ナド。	中々包、砂鉄(中一層)、灰赤褐色土、黄土
19	239-6	弥生式土器	SDA 2 黄褐色茶褐色土	口15.2、高(4.0)	割面美しく埋積物不可知。	砂鉄(中一層)、灰黄褐色土、黄土
20		土師器	M16-d 黄褐色土	高(1.0)	(外)内径細く(埋積物不可知)。	糠炭、砂鉄(中一層)、灰黄褐色土、黄土
21	239-3	土師器	GTK107 黄褐色土	高(4.0)	表面割面美しく埋積物不可知。	中々包、砂鉄(中一層)、灰黄褐色土、黄土
22	2	弥生式土器	弥生P19	口15.3、高14.1	(外)口縁ナド。(内)内径ナドナド。下腹ナド。	砂鉄(中)。(外)黄褐色土、土師
23		弥生式土器	ビツト群1、P11 N16-a1、2区	口24.4、高(1.7)	(外)口ナド。(内)ヘラミガキ。(外)口径1径(3層)。割面ナド。	砂鉄(中)。(内)口径1径。良好

土器野山土器類

図号	図号	種 別	造 築・地 区・層 位	数 量(m)	成 形・ 測 量	青銅土・包銅・漆・その他
78-1	246-3	灰褐色土	M15-d 褐色土	口11.8、高(4.0)	(外)内径ナドナド。嵌状文。	糠炭、砂鉄(中)、埋積物(中一層)埋積物・(内)埋積物、黄土
2	2	灰褐色土	M17-d2 灰褐色粘質土	口14.6、高(6.0)	(外)内径ナドナド。嵌状文。	糠炭、砂鉄(中)、埋積物(中一層)埋積物・(内)埋積物、黄土
3	1	灰褐色土	ビツト群4 灰褐色砂粘土	径13.4、高(3.0)	(外)口ナド。(内)口縁ナドナド。	糠炭、砂鉄(中)埋積物・黄土
4		灰褐色土	SDA 3 M16-a 茶褐色土	口14.0、高(3.0)	(外)内径ナドナド。	砂鉄(中)。(外)埋積物・(内)埋積物、黄土
5		灰褐色土	GTK184 黄褐色土	高(4.0)	(外)口ヘラ型ナド。(内)口縁ナドナド。	中々包、砂鉄(中一層)。(外)埋積物・(内)埋積物、黄土
6		灰褐色土	L17-a3 黄土・灰土	口18.5、高(3.0)	(外)内径ナドナド。	糠炭、砂鉄(中)。(外)灰土、黄土
7	240-4	灰褐色土	L17-a3 黄褐色粘り灰褐色土	口14.0、高(3.0)	(外)内径ナドナド。	糠炭、砂鉄(中)。(外)中々包・(内)埋積物、黄土
8		灰褐色土	SDA 3 (6) 下層	口17.8、高(4.0)	(外)口ナドナド。(内)口ナドのみハナメ。	糠炭、砂鉄(中)、灰褐色土埋積物・(内)埋積物、黄土
9		灰褐色土	SDA 3 褐色土	口17.7、高(6.0)	(内)口縁ナドナド。(外)中々包のみナド。	糠炭、砂鉄(中)。(外)灰土、黄土
10	239-8	灰褐色土	GTK119 灰褐色土	径13.2、高(1.0)	埋積物不可知。	中々包、砂鉄(中一層)。(外)埋積物・(内)埋積物、黄土
11		灰褐色土	SE6 灰褐色砂粘土	口24.3、高(4.0)	(外)口縁ナドナド。嵌状文。	砂鉄(中)。(外)埋積物、黄土

多くの困難を乗り越えて各種団体の協力と関係行政機関の力が注がねばならない。

注

- 1) 堺市教育委員会「堺市文化財調査報告書第8集」1981
大阪府教委試掘
- 2) 類似の遺構を検出した例を掲げる。
 - ①高槻市狐塚古基群 (約600基)
原口正三「考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史』1-1 1977
森 浩一他「大阪府史」第1巻 1978
 - ②富田林市新家遺跡
尾上 実「新家遺跡発掘調査概要・I」1979
尾上・今村「新家遺跡発掘調査概要・II」1980
 - ③富田林市狹山遺跡 (約150基)
北野耕平・中村 浩「狹山遺跡発掘調査報告書」1981 本報告書では、建物跡の柱痕としている。
 - ④堺市大和川・今池遺跡
森村健一他「大和川・今池遺跡Ⅱ」大和川・今池遺跡調査会 1980
 - ⑤堺市野々井遺跡
中村 浩他「陶器Ⅱ」1977
 - ⑥狭山町半田遺跡 (50基以上)
大野 薫・山本 彰他「半田遺跡発掘調査概要」大阪府教委 1981
 - ⑦堺市長曾根遺跡 (約500基)
川口・嶋谷・稲垣・上野「長曾根遺跡」堺市教委 1984
ここでは5m以上の大規模なものも土墳墓として扱っている。
 - ⑧奈良県生駒郡安堵村東安堵遺跡 (228基)
泉 武「東安堵遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第46冊』1983
 - ⑨奈良市 池田遺跡 (1300基)
藤井利幸「奈良市池田遺跡発掘調査概要」『奈良県遺跡調査概報 (第1分冊)』1981
 - ⑩藤井寺市青山遺跡 平安時代 (約50基)
渡辺昌宏「青山遺跡現地説明会資料第1回」1978
 - ⑪藤井寺市狹山遺跡・羽曳野市軽里遺跡 平安時代
尾上 実「はさみ山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要」1978
この概要の中では軽里遺跡の大形土塚について、造瓦用の粘土採取の痕跡と考えている。
 - ⑫香川県西村遺跡 平安時代「香川県教委「一般国道32号城南バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」1980
- 3) 掘削深度が浅くても、盛土を多くして遺体を覆っていた事も考えられる。
- 4) 堺市教委北野俊明氏の御教示による。
- 5) 現地説明会資料では、須恵器工人集団の基地を想定した。しかし、限定された基状や、劣悪な地形の基地立地・及び供土土器の稀少性から被支配者層の基地であろうと推定されるが、須恵器生産集団と限定し得る根拠は少ない。註2の例のように地境と時代を越えて存在するもので、集団の性格の差の検討は今後の課題である。
- 6) 泉大津市板原遺跡、岸和田市栄の池遺跡・堺市四ツ池遺跡・鈴の宮遺跡、貝塚市畠中遺跡等々九州地域には当該時期の早発的な遺構の検出がみられる。
- 7) 現時点では当該丘面上の本格的な水田開発は近世と考えている。第IV調査区で検出された、室町期土墳墓以降のものと考えたい。

生後期から古墳時代初頭まで、山陽地域との関係を有する集団が、居住空間を転々とさせて存在したと考えられるのである。その際、埋葬形態は土墳墓群であり、生業場所は石津川の沖積段丘面及び万崎池谷の埋没谷と思われる。

4 泉北丘陵のあちこちに、このような伝統的な集団の存在が確認されると同時に、古墳時代後半における須恵器及び須恵器生産の導入と群集土墳群の出現がいかなる関係によるものであるのか大きな問題となってくる。土墳群には高環・環・壺等の供厨及び貯蔵形態が供献される事が多く、土器棺もあり、ぞんざいに扱った様子は無い。これらの被葬者像及びその集団規模の復原を試みる必要もあろう。須恵器生産が渡来系の技術によるものである事は当然であるが、それに関わった集団、須恵器を需要した人々は必ずしも渡来系の集団ばかりではないだろう。これらの太平寺周辺の集団は、当調査地の土墳墓に葬られ、古墳時代前半には2群、古墳時代中葉には割合少数で拡散しているが、土墳群中央に1群存在し、古墳時代後期には、4～6群前後のまとまりで墓域を形成する単位であった。7世紀以降も各単位に少数ではあるが含まれている。古墳時代中期以降、在地集団の墓域が変化し、8世紀頃までそれが維持されたのである。その契機となった要因は、生産レベルでは、農耕集団の発展及び須恵器生産の開始が考えられるが、圧倒的に増加する6世紀後半頃の要因は、その単純な量的拡大とは考えられない。またその消滅は須恵器生産の消滅・衰退のみで語れるものでももちろんない。ここでは、須恵器生産以前から存在した集団が、須恵器の流入以降一つの墓域に変化を受け、次の世代には4単位前後のまとまりで造墓活動を行った事を記し、その単位は、6世紀中頃～6世紀末にかけて、40～50基前後密集するものである事を確認しておく。またこの現象は摂津・河内・大和にも見られ、中世まで続くものもある。古墳時代後期に異常に多い例が見られ、大規模な前方後円墳や巨大な石室以外に、この様な単純な墓においても、古墳時代の特殊性がうかがえる。

5 奈良・平安時代の状況は、段丘上に小規模な集落が出現し、2時期程度の建て替えの後、消失する事が判った。それ以後中世を通じて顕著な遺構はない。平安期の遺構も建物群が中心で、溝も、集落を画するものと考えられた。

6 本格的に本調査区に耕地が確保され、水利体系が整うのは近世前半以降の事であった。それも各区画毎に土壇・井戸・溝を伴う自立化の強いものであった。深田遺跡¹⁶⁾等では木組井戸等が構築され、大園・古池・壘中遺跡¹⁷⁾等沖積段丘に近い所では、井戸の集中する所又は大形木組井戸が構築される例が多い。南河内では、大規模古墳周濠を溜池として使用し、中位段丘上の小埋没谷等に池を掘削している。ここでは小規模井戸と近世瀬・溝が点々と掘削され、水資源の確保の為の真剣な行為が想像された。

以上のような状況が提起され、今後の課題として更に具体的な姿を追求するとともに、新たな事実に対する理論的見直しを整理する必要がある。これらの貴重な資料が、道路建設に先だつ緊急発掘調査によって明らかにせざるを得なかった事は遺憾であるが、これらの資料を子孫に伝え、記録保存を全うする仕事に対し、今後、地元関係者の方々に理解して活用していただくには、

- 8) 中村 浩「陶邑Ⅰ」 大阪府教委 1976
- 9) 府教委森井貞雄氏の御教示による。
- 10) 和泉丘陵内遺跡調査会「和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅱ」 1983
- 11) 府教委「観音寺遺跡発掘調査報告書」 1982
 広瀬和雄「第3節10世紀後葉の土器群についての覚書」 1982
- 12) 坂口昌男「豊中遺跡発掘調査概要Ⅲ」 泉大津市教委 1979
- 13) 吉川和則「島中遺跡発掘調査概要」 貝塚市教委 1978
- 14) 近藤利由「栄ノ池遺跡」 岸和田遺跡調査会 1979
- 15) 台付長頸壺・平釜・器台・裝飾付長頸壺・子持器台等、群集墳被葬者に供献される須恵器はなかった。
 菱木下遺跡では包含層ではあるが耳環が出土している。横穴式石室被葬者と土壇墓被葬者の差を遺物の
 面で確認することにより、集落内の遺物出土状況を加味して、古墳と集落の関係が復元できる。
- 16) 中村 浩「陶邑深田」 大阪府教委 1973
- 17) 坂口昌男他「古池・豊中」 古池・豊中遺跡調査会 1976
- 18) 波辺昌宏「青山遺跡現地説明会資料第1回」 1978

付、万崎池遺跡第V調査区出土遺物観察表

凡 例

1. 法量については、()内残存値、推：推定値、復：復原値、高：器高、残存：破片の残存値を示し、口、胴、基底などは径を示す。
2. 胎土には長石、石英、チャート、くさり礫砂粒を主に含むが、それ以外の特徴的な砂粒を記入した。砂粒は大きさにより、大 $>5\text{mm}$ 、 $2\text{mm}<\text{中}\leq 5\text{mm}$ 、 $0.5<\text{細}\leq 2\text{mm}$ 、微 $\leq 0.5\text{mm}$ とした。

石 器

図番号	図形番号	種 別	産 地	造 形・地 区・層 位	高・幅・厚(m)	重 量	備 考 (石材・その他)
76-1	238-1	Flint フレイト ナイフ型石器	K15-e1		4.9 X1.7 X1.0	7.0 g	中キキト
2	2	環 状 石 器	L15-dE 表層		3.85x1.45x0.62	3.33 g	*
3	3	環状石器の ナイフ型石器	K13地区 北東部 現代土 灰褐色砂質土		6.18x1.83x0.75	7.55 g	*
4		環状石器 型7	STK36		7.81x3.38x1.86	39.33 g	
5	238-4	環状石器	M-N-17-18 表層		4.01x2.87x0.80	8.55 g	*
6	5	環状石器型 SDA 2 (6) 下層			3.0 X1.68x0.45	2.58 g	*
7	6	石 器	M16-dE STK136周辺 灰褐色土混り黄褐色土		1.86x1.34x0.21	0.33 g	*
8	7	石 器	M15-dE 黄土・灰土		2.73x2.22x0.45	1.5 g	*
9	8	石 器	K15 黄褐色土		7.51x2.43x0.53	15.86 g	*
10	9	石 器	K16-a-3 黄土・褐色土内		4.83x2.09x0.78	5.76 g	*

弥生式土器・土師器・黒色土器

図番号	図形番号	種 別	産 地	造 形・地 区・層 位	法 量(m)	重 量	備 考 (石材・その他)
77-1		黒色土器	柄	P44(住70) 灰褐色土	口16.5、高1.0		(外)内径ヘラミダキ。(内)口縁内凹。
2	243-3	土師器	柄	P41 暗灰褐色土	口15.4x15.0x3.8、高6.9		(内)口縁内凹。
3	241-7	土師器	高坪	M16-e1, 4 割面	高(4.2)		(外)ヘラ型リ。(内)口ナデ。
4		土師器	甕	STK36 黄褐色土	口13.3、高(3.0)		(外)内径ナデ。
5		土師器	甕	STK31 灰褐色土	口20.5、高(2.1)		(外)内径縮ナデ。
6		弥生式土器	高坪	弥生P19 No. 3	口径 3.4、高(5.4)		(外)板方向のヘラミダキ。(又)腹径縮上部4cm下縮3cm。
7	239-1	弥生式土器	高脚盤	P24 灰褐色土	口 8.8、高 4.4、腹径35.6		(外)ナデのみミダキ。(口)ハナメ(1cm/1cm)。(内)口縮ナデ。
8	4	弥生式土器	甕	SKA 1 茶褐色砂礫土	口11.4、高(7.0)		(外)ハナメのみナデ。(内)ナデ。
9	244-20	弥生式土器	甕	M16-e1 黄土色土	K6.0、高(2.0)		(外)口縮の腹径縮。(内)口ナメ。(内)ナデ。
10	17	弥生式土器	甕	M17-b, d2 湖内灰褐色土	高 7.5、高(3.0)		(外)ナデ。(内)縮ナデ。
11		弥生式土器	甕	SKA18 黒褐色土	高 4.6、高(2.1)		(外)ナデ。(内)縮ナデ。
12	244-19	弥生式土器	甕	M16-dE 茶褐色土・黄褐色砂礫土	高(4.0)		(外)口ナメナデ。腹径ナデ。(内)縮ナデ。
13	239-5	弥生式土器	甕	SDA 2 灰褐色土	高 5.4、高(1.9)		縮ナデ不可視。
14	244-13	土師器	高脚甕	M17-d, N17-b 灰褐色土	高(6.0)		(外)縮ナデらしい。(内)シボウのちも張り。
15		土師器	高脚甕	M17-d, N17-b 灰褐色土	高(5.0)		(外)割面縮ナデ(腹径縮不可視。(内)ナデ。
16		土師器	高脚甕	M16-e1 黄土色土	高(7.0)		(外)内径ナデ。
17	244-12	土師器	高脚甕	STK64 灰褐色土	高(3.0)		(外)内径ナデ(割面が進行)。
18		土師器	高脚甕	M16-e1 黄土色土	高(4.0)		(外)ナデ。(内)縮ナデ。
19	239-6	弥生式土器	甕	SDA 2 黄土色混り灰褐色土	口15.2、高(4.0)		割面縮ナデ(腹径縮不可視)。
20		土師器	高脚甕	M16-e1 黄土色土	高(1.0)		(外)内径縮ナデ(腹径縮不可視)。
21	239-3	土師器	高脚甕	STK307 黄褐色土	高(4.0)		割面縮ナデ(腹径縮不可視)。
22	2	弥生式土器	甕	弥生P19	口15.3、高14.1		(外)口縮ナデ。(内)内径縮ナデ。下部縮ナデ。
23		弥生式土器	甕	ビツト群1、P11 N16-a-1、2区	口24.4、高(1.7)		(外)口ナデ。(内)ヘラミダキ。(内)口縁内凹(3本)。割面ナ。

土器野山土器類

図番号	図形番号	種 別	産 地	造 形・地 区・層 位	法 量(m)	重 量	備 考 (石材・その他)
78-1	246-3	環状石器	柄	M15-d 黄土色土	口11.8、高(4.0)		(外)内径縮ナデ。旗状文。
2	2	環状石器	柄	M17-d2 灰褐色粘質土	口14.6、高(5.0)		(外)内径縮ナデ。旗状文。
3	1	環状石器	坪	ビツト群4 灰褐色砂礫土	径15.4、高(3.0)		(外)口ナメ。(内)縮ナデ。
4		環状石器	坪	SDA 3 M16-e 茶褐色土	口14.0、高(3.0)		(外)内径縮ナデ。
5		環状石器	坪	STK34 黄褐色土	高(4.0)		(外)縮ヘラ型リ。(内)縮ナデ。
6		環状石器	坪	L17-a-3 黄土・灰土	口18.5、高(5.0)		(外)内径縮ナデ。
7	246-4	環状石器	坪	L17-a-3 黄土色混り灰褐色土	口14.0、高(3.0)		(外)内径縮ナデ。
8		環状石器	甕	SDA 2 (6) 下層	口17.8、高(4.0)		(外)縮ナデ。(内)縮ナデのみハナメ。
9		環状石器	甕	SDA 3 黄土色土	口17.7、高(6.0)		(内)縮ナデ縮ナデ。(外)口のみキキメ。
10	239-8	環状石器	坪	STK138 灰褐色土	径13.2、高(1.0)		縮ナデ不可視。
11		環状石器	砂倉	SE6 灰褐色砂礫土	口24.3、高(4.0)		(外)縮ナデナ。旗状文。

図番	図番	種別	種別	遺構・地区・層位	法 量(m)	成 形・装 置	備考・出土・他説・その他
79-13	240-2	環状	環	M16-2 (STK15) 灰土・赤土 灰土層上	□24.7、高さ0	(外)内周壁ナシ。	焼土、砂状(中)、灰土、良好
13		環状	砂台	SP7 灰褐色砂土	高(4.8)	(外)内周壁ナシ。(外)幅凸部2本。	砂状(中-細)、灰土、良好
14		環状	鉢	M16-1 褐色砂土	□23.7、高さ0	(外)内周壁ナシ。	焼土、砂状(中-細)、灰土、良好
15	240-4	環状	環	SDA 2 灰、M14-1 灰土層上 STK15周壁	□19.5、高 5.4	(外)へう張り。(高)ハリツキ。(他)壁ナシ。	焼土、砂状(細)、(内)焼土色・(内)灰土色、良好
16		環状	鉢	M14- 灰土層上 灰褐色砂土	高(3.8)	(外)内周壁ナシ。	焼土、砂状(細)、(内)灰土色・(内)赤土色、良好
17	240-1	環状	蓋	M14- セツナリ型 灰褐色砂土	□ 9.0、高さ0	(外)内周壁ナシ。	焼土、砂状(細)、(内)灰土色・(内)赤土色、良好
18		環状	蓋	M17-4、M16- 蓋土、赤褐色土	高(5.8)	(外)へう張り。(内)壁ナシ。(高)ハリツキ。(他)壁ナシ。	焼土、砂状(中-細)、(内)焼土色・(内)灰土色、良好
19	240-9	環状	蓋	M16-4 セツナリ型 灰褐色土	高(2.3、高(4.4))	(外)へう張りのみナシ。(内)高ナシ。	焼土、砂状(細)、(内)灰土色・(内)赤土色、良好
20		環状	蓋	M16-3、4 蓋土 剥面	高(7.2)	(外)へう張りナシ。下ナシのみナシ。(内)壁ナシ。	焼土、砂状(細)、灰土、良好
21	229-7	環状	蓋	STK60	高(5.3)	(外)平行等径のみナシのみナシ。(内)壁ナシ下のみ壁ナシ。	焼土、砂状(細)、(内)焼土色・(内)赤土色・(内)赤褐色、良好
22	240-9	環状	蓋	STK15	□22.4、高 17.0	(内)壁ナシ。(外)へう張りナシ。下ナシのみナシ。(内)壁ナシ下のみ壁ナシ。	焼土、砂状(中)赤褐色、良好
23	240-8	環状	高鉢	SDA 2 赤褐色	高(9.5、高さ0)	(外)内周壁ナシ。	焼土、砂状(細)、(内)焼土色・(内)赤褐色、良好
24		環状	環	M17- 蓋土、灰褐色粘土・灰褐色砂土	高(7.8、高さ0)	(外)へう張り。(他)壁ナシ。	焼土、砂状(中)、灰土、良好

土壌群出土遺跡

図番	図番	種別	種別	遺構・地区・層位	法 量(m)	成 形・装 置	備考・出土・他説・その他
79-1		環状	蓋	STK56	□24.5、高さ30.8	(外)厚心のみナシ。(内)同心円ナシ。	砂状(細)、(内)焼土色・(内)灰土色・(内)赤褐色、良好
2		環状	蓋	STK60	高(3.7)	(外)平行等径のみナシ。一部のみナシ。(内)同心円ナシ。	砂状(中)、灰土、良好
3		環状	環	STK15、136、M17-4、3、4 灰褐色土、灰褐色粘土	高(7.0)	(外)平行等径。(内)同心円ナシ。	砂状(中-細)、赤褐色、良好

土壌群周辺出土遺跡

図番	図番	種別	種別	遺構・地区・層位	法 量(m)	成 形・装 置	備考・出土・他説・その他
80-1	240-1	環状	環	L17- 黄褐色顔り黄褐色土	□24.2、高 4.3	(外)へう張りナシ。(内)厚心ナシナシ。(他)壁ナシ。	砂状(細)、(内)赤褐色、良好
2	3	環状	環	L17- 黄褐色顔り黄褐色土	□24.8、高(4.1)	(外)へう張りナシのみナシ。(他)壁ナシ。	焼土、砂状(細)、(内)赤褐色、良好
3		環状	鉢	M17-4 灰褐色土	□24.8、高(1.7)	(外)内周壁ナシ。	焼土、砂状(中)、灰土、良好
4	240-3	環状	鉢	M17- 灰土	□23.5×22.9、高 4.4	(外)へう張り。(内)壁ナシナシ。(他)壁ナシナシ。	焼土、砂状(中-細)、黄褐色、良好
5	5	環状	鉢	M17-1 蓋土・灰土	□23.4、高 4.4	(外)へう張り。(他)壁ナシ。	焼土、砂状(中-細)、灰土、良好
6	240-4	環状	砂台	M17-4 灰褐色土	□23.4、高さ0	(外)壁ナシ。(内)壁ナシ。柱状文。	焼土、砂状(細)、(内)灰土、良好
7	240-5	環状	鉢	L17- 黄褐色顔り黄褐色土	□24.0、高(4.0)	(外)へう張りナシのみナシ。(内)同心円ナシ。(内)壁ナシナシ。(他)壁ナシナシ。	砂状(中)、灰土、良好
8	7	環状	磁鉢	M17- 黄褐色粘土・灰褐色砂土	高(9.0)	(外)へう張りナシ。(内)同心円ナシ。(内)壁ナシナシのみナシ。下部に2層一の穴ナシ。	焼土、砂状(細)、(内)赤褐色・(内)赤褐色・(内)赤褐色、良好
9	6	環状	鉢	K15-b-d 蓋土・赤褐色土	□22.8、高さ0	(外)平行等径。(内)同心円ナシ。	砂状(細)、(内)灰土、良好
10		環状	磁鉢	N16-a 2 褐色土	高(1.9)	(外)ナシ。(内)壁ナシ。	砂状(中)、灰土、良好
11	240-7	環状	鉢	N17-b-d 蓋土内	□28.0、高さ0	(外)同心円ナシ。(内)壁ナシ。	焼土、砂状(中)、灰褐色、不良
12		環状	蓋	M16-d 灰褐色土	□26.7、高さ0	(外)壁ナシ。(内)同心円ナシ。	砂状(細)、灰土、良好
13		環状	鉢	M16	□22.8、高さ0	(外)内周壁ナシ。(内)同心円ナシ。	焼土、砂状(細)、(内)灰土、良好
14	240-11	環状	蓋	M16-a 区 蓋	□29.0、高さ0	(外)壁ナシ。(内)同心円ナシ。	焼土、砂状(中)、灰土、良好
15		環状	蓋	M16-a 区 蓋	□26.3、高さ0	(外)内周壁ナシ。(内)同心円ナシ。	焼土、砂状(中)、(内)灰褐色・(内)灰褐色・(内)赤褐色、良好
16	240-10	環状	蓋	STK16 M17-b 灰褐色土	高(5.3、高さ0)	(外)壁ナシ。(内)同心円ナシ。(内)壁ナシナシ。	焼土、砂状(細)、(内)赤褐色・(内)赤褐色・(内)赤褐色、良好

M14区南壁下層出土遺物

図番	図番	種別	種別	遺構・地区・層位	法 量(m)	成 形・装 置	備考・出土・他説・その他
81-1		褐色土	埋	M14 南壁下層	□25.9、高さ0	(外)内ナシ。	砂状(細)、(内)焼土色・(内)赤褐色、良好
2		褐色土	埋	M14-a 南壁下層	□22.7、高さ(1)	(外)内ナシ。(外)凹型1個。	砂状(細)、(内)焼土色、不良
3		褐色土	埋	M14-a 南壁下層	□21.9、高さ(0)	(外)内ナシ。	砂状(細)、(内)焼土色、不良
4	240-10	褐色土	埋	M14-a 南壁下層	高 6.5、高さ(1)	(高)横ナシ。(内)割製しく(異)割製不可。	砂状(細)、(内)焼土色・(内)赤褐色、良好、内周
5		褐色土	埋	M14-a 南壁下層	高 5.4、高さ(1)	(高)横ナシ。(内)割製しく(異)割製不可。	砂状(細)、(内)焼土色・(内)赤褐色、良好、内周
6	240-15	褐色土	埋	M14-a 南壁下層	高 9.0、高さ(0)	(高)横ナシ。(内)割製しく(異)割製不可。	砂状(細)、(内)赤褐色・(内)赤褐色、良好、内周
7	18	褐色土	埋	M14-a 南壁下層 灰褐色砂土	高(1.0)	(高)横ナシ。	焼土、(外)赤褐色・(内)赤褐色、良好
8	11	褐色土	砂	M14-a 南壁下層	□27.0、高さ0	(外)内ナシ。	砂状(細)、(外)内周壁、良好
9	240-6	土砂	環	M14-a 南壁 褐色粘土質土	□26.4、高 3.5	(外)内ナシ。	砂状(細)、洗黄褐色、著層
10		土砂	埋	M14-a 南壁下層	□26.2、高さ0	(外)内ナシ。	砂状(細)、褐色、良好
11	240-4	土砂	埋	M14-a 南壁下層	□24.4、高さ(1)	(外)内ナシ。	砂状(細)、赤褐色、良好

Ⅵ 太平寺遺跡

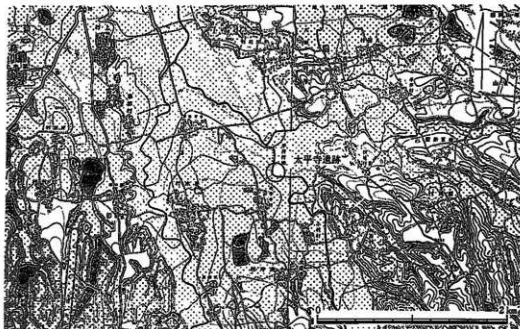
VI 太平寺遺跡

第1章 第I・第II調査区

第1節 はじめに

太平寺遺跡は堺市太平寺、及び平井地内に所在する。遺跡は泉北丘陵の一つである梅丘跡より北に延びる中位段丘の東側段丘崖より石津川左岸部にかけて広がっている。遺跡の存在は昭和50年度に行なわれた松原泉大津線建設に先立つ分布調査によって明らかになったもので、若干の須恵器片等の散布が認められたと報告されている。しかし、当時既に進行していた石津川の改修や、その後の埋立等によって地形改変が著しく、遺跡の範囲、時期についてほとんど知る所はなかった。また試掘調査も厚い盛土にはばまれて十分には実施できず、調査前に知りえた遺跡の内容は、T.P.20mほどから下に約1.7mの調査対象土層があるという程度であった。

太平寺遺跡という名称は、行基創建の伝承を持つ太平寺に由来する部落名によっている。遺跡部分は改修前の石津川が西に大きく蛇行した湾曲部の兩岸に広がっており、その流路の西側が太平寺、東側が平井地内に属する。平井地内部分に関しては昭和52年発行の「大阪府文化財分布図」では八田西町遺跡と呼称されているが、今回の松原泉大津線の調査では八田西町遺跡とはせ



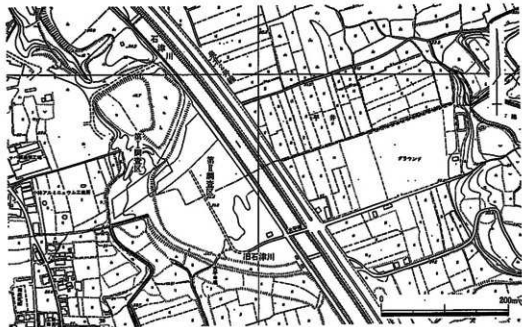
第1図 太平寺遺跡の位置

(明治18年測量)

ず、現石津川を境として左岸部を太平寺遺跡と総称し、右岸部を小取遺跡としている。こういった遺跡名の変更は、遺跡密集地の場合、以前は狭い範囲でしかなかった遺跡が分布調査の精密化と遺跡としての対象年代の拡大によって連続した面として把握されるようになり、遺跡の名称・範囲の再編が必要となるからである。このことは開発の進展とも密接にかかわっている。太平寺遺跡の場合でも本来なら旧石津川を境に左岸を太平寺遺跡、右岸を八田西町遺跡とすればよかったのであるが、現状では4m以上にもおよぶ厚い盛土のために旧石津川の位置は地上では識別できず、遺跡区分としてはやむなく現石津川を境とせざるをえなかった。そのため遺跡の境界が必ずしも遺構面の不連続性を示すものではない。

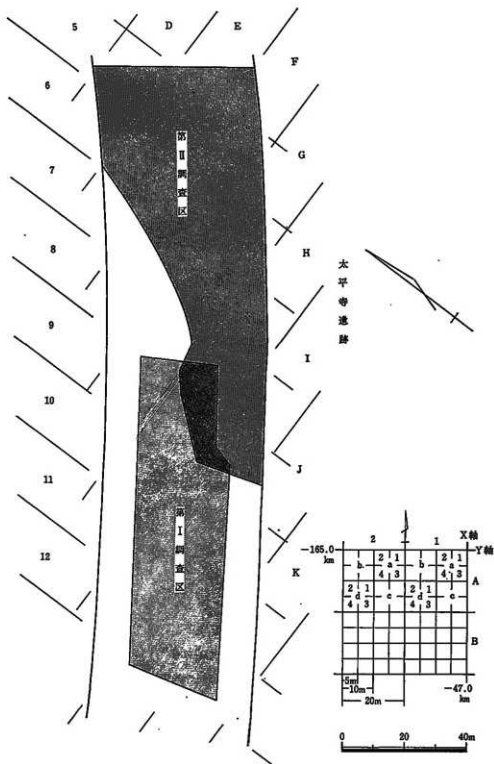
石津川が泉北丘陵を刻んだ谷を上神谷と呼ぶが、太平寺遺跡はその開口部近くに位置している。太平寺村は石津川の左岸、中段段丘上に集落を持ち、元は豊田村、片蔵村等上神谷に存する13村で構成する上神郷に属していた。太平寺村は上神郷の中では一番北側、すなわち最下流に位置する村であった。平井村はその対岸部に位置し、集落は石津川の支流である前田川の上流部において遺跡からは東北東に1.5kmほど離れている。村地はそこから石津川右岸部まで細長く延びていた。平井村は家原村や八田寺村等の12村で構成する峰田郷に属し、その一番南側に位置している。

遺跡周辺の環境は近年大きく変容している。それは泉北ニュータウンの建設が上流部で進み、それに伴ってニュータウンへの海岸部からの進入路である泉北2号線が谷底部を縦断する形で建設されたこと、また石津川もそれに添って直線上に改修されたことによって都市化が急速に進んだためである。特に旧河川と新河川に囲繞された部分の多くは泉北ニュータウン造成時の残土や産業廃棄物によって埋め立てられ、旧地形の変失が著しい。今回の調査地域はこういった盛土の



第2図 太平寺遺跡周辺現地形

(昭和53年測量)



万崎池遺跡 第Ⅴ調査区

第3図 調査区及び地区制

もっとも厚い部分であり、調査に多くの障害をもたらした。

太平寺遺跡部分を通過する松原東大津線は、海岸部より東進してきた路線が近畿自動車道と歌山線との連結のため北方向に屈曲する部分にあたり、ゆるやかなクロソイド曲線を描いている。そのため調査区の主軸は厳密な度数では言えないが、およそ北東↗南西を指している。道路幅員は東北2号線との立体交差のため通常の40m幅ではなく、52mにまで拡大されている。

調査区は万崎池遺跡第Ⅰ調査区端の段丘崖より石津川の左岸堤防端までの間約200mに設定された。これを盛土の厚い南西側と比較的薄い北東側に分け、それぞれ第Ⅰ調査区、第Ⅱ調査区とした。当初計画では第Ⅰ調査区は7mを越える厚い産業廃棄物層が予想され、工法的に全面調査が困難なために比較的土留工の容易な長さ89m、幅10mのトレンチが路線中央に設定された。第Ⅰ調査区は掘削深度が3.5mの予定であったため、鋼矢板を自立させうる所から一応全面調査を指向した。しかし調査区西側には未買収地や隣接する工場の塀が用地内まで延びていたために、この部分に関しては調査区を縮小せざるをえなかった。このため第Ⅱ調査区は南東辺140m、北東辺50m、北西辺49m、西辺109mの不整形な台形状に設定された。

調査は当初このような予定で着手したのであるが、事前調査が厚い盛土にはばまれてか十分にはなされておらず、調査の過程で調査区の形状変更や掘削深度の大幅な変更等があり、最終的な調査区の形状は第3図のようになった。第Ⅰ調査区と第Ⅱ調査区の範囲は、第Ⅰ調査区調査時に旧河川底に埋設されたヒューム管の位置確認の必要から広く掘削したために一部重複している。

第Ⅰ調査区は調査の結果、産業廃棄物埋立時に完全に被覆されていることが判明し、機械掘削のみで調査を打ち切っている。

第Ⅱ調査区は4918㎡が調査されたが、地形的に北東端の沖積段丘面とその南西側の石津川の氾濫原に分けられる。沖積段丘面ではT.P.19.0～20.7mの間に4枚の遺構面が検出されている。

第1遺構面は埋立前の水田面の床土下で検出されたもので、平安時代後期から鎌倉時代初頭にかけての掘立柱建物2棟と近世の焼物の埋燬を伴う土壌3基等が検出されている。

第2遺構面は5世紀後半に限定できる遺構面で、堅穴住居跡2棟、落込み2個と若干のピットが検出されている。またこの遺構面に若干先行する時期から6世紀末まで流れていた石津川の前身と思われる埋設河川が調査区東隅で検出されている。

第3遺構面は弥生時代から古墳時代前半までの遺構面で、遺物の出土はほとんどないものの、5個の落込みと若干のピットや浅く幅広い凹地とその底にある落込み群が検出されている。

第4遺構面はだめ押しの筋掘時に従来地山下として調査の対象にしていなかった土層中から検出されたもので、遺物はまったく伴わないものの3基の土壌が検出されている。時期は沖積段丘形成途上の生活面と考えられ、縄文時代に属する可能性が高い。

沖積段丘面での遺物としては、第2遺構面に伴う包含層や遺構、及び埋設河川中より、5世紀後半から6世紀末にかけての多量の須恵器を主にした遺物が出土しているが、籠の羽口や鉄滓、製塩土器等も含まれている。

氾濫原ではT.P.13.7mから18.8mまでの間の中、近世の堆積層があり、近世の水田耕作に伴う牛の足跡や計画性に富んだ粘土掘削跡、及び中世の洪水跡が検出されている。遺物も縄文、弥生式土器を始めとして近世の染付まで雑多なものが出土している。

第2節 微地形と層序

1 微地形

太平寺遺跡の現状は厚い盛土に覆われており、旧地形をうかがわせるものはまったく残っていない。そのため、今回の調査では旧地形を現出させるために、既に旧地形が破壊された部分を除いても、最も深い部分では4.5mを越える盛土を除去しなければならなかったほどである。

石津川は現在は改修を受けて流路が直線状に付替えられているが、元来は上神谷を大きく蛇行しながら流れていた。川は一たび平衡状態に達すると下方への侵食は止まり、側方への侵食を強めて蛇行を大きくしていくが、調査区域も石津川が西へと蛇行を強めていく頂点部分にあたる。今回の調査でもこの部分が蛇行を強めていった跡がよく観察されている。

遺跡周辺の旧地形はこの石津川によって形成されたものであるが、それらは3つの部分に分けられる。一つは第Ⅰ調査区の大部分を占める中位段丘の段丘崖であり、一つは第Ⅱ調査区の南西側大半を占める石津川氾濫原、もう一つは調査区北東端20mほどで検出された沖積段丘面である。

段丘崖部分は産業廃棄物の投棄時に完璧なまでに破壊されており、今回の調査ではその地形的特徴を把握することは出来なかった。本来この部分は途中崖面をはさみながら緩やかに傾斜する地形が階段状に整地され、棚田となっていたようである。中位段丘上の万崎池遺跡第Ⅰ調査区の崖際のレベルがT.P.約24.5mであり、氾濫原である旧石津川右岸の水田面がT.P.約18.8mであるところから段丘崖の比高差は5.7mほどになる。



第4図 太平寺遺跡周辺旧地形

(昭和36年測量)

氾濫原では第Ⅱ調査区南西端で埋立前の石津川右岸堤防が検出されたが、第Ⅰ調査区の攪乱はこの堤防部分で止まっていた。このため、この堤防と東側の沖積段丘崖に囲まれた半月形の氾濫低地はよく保存されていた。こういった氾濫原は石津川が蛇行を強める過程で主に沖積段丘面を侵食して形成したもので、流路に添った帯状の低地となっている。狭い所で数十m、幅広い所では200mを越えるこの低地の多くは水田として利用されていたが、第Ⅱ調査区部分は河川改修後、新河川と旧河川に囲まれて不便だったのか荒地となっていたようである。

沖積段丘面は上神谷の谷底を広く覆う平坦な面であり、第Ⅱ調査区北東端で幅20mほどが調査された。この上面はT.P.約21.0mほどであり、氾濫原とは2.2mほどの比高差がある。この面はほぼ水田化されており、条里地割をよく残している。この面の形成時期に関しては、縄文時代前期を中心とした海進時とする説が有力であるが、局所的に見ればより新しい堆積土層が段丘面を覆っている場所もあり、一概には言えないようである。とにかく沖積世に入って以降に形成さ



第5図 周辺の条里地割及び坪付(柳市史より)

れた新しい段丘面であり、従来は地山下として調査の手が延びていなかった所であるが、最近はその層中から縄文時代の遺構や遺物が発見されている。今回の調査でも弥生～古墳時代の遺構面下、従来地山とされていた黄褐色シルト層より1m下面で遺構の存在が確認されている。

なお、上神谷の沖積段丘面上に広く残されている条里地割は、太平寺遺跡より1kmほど南に位置する和田の集落の南を境として上、下流で規軸線が異なる。太平寺遺跡周辺をも含めた谷の下流側は、より下流の石津川流域部に広範に施されている条里地割と軸を一にしており、方向はN-16°-Wをさしている。この条里に関しては、その範囲内に大鳥神社を有することから、その古文書等にも記録が残っており、里名、坪付等も大鳥神社周辺を中心として判明している所が多い。

谷の上流部は軸を若干西に振っており、N-23°-Wをさしている。これは、この地域が石津川の源流部に近く、上神谷の谷幅も狭くなっている所から、平野部

のままの規軸線では谷線とのずれが大きくなり、水路の勾配等で工法上無理が生じるために、谷の主軸に合わせて軸を西に振ったものと思われる。

坪付は字名として残された坪名から推測すると千鳥式の命名がなされているようで、太平寺遺跡の周辺では1、2坪と36坪という字名が残されている。それらから第Ⅱ調査区の沖積段丘面は31、32坪に当たると考えられる。

2 層序

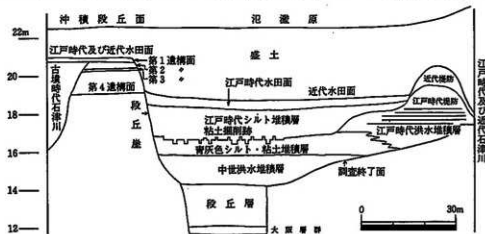
A 第Ⅰ調査区

段丘面部分にあたる第Ⅰ調査区は、前述したように産業廃棄物の投棄時に攪乱を受けているため層序を把握することはできなかった。この産業廃棄物はGL-11.5m、T.P.約15.0mまで掘削してもなお下に続いており、投棄前の掘削が相当大規模に行なわれたことを示している。これは事前に深く穴を掘ることによって収益のよい産業廃棄物の投棄量の増大を計ったものであろう。なおGL-11.5mまで掘削した時点で一部プライマリーな地層が見え始めたが、これらは小礫を含む砂層であり、遺物の存在は認められなかった。危険防止のためそれ以上は掘削できなかったが、段丘上の万崎池遺跡第Ⅰ調査区との境の壁面では段丘礫層を主体とした堆積が観察されており、これらの砂層はそれよりはさらに下層になる所から洪積世の堆積物としてまちがいないものと思われる。

ともかく、この第Ⅰ調査区の層序は概念的に見れば、中位段丘を形成する段丘層の露頭と、それが崩壊して斜面部、あるいは裾部に二次堆積した土によって構成され、その後、人為による切盛によって耕地化されたと考えられる。

B 第Ⅱ調査区

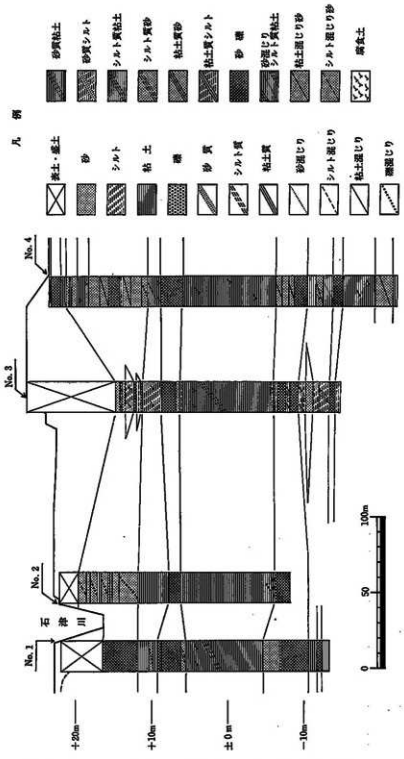
第Ⅱ調査区は地形的に上神谷谷底に広く分布する沖積段丘面と、石津川が沖積段丘面を開折した氾濫原の2つに大別されるが、それらは堆積時期・堆積状況が異なるため相互の関連が薄い。本来この氾濫原は、この谷を埋めつくした沖積段丘面が海退、あるいは地盤隆起等を契機として



第6図 第Ⅱ調査区土層及び遺構面概略図

太子寺遺跡 万崎池遺跡

第Ⅱ調査区 第Ⅰ調査区 第Ⅴ調査区



第7図 ボーリング柱状図 (大阪府特定街路建設事務所地質調査報告書より)

生じた石津川の侵食作用の活性化によって開折、形成されたものであり、侵食されなかった氾濫原の下層部分においては共通の堆積層が残っているはずである。しかし、氾濫原での中世堆積層がT.P.13.7mまで下がるのに対し、沖積段丘面では危険防止のためT.P.16.0mまでしか掘削できず、深層部分での関連性はつかめなかった。

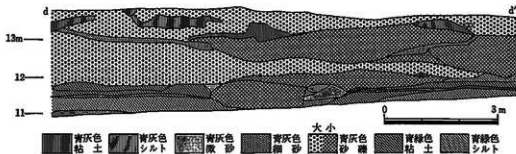
今回の調査で確認された最深部は氾濫原で行なった最終掘削CトレンチでのT.P.11.0mであるが、これよりT.P.12.0mまではやや緑色がかった青灰色粘土やシルトが堆積している。これらの層はこの上層の青灰色砂礫層とはまったく異なっていることや、中位段丘上でなされたボーリングデータでも同様のレベルから下層に厚い粘土、シルト層が存在する所から大阪層群と見てまちがいないものと思われる。またこの最上面は小流路による侵食作用が観察され、この時点では陸化していた可能性が高い。

これらの層の上はT.P.約13.7mまでが青灰色砂礫を主体として同色のシルトや粘土の薄い不連続な間層を挟む厚い堆積層である。この層はその上の中世堆積層である青灰色砂礫層との境が同じような堆積物のため明瞭ではないが、遺物が含まれていないこと、層の堆積単位が比較的厚いことで区別される。この堆積層は大阪層群の上に乗る段丘層と考えられるが、中位段丘の万崎池遺跡等で観察された大礫を含む典型的な段丘礫層とは礫径が小さいことや砂分が多いこと等で異なっている。

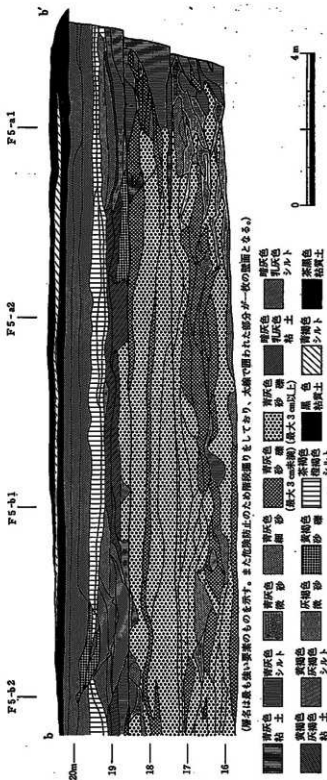
この青灰色砂礫層より上は、氾濫原では時代が大幅に新しい中世以降の堆積層になるため、この堆積の連続性を追



第8図 氾濫原土層柱状図



第9図 氾濫原最終掘削Cトレンチ土層断面図



いけるには沖積段丘下の堆積状況を見なければならぬ。しかし、沖積段丘上で確認された最深部はT.P.16.0mであり、氾濫原の青灰色砂礫層上面との間に2mほどのギャップがあって連続性をつかめたとはいいがたい。沖積段丘面ではT字形に2本の筋担を入れ、下層の層序を確認したが、それによるとF5ラインに東西方向に入れたAトレンチではT.P.16.0mからT.P.18.8mまでは青灰色や灰褐色を呈する砂礫層の堆積が卓越している。この砂礫層は複雑に切りあつた礫層をなしており、3cm大の礫を含む多様な砂礫粒で構成されている。下部はどそういった傾向が強く、上部は各層の層厚が厚く、しかも広い範囲を覆うようである。トレンチ東端のF5-a1ライン付近では青灰色粘土を主とした堆積があり、粘土が西側に垂れ込むような堆積状況が観察された。これは砂礫層を堆積させた流路の河岸部が、この地点からやや東側にあったことを示している。E5ラインに南北に入れたBトレンチではT.P.16.2mから17.6mまでの間が青灰色砂礫層であり、その上はT.P.18.8mまでが青灰色シルトの堆積になる。Aトレンチと比較すると、青灰色砂礫層の上面が1.2mも低い、この差はAトレンチでの砂礫層上、

第10図 F5北壁断面図(最終筋担Aトレンチ含む)

下部の堆積状況の差異に対応するかも知れない。このBトレンチでも深掘部の北端のE5-b3付近で青灰色シルトや粘土の南側への垂れ込みが見られ、河岸部と見てまちがいないものと思われる。これとAトレンチ東端の河岸部との関係であるが、直線距離にして15mほどしか離れていないことや、Aトレンチ西端部でも対岸が検出されていないこと、またAトレンチの狭い範囲内ではあるが、粘土面が南東⇨北西方向を示していることなどから同一河岸である可能性が高い。

沖積段丘面においては、この砂礫層より上部は茶褐色や黄褐色の粘土やシルトの堆積が顕著になり、T.P.20.3m前後まで続く。これらの層は断面観察によるとほぼ水平堆積をしており、層厚も0.1~0.4m程度である。なお、これらの層の堆積過程において、浅い幾本かの小流路の存在が認められ、やや砂粒の粗いシルトや微砂が埋没している。小流路はすくなくとも断面四作或地点では河床の上昇にもかかわらず、ほぼ同じ場所を流れる傾向があるようで、Aトレンチでも2ヶ所でそれが観察されている。

このシルト層の下部、T.P.19.0m付近において炭化物を少量含む灰茶色シルト層があり、その下層の茶褐色シルトを切り込んだ土壌が3基検出されている。この遺構面が第4遺構面、太平寺遺跡の最終遺構面である。この遺構面は最終掘削BトレンチのD5-d3からE5-b3にかけての範囲で検出されたもので、Bトレンチの南半部、

及びAトレンチでは小流路の侵食によって残っていないか
23m—
22—
21—
20—
19—
18—
17—
16—

盛土
耕土・床土
茶黒色粘質土
黒色粘質土
黄褐色シルト
灰茶色シルト
茶褐色シルト
青灰色砂礫
+シルト
+粘土
偽層状堆積

第1遺構面
(平安~江戸)

第2遺構面
(古墳)

第3遺構面
(弥生~古墳)

第4遺構面
(縄文)

かつこの遺構面の時期であるが、遺物がまったく出土していないので特定はできないが、弥生時代の土器が出土している従来地山と考えられてきた黄褐色シルト上面よりは1.3mも下位にある所から、縄文時代の後半に属する可能性が高い。

黄褐色シルト層の上はT.P.20.3m前後にある層厚0.1mほどの黒色粘質土であるが、この層には弥生時代から古墳時代にかけての遺構群が検出されている。ただ、これらの遺構の個々の時期は遺構内出土遺物が1例を除いてまったくないため、特定することは困難であり、上層にある茶黒色粘質土が5世紀後半にはほぼ限定できることから、それ以前のものとしか言えない。

黒色粘質土の上には層厚0.2~0.4mの茶黒色粘質土が堆積しており、この下面が第2遺構面となる。この茶黒色粘質土中には5世紀後半にはほぼ限定できる多量の須恵器等が含まれており、比較的短期間に堆積が進んだものと思われる。これは当時の石津川と考えられる埋没河川が調査区東南隅のE4からF4地区にかけて検出されて

第11図 沖積段丘土層柱状図

おり、この河岸部にあたるこの一帯での沖積作用が盛んであったためであろう。なお、この河川からは、その埋没土である灰褐色砂礫土中より須恵器を主とした多量の遺物が出土しており、その下限が6世紀末である所から、そのころ埋没し、流路を他に転じたものと思われる。

T.P.20.7m前後のこの茶黒色粘質土の上面は、一部灰褐色砂質土の残っている所があるが、大部分はすぐ床土に移行し、旧耕土へと続く。この茶黒色粘質土の上面が第1遺構面であり、平安時代から江戸時代にかけての遺構が検出されたが、この遺構に入っている土は灰褐色砂質土であって、茶黒色粘質土とはまったく異なった土である。これは本来茶黒色粘質土の上面に広く灰褐色砂質土が覆っていたことを示唆しているのであろうが、この土は後世に大規模に削平を受けたために残っていないと考えられる。

氾濫原においては段丘層である青灰色砂礫の上は、やはり同色の砂礫層がT.P.15.7m前後まで堆積している。この砂礫層の堆積は複雑な偽層状を呈しており、局部的には粘土の堆積が見られるものの、大部分はさまざまな大きさの砂礫で占められている。中には10cmを越える大礫を含む層もあり、また層中に多数の流木を埋没させている。幹径1m近いものもある流木は多くは根ごと流されており、洪水の規模の大きさを窺わせる。これらの層の堆積時期は、層中に縄文土器を始めとして雑多な遺物が含まれているため厳密には特定できないが、一応出土遺物の下限からして室町時代までは下るようである。堆積順序も複雑な切り合いのため明瞭ではない。堆積層の色が灰褐色を呈する調査区西端部の堤防下の堆積は江戸時代にまで下る。

これらの砂礫層の堆積後、石津川の流路は調査区西端部のI8、9地区以西に移行し、蛇行を強める。そのため右岸部にあたるそれ以東では灰褐色砂礫や青灰色シルト、暗青灰色粘土等の薄い水平な互層状堆積が発達する。これらの層は流路に近い西側部分ほど砂粒が大きく、東に行くにつれ小さくなり、F6、G6地区などの段丘崖に近い部分ではほとんど粘土ばかりとなる。この右岸部の微高地は流路に添った部分で特に発達し、3cm大の礫を含む砂礫層やシルト層によって東側の後背湿地との比高差を2mほどにする。こういった堆積現象は蛇行の湾曲部の内側で顕著に見られるもので、地理用語では蛇行州の一種である Point-Bar と呼称されるものである。

氾濫原はこの蛇行州の発達によって石津川の流路部分と後背湿地に明瞭に分離されるようになり、石津川はこれ以降も蛇行を強める働きによって徐々に流路を西へと移動させていく。しかし、一方では人為による河道の固定化への努力がなされるようになり、その結果として河床の上昇が進行してくる。このことは既に17世紀中頃には石津川の支流である和田川の河床上昇で水害に悩まされているという記録が残っているほどである。

後背湿地ではT.P.16.6mまで青灰色粘土が堆積しているが、江戸時代の中頃この粘土を極めて計画的に掘削した後が検出されている。この掘削跡はその掘削度が風化する前に層厚0.2mほどの青灰色砂礫によって埋没してしまうが、このため掘削工具の使用法等がよく観察できた。

この砂礫層の堆積後、後背湿地ではT.P.18.2mの高さまで青灰色や灰褐色の粘質のシルト層が堆積する。この層は極めて薄い微砂や小礫の混じった砂層を所々間層として挟むが、層そのもの

のはほぼ均質な堆積物である。この堆積はこの層の上面で江戸時代と思われる水田面が検出されている所から、短期間に進行したものであろう。この1.6mにもおよぶ短期間の土層の堆積は、当時の新田開発の盛行によって生じた濁流の大量発生と関係するかもしれない。

この層の上面が牛の足跡が多数検出された水田面であり、その上に0.2mほどの灰褐色微砂やシルトが堆積している。さらにその上面が床土、旧耕土であり、そのレベルはおよそT.P.18.8mである。

第3節 第I調査区の遺構

従来、松原東大津線の発掘調査は道路用地全域を対象として実施してきたが、第I調査区の場合は7mにもおよぶと予想された厚い産業廃棄物の盛土のため、全面を一気に調査することは困難であった。そのため、取りあえず路線中央に土留工が比較的容易な幅10m、長さ89mのトレンチを入れ、両側の未調査部分に関しては、その結果を見て拡張するかどうかの判断をすることになった。中央トレンチは計画ではできるだけ土圧の負担を少なくするために、まず側道計面高まで約2mほどを十分な法をつけて切土し、そこからⅡ型12mの鋼矢板を打設して調査区を開く。そして盛土を5.5mまで機械掘削しながら順次切梁を3段架設して土留を強固なものにし、その後1.7mを人力掘削し、発掘調査を遂行するというものであった。

第I調査区に積まれた産業廃棄物の山はT.P.26.5mまで盛り上げられていたが、これは産業廃棄物の投棄料が極めて高いために、処理業者ができるだけ大量に投棄しようとするからである。このような業者の思わくが、公有地である改修前の旧石津川部分までを不法に埋め立てるという行為を引きおこし、現在もその事後処理で紛糾を続けている。この不法投棄のために、旧河川敷の位置が地表では判別できなくなっており、我々の作業はまずこの河川底に敷設されたヒューム管の位置確認から始めざるをえなかった。それはこのヒューム管を破壊できないために、その埋設ラインが第I、第II調査区の境界になるからである。

このヒューム管の試掘の結果、位置の確認はできたのであるが、その過程で意外なことが判明した。それはこの産業廃棄物の内容が想像以上に悪く、巨大なコンクリート塊を始めとする大量の瓦礫が含まれていたことである。このままでは鋼矢板の打設が瓦礫に阻まれて不可能なため、上幅30m、下幅10mの断面形状で産業廃棄物を除去することになった。しかし、掘削後の壁面をそのまま放置しておけば浮石等の転落事故の恐れがあり、それを防ぐために比較的良質な第II調査区の盛土を第I調査区に搬入して埋め立て、その後鋼矢板を打設することに計画変更した。しかし、実際に産業廃棄物を除去しはじめると、当初は7mほどであろうと考えられていたその厚さが、処理業者が投棄量を増すために事前に深い穴を穿っていたために、予想以上であることが判明した。掘削をGL-11.5mまで行なったが、一部でプライマリーな地層が検出され始めたものの、大部分は依然産業廃棄物で覆われていた。これ以上の掘削は危険であり、またプライマリーな地層も無遺物層であったためにこの時点で調査を打ち切り、再び除去した産業廃棄物を埋め

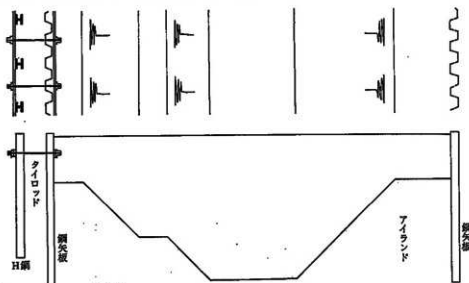
戻した。既に遺構面が破壊されていることは、隣接する万崎池遺跡第Ⅰ調査区の中位断丘崖際の最終遺構面がT.P.約24mであって、第Ⅰ調査区の掘削最終面がT.P.15.0mであることから、断丘崖の傾斜度を考慮しても間違いないものと思われる。また遺構面が最も低いと考えられる旧石津川左岸部も破壊を受けていることを確認しており、第Ⅰ調査区部分は既に完璧に破壊されていると判断せざるを得なかった。とにかく、第Ⅰ調査区の調査は産業廃棄物処理業者の無法と事前調査の不十分さのために惨たんたるものであった。

第4節 第Ⅰ調査区の遺構

1 調査の方法

第Ⅰ調査区は掘削深度が予定では3.5mであったために、Ⅱ型10mの鋼矢板を打設すれば切梁等の付帯施設なしで自立可能なため、一応全面発掘を行なうことになっていた。しかし調査区西側に未買収地があったことと、産業廃棄物処理業者の工場跡が用地内に延びていたために、今回はその部分の調査を除外することになった。調査区の形状は旧河川敷のヒューム管の位置確認の結果とも合わせて第3図のように不整形なものになったが、面積的には4918㎡ある。

掘削深度は予定では機械掘削1.8m、人力掘削1.7mであったが、実際盛土を除去しはじめると現石津川筋20mほどの沖積段丘面以外は盛土の厚さが4m前後にもなることが判明した。このためⅡ型10mの鋼矢板では自立が不可能であり、しかも調査区の幅が広いことで内に切梁を架設するわけにもいかず、結局調査区外にH鋼を打設し、それと鋼矢板を鉄棒で連結して土留を強固なものにするタイロッド工法を採用した。これで5mまでの掘削に耐えうるようになった。また未買収地のある北西側は産業廃棄物の盛土で比高4mほどの崖面になっており、タイロッド工法の施工は無理なためⅢ型15mの鋼矢板を打設して自立させるようにした。また掘削深度が5mを越



第12図 第Ⅰ調査区調査方法

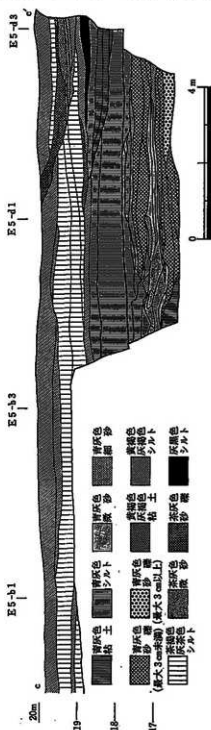
える場合には、深くなるほど増加する土圧を鋼矢板内側にアイランドという土壁を残すことによって、その重さで均衡させるという方法で鋼矢板の倒壊を防ぐことにした。この方法は鋼矢板打設にもかかわらず、調査区内を階段掘りする形となつて未調査部分を残すことになるが、これは鋼矢板打設後に掘削深度が大幅に深くなるのが判明したということやむをえなかった。その他、必要に応じて種々の安全対策を講じながら調査を進めた。

2 沖積段丘面の遺構

A 縄文時代の遺構（第4遺構面）

この遺構面は太平寺遺跡における最終遺構面であり、従来その存在を知られていなかったものである。これまでは沖積段丘面の地山として認識されていたのは黄褐色シルト層であり、今回の調査でも第3遺構面であるその上面で終了予定であった。ところが古墳時代の旧石津川の調査時にその肩部に古い埋設河川が見つかったために、その流路の方向を探る目的で筋掘を入れた所、偶然この遺構面が検出されたものである。

筋掘はT字形に2本のトレンチを入れたのであるが、F5-a・bラインを北壁として東西方向に設定したものをAトレンチ、それに直角にE5-b・dラインを東壁として北に延ばしたものがBトレンチである。最初はAトレンチから着手し、まず幅1.5m、深さ1.5m、長さ22.0mを人力掘削して遺構、遺物の無い事を確認した後、トレンチの幅を南に拡張して深さ約4mまで機械掘削し、層序を観察した。南北に設定したBトレンチでは、Aトレンチの結果から下層に遺構面がないと考えられたので、当初より機械で掘削を始めた。BトレンチはE5-b3、及びE5-d3にかけて長さ約10m、幅約5mを深さ約4mまで掘削し、その北端部で目的の埋設河川の肩部を検出した。そこで肩部の全容を知るためにトレンチをさらに北に10mほど延長することになり、上層より機械を使用して掘削を始めたのであるが、1mほど掘削した時点で炭化物、及び焼土の散布が認められたために、急ぎょ人力掘削に



第13図 最終筋掘Bトレンチ断面図

変更し、その面の精査を行なった。その結果、土壌が3基と若干のピットが検出された。調査はSKA 2が西壁外に続くためその部分だけトレンチを拡張している。

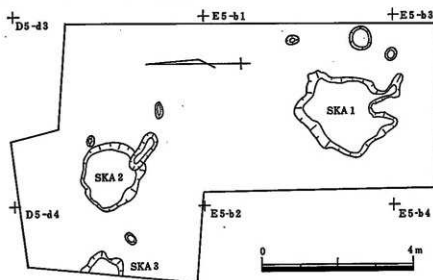
この遺構面はT.P.19.0m前後の茶褐色シルト層上面にあり、その上を灰茶色シルト層及び一部灰褐色シルト層が0.2~0.4mほど覆っている。この灰茶色シルト層が遺物は出土しなかったものの包含層に相当する層であり、炭化物の散布が少量ながら認められた。茶褐色シルト、及び灰茶色シルトの両層とも茶黒色の小斑状の鉱物粒子を多量に含んでおり、そのために層全体が茶色の強いものになっている。この遺構面がAトレンチで検出されなかったのは、Bトレンチ南端部で浅くて幅の広い自然流路がこの遺構面を削削しているのが観察されており、Aトレンチ側もこの流路の中に入っているためと思われる。

土壌は3基検出されたが、共に不整形なものである。切り込み面近くから検出されたものはSKA 1のみであるが、それは垣土が茶黒色粘土や茶褐色粘土であり、その中に炭化物や灰、10cmを越えるものもある焼土塊などが多数ブロック状に含まれていた。底面は凹凸が激しいが、炭化物等の少ない部分はそれが含まれていることであらうじて地山と区別できる程度であり、焼けて赤化した部分もなかった。他の2基もほぼ同様であるが、SKA 3は若干炭化物が少なかった。

ピットは6個検出されたが、径0.3~0.6m、深さ0.1~0.2m程度のもので、垣土も茶黒色シル

第1表 縄文時代土壌一覽表

遺構番号	地区	形状	長径	短径	深さ	埋土	炭化物の量	備考
SKA 1	E5-b1	不整形	2.8m	2.1m	0.3m	茶黒色粘土 茶褐色粘土	極めて多し	ほぼ全容が検出された。
SKA 2	D5-d3	"	1.8m	1.5m	>0.1m	茶黒色シルト 灰褐色シルト	"	上部を機械掘削時に削平している。
SKA 3	D5-d4	"	—	1.1m	0.1m	暗灰白色粘土	やや少ない	東半部のみを検出。



第14図 縄文時代遺構平面図 (第4遺構面)

トや茶褐色シルトである。住居跡を構成するようなものはなかった。

この遺構面の時期は、上の第3遺構面で弥生時代の土器が出土しており、それよりは1.3mほど下位にあることから縄文時代後半に属するものとして間違いないものと思われる。遺構の性格としては炭化物、焼土等を多量に含むため伊跡と考えられるが、壁面がまったくといっていいほど火をうけた痕跡がなく、長期間使用したものではなさそうである。なお、この遺構面の検出が周囲の埋戻しがほぼ完了した調査最終期の時点であったために、これ以上の拡張は無理であった。

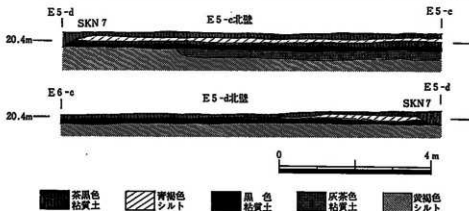
B 弥生時代～古墳時代前半の遺構（第3遺構面）

この遺構面はT.P.20.1～20.3m前後の従来地山と考えられていた黄褐色シルト層上面で検出されたもので、包含層、遺構とも遺物の出土が極めて少なく、およそ弥生時代から古墳時代前半にかけてのものであろうとしか言えない。包含層である黒色粘質土の一次上層には5世紀後半には限定できる包含層が存在する所から、それよりは古い時期のものである。検出された遺構は不整形な落込み群とピット群であるが、それらは埋戻土や切合い関係から3時期に分けられる。

もっとも古いものは暗黄褐色粘質土や炭化物、焼土を若干含んだ茶褐色粘質土等を埋戻土として持つもので、プランの不明瞭なものが多い。ピットでは暗黄褐色粘質土を埋土に持つものがこの期に属するものであろうが、その数は少ない。遺物を出土した遺構はただ1つであり、SKN 5より弥生時代中期と思われる土器の細片が出土している。なおこの期の遺構の検出は、表面の乾燥が進んで困難を極めたため、表面を数cmほど削平した後に行っており、新しい時期の遺構とは検出面を異にしている。

この落込み群は、段丘面中央部で東側に0.2mほど落ちる広い凹地によって切られている。この凹地は反対側の肩は検出されなかったものの、自然的成因によって形成されたものと思われ、均質な灰茶色粘質土が堆積していた。この凹地の底面では不整形な浅い落込み群が検出されたが、この埋土も灰茶色粘質土であり、人為によるものとは言えないようである。この灰茶色粘質土からはサヌカイトの刻片1片と、弥生時代中期の甕及び高環が各1個体出土したのみである。

主として茶黒色粘質土や灰茶色粘質土を埋土として持つピット群は、西西部の落込み群が埋戻



第15図 E5-c・d北壁断面図

した後に穿たれており、それらよりは新しい。また凹地上では検出されなかったため、凹地よりは古いと考えられるが、しかし、埋土が同じ様な黒色系統の粘質土のために検出できなかった可能性もあり、一概には断定できない。また凹地以前に穿たれたものと、凹地埋没後に穿たれたものが共存していることも考えられるが、遺物がまったく出土しなかったために検証は困難である。ピットの分布は散在的であり、しかも柱穴とは認めがたい不整形なものもあって建物を構成するようなものはなかった。

この遺構面を覆う包含層は層厚0.2mほどの黒色粘質土であるが、ほぼ水平な堆積をしており、凹地が完全に埋没した後に堆積している。そのため黒色粘質土の堆積と、西半の遺構面の間に若干の時間差が想定できるが、それは黒色粘質土中には若干の須臾器が含まれているのに対し、SKN5、あるいは凹地中から弥生時代中期の土器が出土した事実と合致する。しかし出土した土器が後者の場合3個体分しかなく、それぞれの遺構が当該時期であると断言するにはいささか心もとない量であり、もう少し時間差が縮小する可能性もある。

この3つの時期は前述したように必ずしも時間差を示すものではないが、一応3-a、3-b、3-c期としてそれぞれの遺構の特徴を記す。

3-a期の遺構としては5個の落込み、溝1本と若干のピットが検出された。

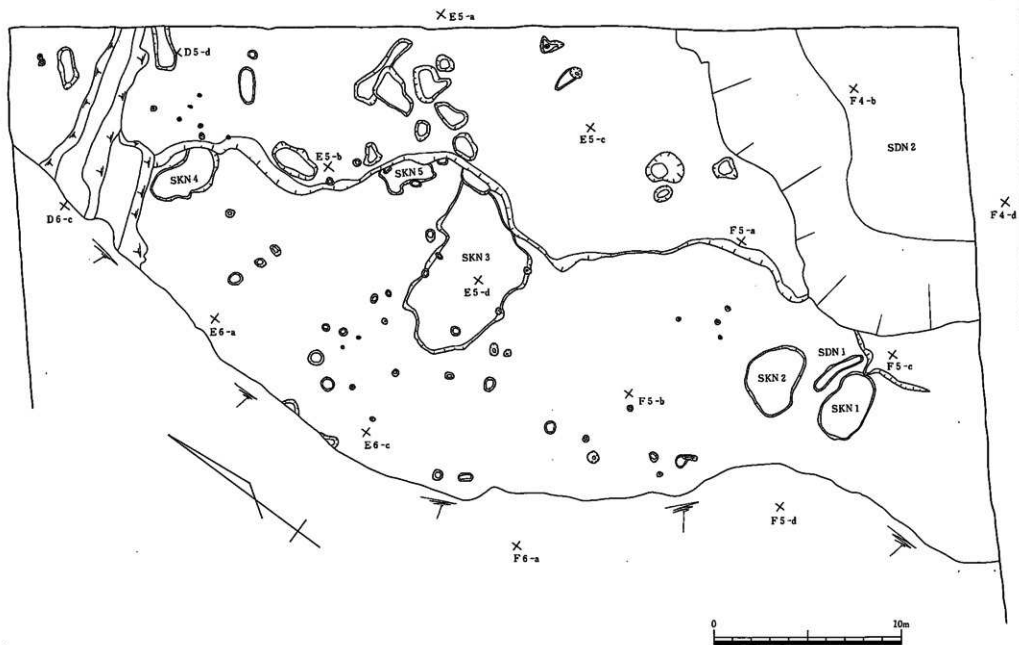
5個の落込みは2つのタイプに分類できる。前者はF5地区で近接して検出されたSKN1、2で長径4m前後、深さも0.2mほどのやや不整形のものである。埋土は上部が暗黄褐色粘質土や暗灰褐色砂質土、下部が地山よりかすかに暗色を呈していることと、やや粘質が強いことで区別される黄褐色粘質土である。埋土中に炭化物をほとんど含まないことが後者との著しい差である。

後者はD5からE5地区にかけて検出されたSKN3、4、5で、3が長径9mほどの大きなものであるが、4、5は3~4mほどの大きさである。プランは極めて不明瞭、不整形であり、深さもおおむね0.2~0.3mであるが、1部0.5mを越える部分もあって底部の凹凸も激しい。

埋土は上部が炭化物、焼土塊を多く含む茶褐色粘質土や茶黒色粘質土、下部が若干の炭化物を含む黄褐色粘質土で地山との区別が明瞭ではない。焼土塊は10cmを越える大きなものも散見されたが、多くは1cm以下のものであり、炭化物も木の痕跡を留めているようなものはほとんどなかった。遺物では唯一SKN5より弥生時代中期と思われる土器の細片が出土しているが、これも

第2表 弥生時代~古墳時代前半落込み一覧表

遺構番号	地区	形状	長径	短径	深さ	埋土	炭化物の有無	備考
SKN1	F5-a-c	不整形	3.9m	2.4m	0.1~0.2m	暗黄褐色粘質土 黄褐色粘質土	ほとんどなし	
SKN2	F5-a	〃	4.0m	2.8m	0.1m	暗灰褐色粘質土 黄褐色粘質土	〃	
SKN3	E5	〃	8.8m	5.1m	0.1~0.2m	茶黒色粘質土 黄褐色粘質土	多し	底面凹凸激しい
SKN4	D5-d	〃	3.9m	2.0m	0.1~0.3m	暗黄褐色粘質土	〃	〃
SKN5	E5-a	〃	3.0m	>1.9m	0.1~0.5m	茶褐色粘質土 暗黄褐色粘質土	〃	弥生時代中期と思われ る土器片出土



第16圖 弥生時代～古墳時代の半農樺平面圖（第3遺構面）

落込みの埋没中に混入したものと思われ、その遺構に伴うようなものではない。

これらの落込みは、前者はともかく後者については炭化物、焼土塊を含むことで、人為的加わった可能性もあるが、不整形で規則性もなく、どのような性格のものかは不明である。

溝(SDN1)はF5地区においてSKN1、2間で検出されたもので、幅0.6m、深さ0.1~0.2m、長さ3.0mの規模である。埋土も地山よりはやや暗色が強い暗黄褐色粘質土であり、水が流れていたようなものではなく、細長い窪地状のものである。

この期のピットは落込み群と同様の埋土を持ったものが該当すると思われるが、約10個ほどがそれに相当する。径も0.2~0.6m、深さも0.1~0.2mの浅いもので、分布も散在的である。

3-b期とするものは沖積段丘面の東半部で検出された凹地と、その底面に分布する落込み群が該当する。凹地は西側肩部とそれに続く底面の平坦部が検出されている。反対側の東側肩部は検出されていないが、恐らくは浅くて幅の広い凹地状の地形の一部と思われる。西側肩部からの傾斜面はF5-C1より形成が始まり、ゆるやかに蛇行しながらD5-d2にいたるが、それより北は近世の削平のために残っていない。この段の比高差は0.2mほどである。埋土はほぼ均一な灰茶色粘質土であるが、地山の黄褐色シルト面との境界付近は漸移的に移行する。底面は南側のF5-C1付近ではT.P.約20.1mであるが、北側のD5-d2付近ではT.P.約19.8mで、南から北へと低くなるという傾向を持っている。しかし同じ勾配率で低くなるというものではなく、0.1~0.2mほどのゆるやかな起伏を繰返して徐々に低下している。

この底面に長さ1~4m、深さ0.1~0.2mほどの16個の不整形な土坑状の落込みが検出されたが、肩部から明瞭に段を持つようなものではなく、ゆるやかな傾斜面を持つ窪みのようなものである。埋土も均一な灰茶色粘質土で上部の凹地の埋土と同一であり、底部も漸移的に地山に移行する。このようなことからこれらの落込みは自然に形成されたものと思われる。またこの底面できつつかのピットが検出されているが、埋土も落込み群と同様であり、深さも大半が数cm程度の浅いもので、これも人為的なものではないようである。

遺物は前述したように凹部のE5-a地区の灰茶色粘質土中より風化の進んだナスカイトの切片1片と、弥生時代中期の甕及び高環各1個体が出土したのみである。

3-C期とするものは、沖積段丘面西半部の凹地に切られていない面に残された30個ほどのピット群であるが、径0.2m~0.8m、深さも0.2mまでの浅いものが大半である。埋土は茶黒色粘質土、あるいは灰茶色粘質土であり、若干の同色系統のブロック土を含んでいる。底部が不整形なために柱穴とは認めがたいものもあり、建物を構成するようなものではない。遺物もまったく出土しなかった。

第3遺構面の包含層である黒色粘質土は層厚が0.2mほどではほぼ水平に堆積しているが、傾向としては西側部分がやや高くして層厚も若干薄く、東側の凹部上ほど層厚が増すようである。層の下面でのレベルはT.P.20.1~20.3mであるが、下層の黄褐色シルトや灰茶色粘質土とは漸移的に変化しており、それほど明瞭には分層できない。遺物は5世紀後半の須恵器を始めとして土師

器、製壺土器等が出土しているが、総数は少ない。遺物からすれば、弥生時代中期の土器片を出土したSKN5、凹部等の遺構部分との関連は希薄で、上層の茶黒色粘質土との共通性の方が高い。

なおD5-1b3で検出された長さ2.1m、幅0.9m、深さ0.3mの土塊状の遺構は、埋土が地山とほとんど差がないものの砂質土のブロック状混入が若干あったために掘削したものであるが、出土遺物もなく人為的なものか判別できなかった。

以上のように第3遺構面として検出した遺構群は、性格の明確な遺構が皆無であり、また人為によるものかどうかとも判然としないものが多い。遺物もほとんど出土しなかったため、時期、性格付けにおいてもよく分からないものであった。

C 古墳時代中期の遺構（第2遺構面）

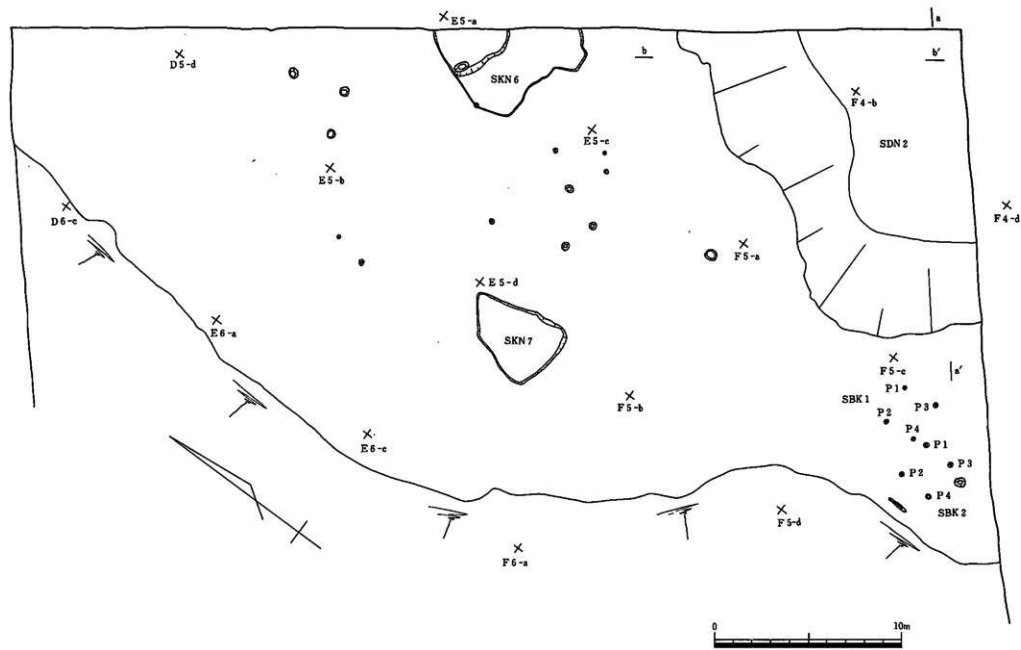
T.P.20.3～20.4m前後の黒色粘質土上面を遺構面とするもので、時期は出土遺物からすると5世紀後半に限定できそうである。遺構としては竪穴住居跡と考えられる1×1間の建物2棟、浅い落込みが2個と若干のピットが検出されている。包含層は厚さ0.2～0.4mほどの砂質のやや強い茶黒色粘質土であり、間に薄い青褐色シルト層を不連続に挟む。このシルト層は明瞭に観察される所と、ほとんど上下層との区別の出来ない所とがあり、1時期の洪水等によって部分的に堆積したものと思われる。このシルト堆積面は包含層掘削時には遺構面としては捉えられなかったが、断面観察によると微妙な差ながら上記の遺構もこの堆積の後に切り込まれているようであり、この時期の遺構の大半は本来、このシルト層の上面を遺構面として持つものと考えられる。遺物の点からしても、包含層中として取りあげた出土遺物が比較的集中した分布を示しており、その集中した地点が遺構の存在する場所とはほぼ一致していることからして、これら遺物も元来は遺構内にあったものと思われる。ただ黒色粘質土上面で検出した遺構の埋土掘削時にはほとんど遺物が出土しなかったことから、これらの遺物は遺構埋土上部に存在していたものであろう。

包含層出土として取りあげた遺物としては、須恵器を主として土師器、製壺土器、甕の羽口、鉄滓等があるが、須恵器は完形品を含むものの、それらは焼成時に熱による変形を受けたものであり、他は欠損品等であっていわゆる良品のないのが特色である。

なお石津川の前身と思われる埋没河川の左岸部が調査区東端部のE4、F4地区付近で検出されているが、この川の流れていた時期はこの遺構面に若干先行する時から6世紀までの間であり、須恵器を中心とする多量の遺物が出土している。包含層である茶黒色粘質土が5世紀後半に限定されるように急速に堆積が進展したのも、この川の流路がこの地域に移動してきたことが大きな要因としてあげられるであろう。

竪穴住居跡

竪穴住居跡と思われる建物跡が2棟検出されたのはF5-C地区であるが、この部分は段丘崖と埋没河川に東西より削られて幅8～10mほどの狭少な帯状の遺構面しか残っていない。東側の河川に関しては住居跡と同時期にはそこに存在していたことは間違いないが、西側の沖積段丘崖



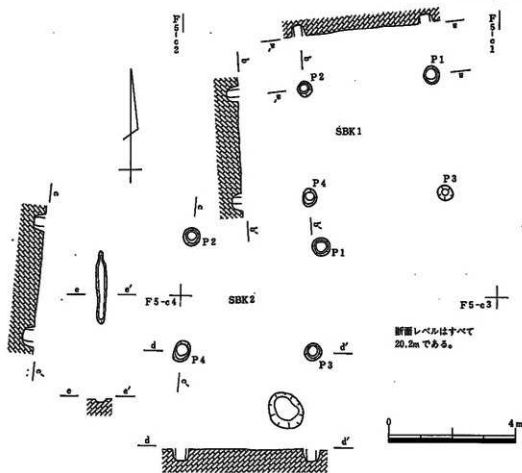
第17回 古墳時代中期遺構平面図(第2遺構面)

の形成は時代が下ると思われるので、住居跡は本来、旧石津川の左岸部に広がっていた集落の一部であったと考えられる。

この住居跡の検出は第2遺構面調査時にはなしえず、第3遺構面の遺構調査時に初めてその存在に気がついたもので、その時点では壁、及び床面は既に喪失していた。この失敗は地表面とのギャップが埋没河川や氾濫原では4mを越えていたのに対し、沖積段丘面では2mほどしかなく、沖積段丘面や氾濫原東半部への昇降口としてはこの隘橋状の部分を使用するしかないために、通路を固定はしていても長期的には一帯が踏み荒されてしまったことが原因である。

そのため検出された遺構としては、4個の柱穴で構成される1×1間の建物が2棟と、壁溝の痕跡と思われる小溝が1本、それに小土積が1基であるが、偶然10m斜で残っていたセクションに掛った部分を見ると竪穴住居跡様の落ちが観察されたので、これらの遺構は竪穴住居跡として間違いないものと思われる。この2棟の住居跡は、最も接近した柱穴間で0.8mしか離れていないために、同時に建っていたものではないが、前後関係は不明である。

住居跡内より出土した遺物は、包含層出土として取りあげているが、この周辺より須恵器、土



第18図 SBK 1・2 実測図

部器、製塩土器、櫛の羽口、鉄滓等が比較的多く出土している。

SBK1 F5-C1地区で4個の柱穴のみが検出されたもので、それぞれの柱穴間は北東側のピット1より北西側ピット2までが2.05m、ピット1より南東側ピット3までが1.85m、ピット2より南西側ピット4までが1.70m、ピット3よりピット4までが2.15mと南側がやや広く、西に若干拉げた台形状をしている。建物の向きは東側のピット1とピット3を結んだ線で計るとN-7.7°-W、西側のピット2とピット4間で計るとN-2.7°-Wであり、平均するとN-5.2°-Wになって、おおむね磁北に乗っている。

柱穴の大きさは0.2~0.3m、柱痕の大きさは0.15m前後、深さは0.15~0.2mほどである。埋土は茶黒色粘質土である。

全体のプランは不明であるが、F5-C東壁に残された部分で見ると東側辺3.8m、壁高0.25mほどのものである。

SBK2 F5-C1からF5-C3を中心としたF5-C地区で4個の柱穴と壁溝1本、小土壇1基が検出されたもので、それぞれの柱穴間は北東側のピット1より北西側のピット2までが2.04m、ピット1より南東側ピット3までが1.66m、ピット2より南西側ピット4までが1.80m、ピット3よりピット4までが2.06mである。東西の柱間が長く、南北が短いというSBK1と同様の特徴を持っている。建物の向きは東側のピット1とピット3を結んだ線で計るとN-4.1°-E、西側のピット2とピット4間で計るとN-5.1°-Eで平均するとN-4.6°-Eになり、SBK1と比較すると10°ほど東に振っている。

柱穴の大きさも同様で、径約0.3m、柱痕径0.15m前後、深さは0.15~0.3mほどであり、埋土も茶黒色粘質土である。

西壁溝の痕跡と思われるものがピット2とピット4を結ぶ線より約1.4mほど西で検出されたが、長さ1.1m、幅0.1m、深さ0.05mほどしか残っていなかった。壁溝とピットの距離が他も同じようなものと仮定すると、この住居跡の大きさは5mほどのものである。

ピット3より1.0mほど南西側で長径0.6m、短径0.5m、深さ0.15mほどの不整形円形の土壇が検出された。埋土は茶黒色粘質土で、中には細粒化した土器片、炭化物、焼土塊が混入していたが、底面・壁面とも火を受けたような痕跡はなかった。

なお、須恵器の大型瓿片がピット2の柱痕内より出土しているが、この破片は同住居跡内出土と思われるF5-C地区の茶黒色粘質土出土の破片と接合している。このことは、この土器片が柱の無くなった段階で柱穴内に落ち込んだものと考えられるので、F5-C地区出土の遺物も住居跡廃絶後に投棄されたものである可能性が高い。

落込み

E4からE5地区にかけて2個の落込みが検出された。いずれもゆるやかな壁面と平坦な底面を持つ幅広く浅い不整形なものである。先述したように遺構の上部を飛ばしてしまったために厳密なことには言えないが、埋土上部に大量の土器等を含んでいるため、不用品、欠損品等を捨てた

土器濶的な性格のものであろう。

SKN6 E4-bからE5-a地区にかけての調査区端で南西側の一部が検出されたもので、全体のプランは不明である。検出範囲は西辺6.0m、南辺6.5mほどであり、西辺はまだ調査区外に続くものの、南辺は東端部で曲がる傾向を見せているので、ほぼ全体が検出されたものと思われる。西辺は比較的直線状を呈しているが、南辺は凹凸が激しく、不整形である。遺構の深さは検出面からは0.1mほどであるが、本来は0.3mほどあったようである。肩部の傾斜はゆるやかであり、底面は北側に向って若干下降していくようである。

埋土は茶黒色粘質土で包含層とあまり変らないが、南東側隅では斜面部から底部にかけて多量の焼土や炭化物が検出されており、南東側よりそれらが投棄されているようである。

遺構掘削時の出土遺物としては土師器の細片若干と鉄滓1個が出土したのみである。

SKN7 E5-d1を中心としてE5-CよりE5-d地区で検出されたもので、長径5.4m、短径4.0mの不整形なプランを持ったものである。検出面からの深さは0.1mほどであるが、本来は0.2mほどはあったようである。肩部は極めてゆるやかな傾斜面を持っており、底面はほぼ平坦である。

埋土は茶黒色粘質土で包含層とほとんど差はないが、多量の炭化物の細片と、若干の焼土塊を含むことで区別される。

遺構掘削時の遺物としては、須臾器の甕、杯の破片や土師器の細片が若干と鉄滓、髷の羽口が各1個出土している。

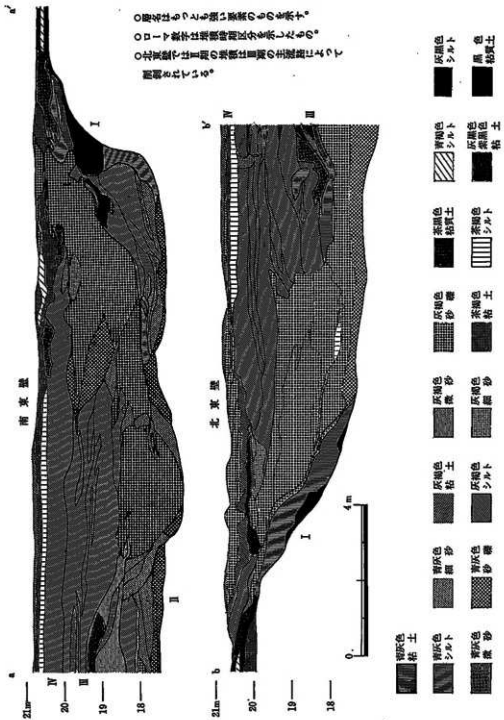
ビット

径0.2~0.5mほどのビットが13個検出されたが、分布は極めて散在的である。深さも0.2mを越えるものが少数あるものの、大半は数cm程度の浅いものであり、遺物を構成できるようなものはなかった。埋土はおおむね茶黒色粘質土であり、遺物の出土もなかった。ただD5-C4地区で検出された3個のビットのうち南西側のものは、径0.5m、深さ0.05mの円形のプランを持つビットであるが、炭化物の細片が多量に詰っていた。

埋没河川(SDN2)

旧石津川と思われる埋没河川がE4からF4地区にかけての調査区東端で検出されている。左岸部のみが検出されたもので、川幅等は不明であるが、調査区内だけで約13mあり、調査区端で対岸の立ち上りの微候も見られない所から、少なくとも20mを越える幅を持っていたと考えられる。この河川の深度は肩部のレベルがT.P.20.6~20.8mほどであり、河床部の最深部がT.P.16.8mである所から4mほどであるが、河川全体での最深部にあたるかどうかは定かではない。

この河川がこの地に遷移してきた時期については、第3遺構面の凹地に堆積した灰茶色粘質土がこの流路によって切られており、その上層の黒色粘質土が流路の斜面部に垂れ込んでいる所から、黒色粘質土の堆積当初か、あるいはその過程であると思われる。この黒色粘土の堆積時期については、先述したように不明確ながら一応弥生時代中期から5世紀後半にかけての間に堆積し



○層内はつとも強い系帯のものを示す。
 ○ロイ系帯は堆積時同じものを示したものを。
 ○北東壁ではI層の堆積はI層の主産地によって
 割割されている。

第19図 SDN 2土層断面図

たと考えられる。しかし、河川の埋設土の最下層からは5世紀後半の須恵器が出土するために、その間でもより遅い時期にずれ込む可能性が高い。

この河川の流れの方向に関しては、極少部分しか調査されていないために厳密には言えないが、およそ南→北へと思われる。

F4-1b2からF4-1b4にかけての大きな凹部は、この部分から南に基本層序の項で説明した沖積段丘下の砂礫層の詰った埋設河川があり、洪水時の強い流れがこの砂礫層をえぐったために、肩部の黄褐色シルト等が崩壊した跡である。このことは崩壊した時に割れたブロック土が裾部に積み重なっていたために判明したものであるが、この崩壊の時期に関しては、5世紀後半以前の遺物のみを含む堆積層の上に被っている所から、それ以降、6世紀末までの間である。

河川の埋設過程は大きく4期に分けられる。

I期 沖積段丘面の黒色粘質土、及び茶黒色粘質土から連なる肩部から斜面部にかけて堆積した黒色粘土や暗青黒色粘土等の暗色の強い堆積土で、肩部から垂れ込むように堆積しており、堆積の単位も細かい。この堆積土には、炭化物、焼土等も多量に入っており、遺物も落込みや竈穴住居跡内出土のものとも共通する5世紀後半の須恵器や土師器、製塩土器、鉄滓、轆の羽口等が出土している。こういった遺物は不用品として岸辺から河川へ投棄されたものと思われる。

II期 河床部に堆積した青灰色シルトや砂礫土を主としたもので、層厚そのものは薄いが、堆積後再侵食を受けた部分もあると思われる。I期とは同時並行的に堆積していった部分も多いと考えられ、出土遺物の点からも5世紀後半までの須恵器や土師器等を主とするなど共通点がある。

I期との境は暗色の強いものから、青色の強いものへ漸移的に変化している。

III期 この河川の大部分を占める堆積層で、灰褐色砂礫を主体として同色のシルトや微砂層で構成されている。主流路と目される荒い砂礫の混入しているレンズ状や半月状の堆積層が幾本かあって、堆積、侵食の繰返しがあったようであるが、出土遺物からすると各層とも6世紀末までの遺物が入っており、それほど時間を置かず埋設していったものと思われる。シルト層にはほとんど遺物は含まれないが、砂礫層中には大量の遺物が入っており、洪水時に上流より押し流されてきたものと思われる。多くは磨滅が著しいが、中には流下距離が少ないためかそれほど磨滅していないものもある。出土した遺物の種類としては5世紀後半から6世紀末にかけての須恵器が多数を占めるが、土師器、窯体等もかなり含まれる。また、数は少ないが初期須恵器、弥生式土器、縄文式土器の破片等も含まれている。

IV期 砂礫層によって河川内がほぼ埋設した上に灰褐色シルトを主として水平に堆積した層で、これによってこの河川は完全に埋設してしまう。しかし、この堆積の間にも小流路は流れていたようで、それらにはやや砂粒の細かな灰褐色砂礫や細砂、粘質土が堆積している。シルト層にはほとんど遺物が含まれないが、小流路中では6世紀末までの須恵器等が若干出土している。このことからこの河川の埋設と遷移の時期は、6世紀末と考えてよさそうである。

以上のように、この埋設河川の堆積は大別して4期に分けられるが、第2遷移面と平行する時

期はⅠ、Ⅱ期の堆積物であり、前述したように遺物の共通性も高いものである。Ⅲ期の堆積物に平行する遺構は検出されなかったが、これは茶黒色粘質土の上部が削平を受けている可能性もあり、遺構そのものの掘込みが浅いために残っていないことも考えられる。とにかく、SDN 2はこの期の大洪水によって流路の大半が埋没してしまい、河道を他に転じたものと思われる。

なお、この河道の河床面では木根が2個検出された。共に幹の部分は存在しないものの、地山の青緑色粘土中に張った根はほぼ残っており、極めて堅い樹種であって備前巴三郎氏の鑑定によるとカシということであった。この木の生えていた場所が河道の流水部にあっていれば木は生育しないため、古い時代の埋没林が洗い出されたのではないかとの指摘もあったが、河道の全容が不明のため判断は下せなかった。もし河道と同時代のものであれば、この部分は高水敷的な場所であって、主流路は東側のより深い部分を流れていたことになる。また最下層の青灰色砂礫中では多数の流木が出土している。

小 結

第Ⅱ遺構面は5世紀後半、須恵器の編年でいうと第Ⅰ型式の後半に相当する遺構群である。この遺構面はSDN 2と沖積段丘崖に囲まれた狭い範囲でしか検出されなかったが、この沖積段丘崖はSDN 2が6世紀末に河道を他に遷移した後に形成されたと考えられるため、本来はSDN 2の左岸部に広範囲に分布していたものと思われる。5世紀後半における東北丘陵は、須恵器生産が急速に拡大する時期にあたり、石津川沿いの平坦な沖積段丘面もそうした須恵器生産と密接な係わりを持っていたものと考えられる。太平寺遺跡においても、その位置が上神谷の入口近くであり、榊地区、あるいは高蔵寺地区、富蔵地区の各聚跡群への海岸部よりの進入路にあたるため、重要な役割を果たしていた可能性もあるが、今回の遺構検出範囲が狭小なため、詳細は不明である。ただ、遺跡の立地条件としてはあまりにも石津川に近いこと、包含層である茶黒色粘質土の急激な堆積を見ても洪水の影響を受けやすかったようである。そうした意味では、集落の本体が西側の中位段丘崖に近いより高位な場所にあったとも考えられる。

この遺構面の特色としては、鑄の羽口とともに多量の鉄滓が出土したことである。このことから太平寺遺跡において小鍛冶が行なわれていたことは確かであるが、それに関する遺構は検出されなかった。こうした鉄器生産が、それを大量に必要としたであろう窯作り用のものであるかは、今のところ検証のすべがない。

出土遺物の量としては須恵器が圧倒的であるが、これらはほとんどが破損したものか、完形品であっても焼けひずんだものであり、いわゆる良品といわれるものがない。これは良品が外部へ発送されていくためと思われるが、それがこの場で良、不良を選別し、不良品を投棄したものであるのか、あるいはそうした使用可能な不良品を日常食器として利用していたのかは分からない。この他土師器、製土器等も出土しているが、土師器では紀州系の甕が2個体出土している。

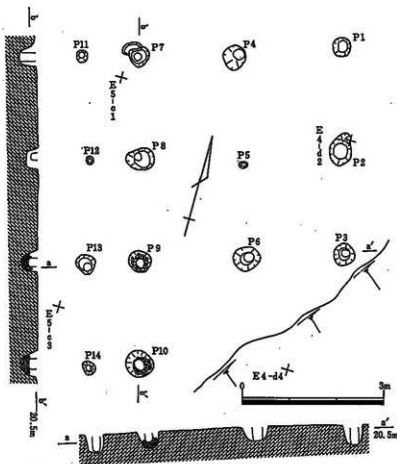
出土遺物は、それぞれの遺構によって微妙な傾向の差はあるものの、各遺構出土のもの、SDN 2の層部で出土したものとの間には共に製土器や鉄滓、鑄の羽口等を含むなどそれほど差

はない。そうした所からこれらの遺物は、不用品として堅穴住居跡や落込みなどの凹地や川へ投棄されたものと思われる。

SDN 2である旧石津川は、6世紀末、須恵器編年というⅡ型式の終り頃に埋没してしまうが、この流路を変えるほどの洪水の発生が、須恵器生産に伴う燃料用の薪の大量切出しによる森林破壊によってもたらされたとも考えられるが、これも断定はできない。とにかく、この流路を変えるほどの洪水は、この地域にも相当な被害をもたらしたことは想像に難くない。このことは「陶邑深田」で可能性を指摘しているような須恵器の搬出経路として石津川の舟運を利用していたとすれば、流路の整備も必要としたであろうし、また窯の崩壊等も生じたかも知れず、須恵器の生産活動にかなりの障害を与えたものと思われる。

D 平安時代以降の遺構 (第1遺構面)

T.P. 20.7m前後の茶黒色粘質土上面を遺構面とするもので、遺構としては掘立柱建物2棟と若干のピット、埋甕を伴う土壇3基、及び朱里に乗る坪境溝が1本検出されている。この上面が埋立前の現代水田の床土、耕土となるため、遺構の時期は平安時代から江戸時代、極端に言えば



第20図 SBP1実測図

現代のものまで含まれる。包含層は存在しないが、遺構内に入っている埋土が灰褐色砂質土であり、茶黒色粘質土のブロックをあまり含まない所から、本来は茶黒色粘質土の上に灰褐色砂質土が覆っていたものと思われる。また柱穴の掘方内の埋土も灰褐色砂質土であることからすると、灰褐色砂質土上面が第1遺構面で検出された遺構の切込み面であった可能性もあり、さらには、時期を異にする各遺構が別の遺構面のものであることも考えられる。出土遺物は包含層が存在しないため遺構内遺物しかなく、量は少ない。

掘立柱建物

E4からE5地区にかけて、平安時代後期から鎌倉時代初頭にかけての2棟の掘立柱建物が検出された。前述したように上部が削平されている可能性が強く、検出面が柱穴の切込み面ではないようである。建物を構成するもの以外にも幾つかのピットが検出されたが、散在的である。

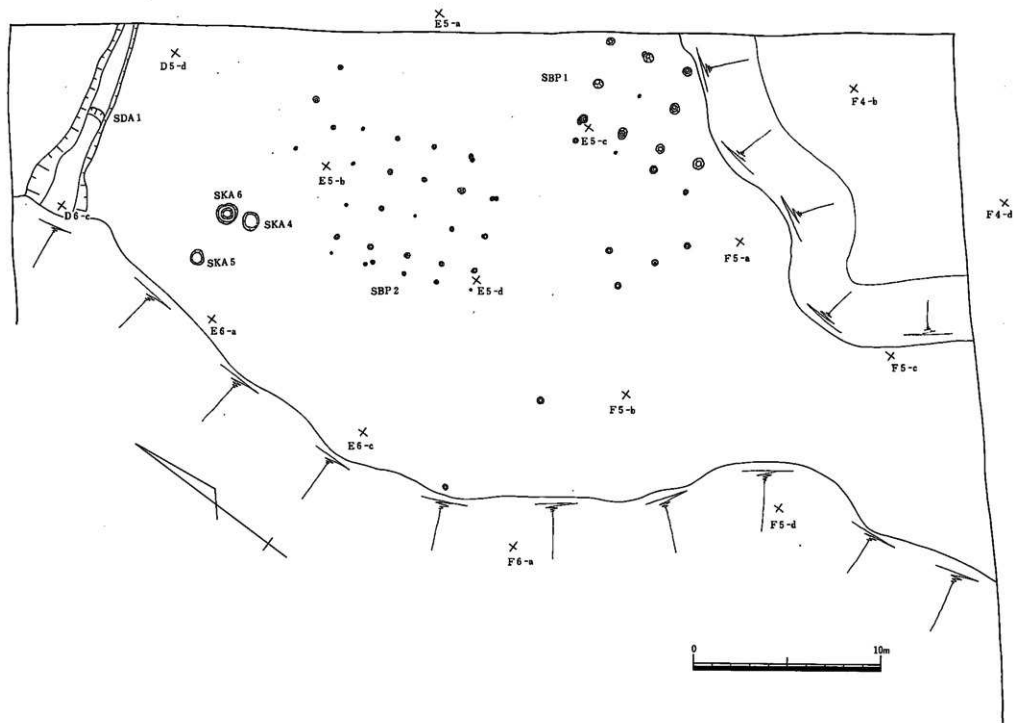
SBP1 E4-b, dからE5-a, cにまたがって検出されたものであるが、SDN2部分ではこれを先に掘削してしまったためにピットを飛ばしてしまっている。またトレンチ北東端にかかっているために、検出された範囲は2×3間であるが、建物そのものも東に延びる可能性がある。

検出された範囲での建物は、西面に庇を持つ総柱の建物で南北方向約6.6m、東西方向約5.5mの3×2間の規模を有している。どちらが桁行か不明であるが、方位としては3間分検出されたピット7、ピット10間で測るとN-16°-Wを示している。柱穴の大きさは0.4~0.5m前後、深さは0.3~0.4m前後であるが、ピット5のみは直径、深さも0.1mほどしかない。柱穴の埋土は灰褐色砂質土であるが、柱根の遺存はなく、柱痕も明瞭なものは少なかった。判明した柱痕径は0.2m前後のものである。柱間は2.2mのものが多いが、2.0~2.4mとばらつきがある。柱穴の中にはピット2、ピット7のようにピットに接して浅い掘込みを有するものがあるが、柱の抜き取り穴と言えるかどうか不明である。またピット9、ピット10ではピットの底に柱を受ける根石が敷かれていたが、この石は0.15mほどの深さに直径数cm大の隙をぎっしり詰めたものである。

西面の庇を構成する柱穴は建物の柱穴列の延長線上1.1~1.2mの所にあり、直径0.15~0.4m、深さ0.2~0.4mほどである。柱痕の大きさは判明したものからすると0.1~0.15mほどのものである。

柱穴中よりの遺物の出土量は少ないが、須恵器、土師器、瓦器、黒色土器の破片が出土している。建物の時期は、須恵器が下層の包含層よりの混入であるため除外として、黒色土器、瓦器等から判断すると平安時代後期のものと思われる。

SBP2 E5-a, b地区で検出されたもので、南北約7.6m、東西約6.8mの規模を有する4×3間の西面に庇を持つ総柱の建物である。柱間は不ぞろいであり、並びも乱れがあるが、周囲にピット数が少ないため、一つの建物を構成するものとして間違いないものと思われる。柱間は1.9mのものが多いが、1.8~2.2mまでの範囲でばらつきがある。柱穴の径も0.2~0.3mのものが多いが、それよりは小さいものもあり、柱痕が明瞭に検出されたものもなかった。柱穴内



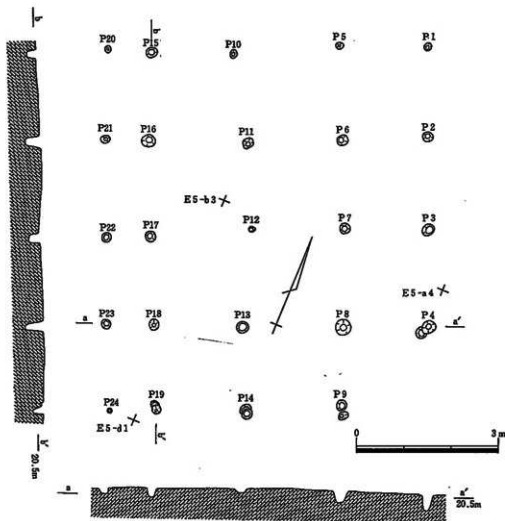
第21图 平安时代以降遺構平面図(第1次構図)

の埋土は灰褐色砂質土であり、深さも0.2~0.3mのものが多いが、本来はもう少し深いものと思われる。南東隅の柱穴は検出されなかったが、掘方が浅かったために削平時に消滅してしまったことも考えられる。南側と東側のピットは2個のピットが切り合った状態で検出されている。建物の方向は桁行方向のピット15からピット19で測ればN-27°-Wを指している。西側の庇は柱穴列の延長線上0.9~1.0mの所にあり、径は0.1~0.2m、深さ0.02~0.2mのものである。

遺物は少量しか出土していないが、ピット6より土師器の小皿が完形で出土している。これが建物の時期を決めうるものとなれば、平安時代末から鎌倉時代初頭にかけての建物ということになる。SBP1と比較すると時期が新しく、建物の規模も若干貧弱になっている。

円形土坑

D5-d3、4にかけて3基の円形土坑が検出されたが、そのうちの2基には炭焼の大甕が埋置されており、他の一つも甕の据えられていた痕跡が残されていた。掘方は耕土直下から検出さ



第22図 SBP 2 実測図

れたが、甕の器高からすると本来は耕土上に頭を出していたものと思われる。農業用の水甕、あるいは肥溜として利用されていたものであろう。時期は18世紀のものである。

SKA 4 直径1.0m、深さ0.4mほどのもので、中央に煨焼の大甕が埋置されていた。埋土は掘方、甕内も茶黒色粘質土ブロック混じりの灰褐色砂質土である。甕は上半部が内部に崩れ落ちており、それらを復元するとほぼ完形に復元できるものであった。復元すると甕は器高76.5cm、径62.6cmあり、これからすると10cmほどは耕土上に出ていることになる。

SKA 5 上部を機械掘削時に飛ばしてしまったために、直径0.7m、深さ0.2mほどしか検出できなかった。中央に煨焼の大甕が埋置されていたが、このために胴部を失っており、底部と甕内に落ち込んだ口縁部しか残っていなかった。埋土は掘方、甕内も茶黒色粘質土ブロック混じりの灰褐色砂質土である。

SKA 6 直径1.1m、深さ0.4mほどのもので、掘方は上部約0.1mの所で段がつき、その中央部に径約0.6mの円形の掘り込みがある。この部分に甕が埋置されていたものであろう。この甕は抜きとられたものと考えられるため、2段掘りの上部はその時の掘削跡の可能性もある。埋土は灰褐色砂質土を主体としたものである。

溝

SDA 1 D5-b 3、4で検出されたもので、幅1.5m前後、深さは調査区東北端で0.5m、そこから西の段丘崖に向かって深くなり、段丘崖付近では滝状に落ちて1.5mほどの深さになる。埋土は下層が灰黒色砂質土、上層が暗灰褐色砂礫であるが、深くなった部分には暗青黒色粘土が堆積している。溝の方向はN-74°-Eであり、上神谷下流部の条里方向と一致していて、周辺の残存坪名からすると31、32坪の坪境にあたる。溝中の遺物は、この溝が埋立前まで機能していたため、現代のものまで含まれるが、最下層からは染付碗等の江戸時代の遺物が出土している。このことから、溝の掘削時期は江戸時代であるが、従来からあった溝を再掘削した可能性も考えられるため、この沖積段丘面の条里地割の施行を江戸時代とただちに断定はできない。

小結

第1遺構面で検出された建物2棟は、平安時代後期のものと平安時代末から鎌倉時代初頭のものであるが、それぞれ建物1棟のみが検出されただけである。これは後世の削平の影響も考えられるが、元々遺構密度が少なかった可能性が高い。この時期、石津川は沖積段丘崖以西に移行していたと思われるため、これらの建物は石津川右岸部に広がる散在的な村落の一部と考えられる。上神谷の沖積段丘面の開発の時期については、条里制施行時期ともからんでなお検討の必要があるが、少なくとも平安時代後期にはこの面が可耕地として利用されていたことは確かであろう。

第1遺構面においては、これ以降の遺構は江戸時代までない。これはこの一帯が水田地帯となっていて、遺構があまり分布しない地域になっていた点もあるが、前述した削平が相当広範囲に行われた可能性が高く、その時点で遺構が消滅したことも考えられる。この削平の時期については、条里の坪境溝であるSDA 1が江戸時代に掘削、ないしは再掘削されていることから、これが水

田の大規模な作り替えに伴うものであれば、この時であろう。上神谷においても江戸時代に大規模な新田開発が行われており、例えば三木閉新田等が著名である。太平寺遺跡周辺でも、後述する氾濫原における江戸時代の水田開発等とも関連して、沖積段丘面も改変を受けたと考えられる。この時期については、それ以降に埋置されたSKA 4、5の炭焼の變からすると18世紀以前である。

3 氾濫原の遺構

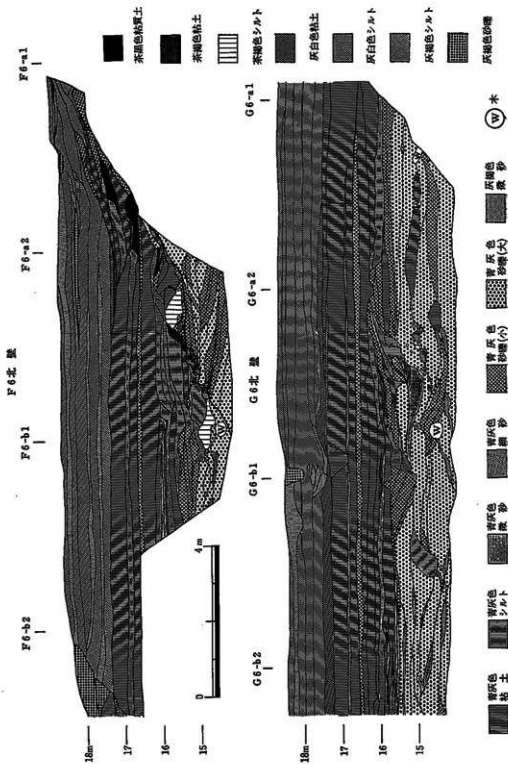
A 室町時代の遺構

洪水跡

青灰色砂礫を主体としたこの洪水堆積層は、段丘構成層である同色の砂礫層との境界が明瞭でないが、およそT.P. 13.7~15.7mほどの間に堆積している。この堆積層は氾濫原全域に見られるもので、少なくとも100m以上の幅を持っている。層そのものは乱雑な偽層状堆積をしており、幾度かの侵食、堆積の繰返しがあったものと思われるが、中でもT.P. 15m前後に堆積している砂礫層は、層中に10cm大の礫を多く含むと共に、流木や青灰色粘土、あるいは古墳時代包含層と同色の茶黒色粘質土のブロックも多量に含んでいる。流木は大きいものでは径60~80cmほどのものもあり、大小を問わず多くは根ごと流されている。これらの中には根に粘土をつけたままのものもあり、これらは流下距離がそれほど長くないと考えられる。層中からは須臾器を主として、縄文、弥生、土師器、瓦、瓦器、羽釜等の雑多な遺物が出土しており、もっとも新しい遺物は室町時代に下る。このことから室町時代に発生した大洪水によって上流の河岸部が大規模に崩壊し、多くのものが流水中に投げられたものと思われる。

なお、この氾濫原の形成がいつ頃始まったかについては、残念ながら明確な資料を得ることが出来なかった。このことは将来、石津川の流路の変遷が解明されれば明確になると思われるが、今回の調査によって確認された石津川の流路は、6世紀末までのものと、室町時代以降、現代までのものであり、その間の流路は検出されていない。しかし、その間の流路について現時点で推測を加えるとすれば、6世紀末以降沖積段丘西側の氾濫原に移った可能性が高い。これは室町時代の洪水堆積層が氾濫原を広く覆っているが、通常の流量では川幅はせいぜい10~20m前後のものであり、100mを越える氾濫原が中世頃に一気に形成されたとは考えにくいからである。やはり6世紀末の洪水によって流路が段丘西側に移行し、徐々に蛇行を強める働きによって氾濫原を拡大していったと考える方が自然と思われる。調査区部分はちょうど西へ蛇行する地点にあたり、西側の沖積段丘面を侵食しながら、その内側に蛇行州の一種であるPoint-Barを形成していったものであろう。そういった堆積層は、中世、特に流木等を大量に含む室町時代の大洪水によって侵食され、それ以降の新たな堆積層が氾濫原を広く覆ったものと考えられる。なお局部的に見れば、こうした洪水によって侵食されなかった古い堆積層が存在する可能性もあるが、複雑な堆積状況を示す砂礫層中からそれを見いだすのは困難であった。

流路の変遷を知る上では地表面に残された痕跡を探すのも重要な手掛りであるが、調査区東側



第23図 F6・G6北壁断面図

の沖積段丘上に良く残っている条里地割は乱された形跡はない。

流木の樹種についてはその主なものを7点嶋倉已三郎氏に鑑定を願ったが、結果はムクロジ3点、カキ、ヤブツバキ、トチノキ、マツ各1点であった。ムクロジが多いが、サンプルの選択に径の太いものを中心に選んだためであって、当時の植生の割合を反映したものではない。なおカキと鑑定された木は斧等での伐採痕のある切株である。

B 江戸時代の遺構

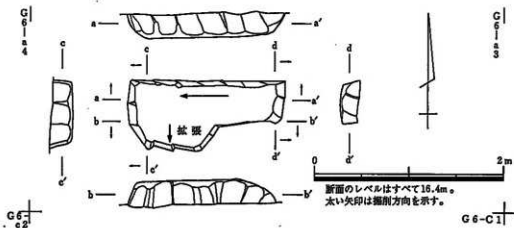
洪水跡

氾濫原が室町時代の洪水堆積層である青灰色砂礫によって一面に埋め尽された後、石津川は流路を第Ⅱ調査区西端のH8、I8、9地区に移動させる。この移動の後、流路は再び洪水堆積層である砂礫によって埋没してしまうが、この埋没の時期は既に江戸時代に入っている。この砂礫層は、先に堆積した青灰色砂礫層との境界が同質の砂礫層であることと、複雑な偽層状堆積のために不明瞭であり、色調が灰褐色を呈する部分が多いことと、層中に含まれる遺物に江戸時代のもので混じる程度の差異しかない。また、この堆積層の分布する地塊は調査区の幅が狭くなった場所であり、掘削深度が深いため安全対策上鋼矢板派いにアイランドという土壁を残せば、筋掘り程度にしか掘削する余地がなく、その堆積状況を明確にすることはできなかった。ただ、土層断面の観察によれば、H8地区においてT.P.15~16m前後に西に下降する砂礫層の堆積が顕著な地点があり、この付近が右岸部に相当するものと思われる。

遺物は縄文時代から江戸時代までの雑多な時期のものが含まれており、ほとんどの遺物がローリングによる表面の磨耗を受けている。江戸時代の遺物としては染付碗や備前焼提鉢等が出土している。

江戸時代粘土掘削跡

氾濫原において砂礫層の堆積が一段落した後、石津川は再び氾濫原中を大きく蛇行して流下するようになる。調査区付近は石津川が西に大きく蛇行する頂点部分にあたり、流路は第Ⅱ調査区



第24図 S K A 8 実測図

西端部のH9、I9地区を流れるようになって、東側の沖積段丘崖とは100mほど離れるようになる。流路がこの位置に移動して以降、右岸にあたる凸岸部で流路に添って蛇行州の発達が顕著になり、沖積段丘崖との間に半月形の後背湿地が形成される。この蛇行州と後背湿地の堆積物は、流路に近いほど、また下層ほど砂礫の粒度が大きいという典型的な堆積相を示しており、後背湿地においては一部に乱れはあるものの下層が微砂、シルト層、上層が青灰色粘土となっている。粘土層の厚さは0.3~0.5m、上面はT.P.16.6m前後ではほぼ平坦である。

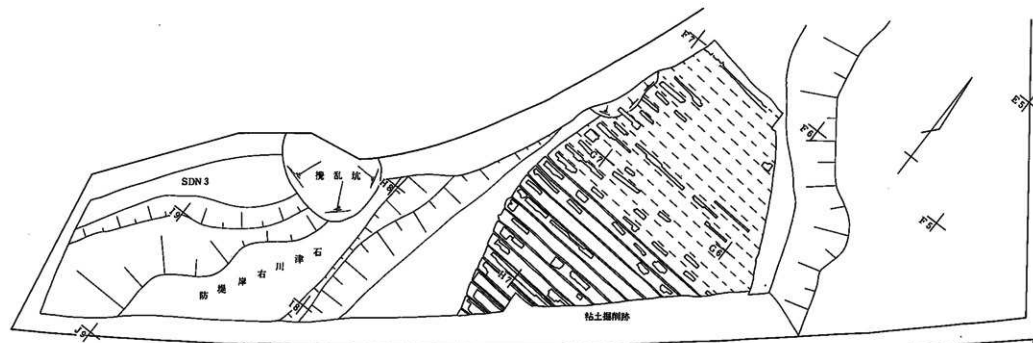
後背湿地において検出された粘土掘削跡は、この粘土層を掘削したものである。この掘削は極めて計画的になされており、その掘削順序等も判明できる残存状態の良好なものであった。掘削された範囲は、北側がE6とF6地区の境界付近の流路と段丘崖が接近した部分、東側が段丘崖裾部、西側が蛇行州の裾部、南側が調査区外へ続いている。北、東は直線的であるが、西側は南に寄るほど砂の裏出しが強くなるため、それに影響されて裾部から離れる傾向があり、ゆるやかな弧状を呈している。

粘土の掘削は、まず約1.8mの間隔で幅0.1~0.2mの直線の畦を削り残しながら、全面的に深さ0.1~0.15mほど行なわれる。畦畔の方向はN-94°-Eで、ほぼ東西を指している。畦は北端部で1条、南側で14条検出された。しかし、畦の検出されなかった所もほぼ1.5~1.7mほどの間隔で直線状に続く14条の跡が検出されており、これは畦を取外した跡と見て間違いないので、畦は調査区内で合計29条あったことになる。

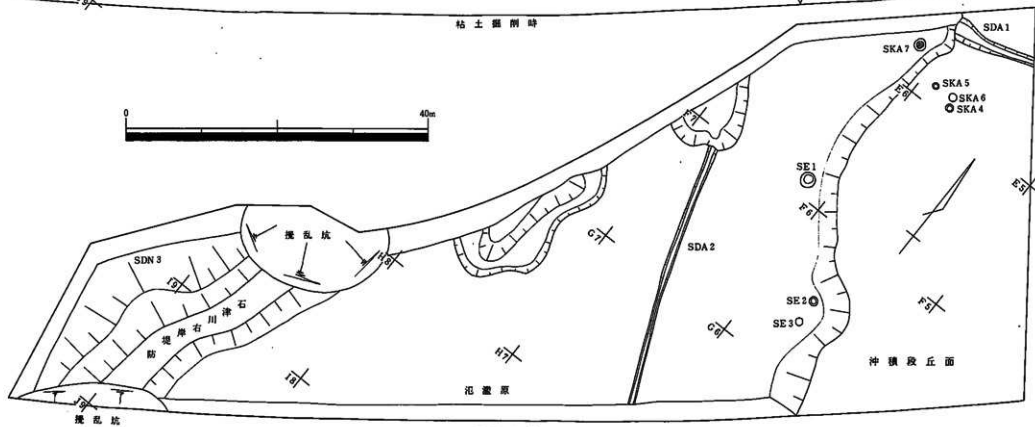
この掘削の後、さらに畦に区画された中をさまざまな形をした土坑が掘削されている。この土坑には反りのない刃幅約20cmの踏錘で掘削された痕跡が良く残っており、掘削順も判別できるものが多い。掘削は、まず平坦な粘土面に錘を踏入れた後、体を反転し、錘で左右に切込みを入れてから錘を斜め前方へ踏込み、三角柱状の粘土塊を掘りおこす。この時には錘が深く入らないため底は浅い。この後は、順次左右に切込みを入れ、後退しながら四角な板状の塊として粘土を掘削していくもので、深さは約0.2mではほぼ一定している。このような掘削方法から、土坑には必ず東、西辺のどちらかにやや傾斜した面を持つ浅い部分があり、それに対応して側面には切込みを入れた時のギザギザの段状になった跡が前者とは反対の傾斜を持って残されている。土坑の掘削方向は東、西どちらもあるが、中には途中で掘削方向の変るものもある。幅は約0.2~1.2mまでのものがあるが、多くは20cmほどの幅を反映してその倍数になっており、東、西辺には1~6回踏錘を踏み込んだ跡が残されている。形の違いは掘削者の個性を反映したものであろう。

掘削された粘土は、もっこに入れられて運ばれていったものであろうが、所々にもっこより落ちたと思われる粘土塊があり、中には掘削した形そのままの4角の板状の粘土塊もあった。

なお、この粘土を運んだ方向については、土坑の分布を見ると北側の4区画を除けば西端部に必ず存在すること、また南側の4区画の土坑が非常に大きいことからして、石津川の右岸に沿って南側に運んだものと思われる。沖積段丘上に運び上げるのであれば、段丘崖裾部を通る方が近いことから、沼澤原で使用されたものようであり、そうであれば石津川右岸の堤防、中でも蛇

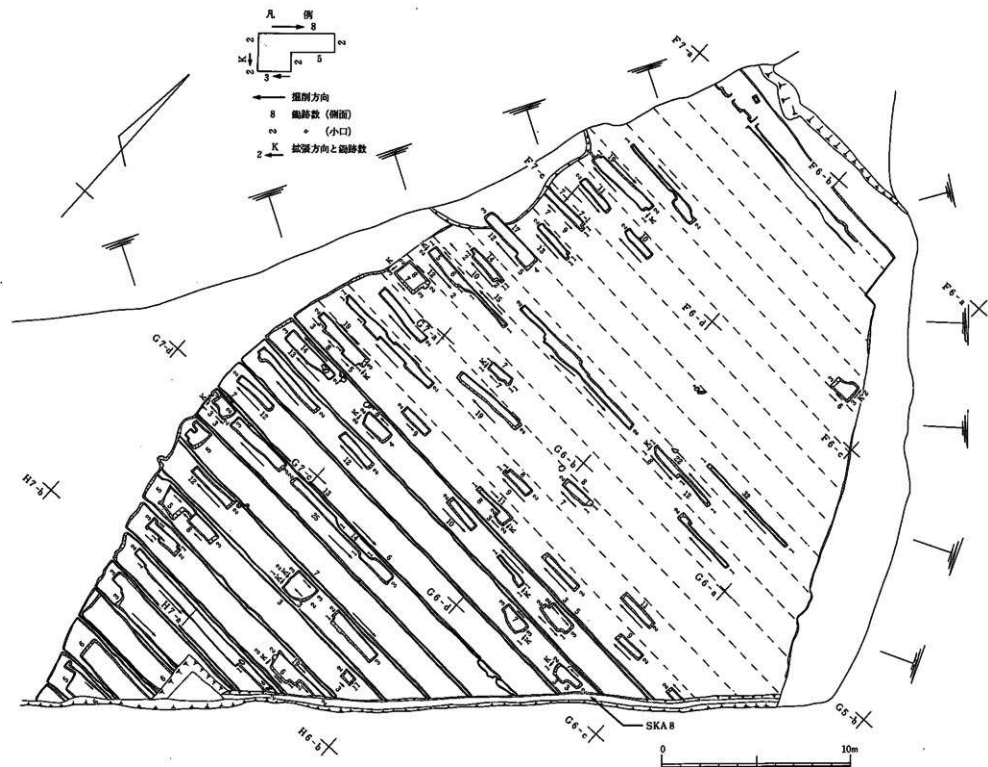


粘土器附跡



シルト層堆積後

第25図 江戸時代遺構平面図



第26圖 粘土掘跡実測圖

行流の攻撃側にあたる調査区南側の堤防築造が修復にあてられた可能性が高い。

この掘削跡は、その掘削度が風化する間もない早い時期に青灰色砂礫によって一気に埋没してしまいが、この砂礫が土坑内に落込んだ中より磁器の袋物の小破片が1片出土している。この遺物が粘土の掘削時期を決めるとすれば、17世紀後半より18世紀前半にかけてのものである。

こうした粘土掘削跡の性格としては、跡地利用を計るという事であれば畦が大きな役割を果たすと思われるが、畦が14条分も取り除かれているところからしてその可能性は薄く、やはり粘土の掘削方法にかかっていると考えられる。畦を残してまで掘削範囲を区画するという事は、人夫それぞれの掘削分があらかじめ区分されていたためと思われ、その分は畦で囲まれた一区画を単位としていたものであろう。この一区画に配分された人夫は複数のものである。それは畦間を一番分掘削した後、さらに不足する粘土を得るために、もう一番分掘削した跡が土坑として残っているが、掘削能率からすれば一つの土坑を連続して掘削した方が早い。それにもかかわらず、一つの区画の中に複数の土坑が存在するという事は、同時にそれだけの人夫が掘削していたことを表わしているのではないか。もしそうであれば、例えば北より16番目の区画では6個の土坑が存在するが、西端部の土坑は2度の拡張を受けた大形のものであり、2人掘削の可能性もあるが、他の5つはほぼ同じ大きさで、掘削順序も整然としている。これらは恐らくそれぞれ1人で掘削したものであり、結局この区画では少なくとも6～7人が掘削にあたったと考えられる。

なお、北半部の畦が取り外された理由としては、追加の粘土を得るのに土坑を掘るよりは畦を取った方が簡単であったとも考えられるが、畦が残っている部分の畦間がほぼ1.8mと1間あるのに反し、こちらは1.5～1.7mしかないことから、畦間の狭さを隠蔽するためとも考えられる。またこのような掘削方法の違いは、幾つかの小グループを総括する人物の存在をうかがわせる。

シルト堆積層

粘土掘削跡は、厚さ0.2mほどの青灰色砂礫によって一気に埋没するが、それ以降T.P.18.2mほどまでは青灰色粘土や灰褐色シルト層が堆積する。この1.6mほどの堆積層は、所々薄い微砂層や小礫の混じった砂層を間層として挟むが、大部分が酸化の度合や粒子の大きさが若干異なる程度の均一な堆積層である。この堆積は、後背湿地中央を南北に流れる小流路を中心として進むが、腐食土層の発達が見られず、しかも小流路も明瞭な両岸を持たないなど、滞水した環境で比較的短期間のうちに堆積が進んだことをうかがわせる。堆積時期は、下層の粘土掘削跡が遺物の出土が少なく、密には特定できないが一応17世紀後半から18世紀前半に位置づけられ、また上層でまだ江戸時代に属すると思われる水田面が検出されているために江戸時代の範囲内には納まるであろう。

この時期、なぜ1.6mもの土の堆積が進んだかについては、堤防を破って後背湿地に流入した濁水が、段丘崖と堤防に囲まれた地形に遮られて滞水し、土砂の沈澱を急速に促進させたことが考えられる。このことは、洪水による堤防の欠損がもたらした偶発的な出来事とするのが一番自然な見方であるが、しかし下層の粘土掘削跡と関連づけて想像を逞しくすれば、以下のような事

も考えられる。菱木村は石津川の支流である和田川に面した村であるが、延宝7年(1679)の菱木村明細帳に和田川について「近年川床次第ニ高ク相成、水ハキ不申候、雨繁年者水損仕候」という記述がある。このような河床上昇は当然石津川についても同様であったと考えられる。これは河道の固定化への努力が払われた事もあろうが、流域の新田開発の盛行による土砂流出の影響も大きかったのではないと思われる。17世紀、18世紀は、この地域でも新田開発が盛んに行われるが、氾濫原はそのままではすぐに冠水するために、水田化できなかったのではないか。そのため、耕地化するには氾濫原を埋立てなければならないが、人為による埋立てでは多大な労力が必要であり、埋立土を得ることそのものが困難である。そこで、最も安価で手取り早い方法が石津川の濁水を導入して土砂を沈澱させるというものであるが、そのためには堤防を整備し、取水口、排水口を強固にする必要がある。堤防の整備という事であれば粘土が大量に必要であり、それを得るためになされた跡が、下層で検出された粘土掘削跡ではないかと考えられるのである。

そう考える根拠は次のようなものである。粘土掘削は、粘土面に足跡が残されていない事から粘土面が乾燥した状態でなされており、本来湿潤な後背湿地が乾燥している季節としては、冬が一番蓋然性が高い。そして掘削跡がほとんど風化していないという事は、風化の進行が遅い冬とはいえ、掘削後、それほど時を置かずして埋没したという事である。ところが冬期に、しかも修復したばかりの堤防が欠壊するほどの洪水があった可能性は少なく、掘削跡を埋没させる砂礫層は、石津川の水を最初に後背湿地に導入した時の奔流によってもたらされたとも考えられるからである。冬は洪水期であって水のコントロールがしやすいという事と、水田用水が必要でないために下流との利害対立が少ないという点もある。しかし、このことはそう断定するには根拠が希薄なことはいなげず、以後、周辺、特に調査区南側が調査される時の検討課題であろう。

江戸時代水田跡と牛の足跡

灰褐色シルト層の堆積が自然、あるいは人為かはさておき、T.P.18.2mまで上昇したこの堆積層の上面は、ほどなく水田化される。畦畔は検出されなかったものの多数の牛の足跡と、牛に引かせたと思われる犁跡が見つかっており、水田として間違いないであろう。牛の足跡、及び犁跡は現代まで継続使用された南北方向の水路に平行する向きのものが多く、田の区画に平行して行なわれた犁耕時につけられたものであろう。この水田面は、出土遺物からして江戸時代に属すると思われる。水田面は灰褐色微砂層によって埋没するが、埋立前の現代水田面はこの面より0.5~0.6mほど上になる。

井戸、及び肥溜

段丘崖裾部において井戸3基、肥溜1基が検出されている。

SE1 E6-C3、4地区で検出されたもので、長径2.0m、短径1.7m、深さ3.0mの掘方内に3段に甬を掘って井戸弁としている。甬は土圧で歪んでいるが、およそ口径1.15m、底径1.10mほどのもので、それを逆さにして重ねている。最上段は腐食と破損が著しい。井戸底のレベルはT.P.約15.4mである。埋立土は灰黑色粘質土や茶黑色粘質土、灰褐色シルト等のプロッ

ク土を主としたものである。

遺物は最下層からくらわんか茶碗やつるべの金具等が出土しているが、上部からはプラスチック等も出土しており、井戸そのものは近年まで口が開いていたようである。

SE2 F5-b 3地区の段丘崖斜面部で検出されたもので、上部の大半が削平されており、径1.1m、深さ0.2mほどしか残っていない。井戸枠として桶が使用されているが、これも腐食のため底部0.1mほどしか残っていない。しかも竹製の3本摺りのたがは全周しているものの、桶木そのものは4周ほどが残っていただけである。底面のレベルはT.P.約17.7mである。埋没土は茶褐色粘質土ブロック混りの灰褐色シルトである。

遺物は瓦器の細片が1個出土したのみである。

SE3 F5-d 1地区の段丘崖斜面部でSE2に近接して検出されたもので、径1.0m、深さ0.2mほどが残っていた。井戸枠が残っていないため厳密には井戸とは断定できないが、SE2の例から井戸の最底部と思われる。底面のレベルはT.P.約17.9mである。埋没土は灰褐色シルトであり、遺物は出土しなかった。

SE2、3については削平された後に灰褐色シルト層が堆積していること、またSE2で1片とは言え瓦器の細片が出土していることから、あるいは江戸時代よりも時期が古くなる可能性もある。

SKA7 D6-C 3地区で検出されたもので、径1.4~1.5m、深さ0.5mの掘方内に径0.9mの底のある桶を据えている。桶の上部は腐食しており、0.2mほどしか残っていなかった。底面のレベルはT.P.約17.9mである。埋没土は暗灰色粘土を主とした薄い水平堆積層が重なっている。桶に底のある所から肥溜と思われる。

遺物はくらわんか茶碗等が出土している。

溝、及び河川

SDA2 F6、G6地区で検出された江戸時代の水田造成時に用排水路として作られた南北方向の溝で、埋立前まで機能しており、この両側に水田が区画されていた。幅0.8~1.0m、深さ0.5mほどで、江戸時代の堆積層である暗灰黒色シルトは底部に薄く堆積していた。水路の方向は若干屈曲しているが、およそN-20°-Wである。

SDN3 流路が第Ⅱ調査区西端のH9、I9地区に遷移して蛇行州の形成が一段落した後の石津川で、その右岸部のみが検出された。流路内の堆積は、岸側が灰褐色シルトを主としたもの、流路側が青灰色砂礫を主としたもので、前者が江戸時代、後者が明治以降の堆積になる。

小結

石津川の氾濫原を今回のように大規模に調査したのはおそらく初めてと思われるが、その中で明らかになったのは中、近世の堆積層が極めて厚いことである。厚い所では5mにも及ぶこの堆積は、中世以降においてもこの地域の景観が大きく変化したことを示している。こうした堆積状況が石津川流域に普遍的に見られるかどうかがこれからの解明すべき課題である。特に上半部を

占める粘土、シルト層の堆積が近世に属するという事で、氾濫原の水田開発がこの時期以降に限定されるのか、あるいはそれに先立つ開発があったのが問題となろう。

出土遺物は河川堆積の帯として二次堆積したものが大半を占めているが、中でも5～6世紀を主とした須恵器が圧倒的に多い。どの層中にも高い割合で須恵器が包含されているという点で、陶邑という大窯業地の地域的特色をよく表している。

第5節 第Ⅱ調査区の遺物

1 はじめに

太平寺遺跡第Ⅱ調査区出土の遺物はコンテナに約100杯あり、その過半は沖積段丘面の古墳時代包含層および埋没河川内より検出されたものである。出土遺物の内訳を次に列举し、各時代別にその説明をしたい。なお、須恵器、土師器については分類を行い、遺構、層位別出土遺物はその分類に従って記述した。

土器 縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、製塩土器、黒色土器、瓦器、陶器、磁器

石器 石鏃、石槍、不定形石器、不定形刃器、剝片、砥石

木器 人形

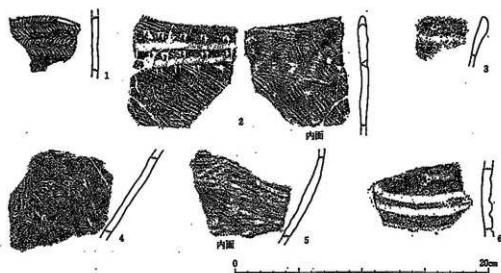
金属器 鉄釘

その他 糖羽口、鉄滓

2 各時代の遺物

A 縄文時代

土器 (第27図；図版245上段)



第27図 縄文式土器拓影図

破片が9点あるが、いずれも遺構に伴うものではなく、沖積段丘面では古墳時代の包含層より1点、古墳時代埋設河川(SDN2)Ⅱ期堆積層より3点、氾濫原では室町時代洪水堆積層より5点出土している。以下、時期別に述べる。

1) 早期末～前期初頭 深鉢口縁部片1点(第27図2)が室町時代洪水堆積層より出土した。波状口縁で、調整は内・外面ともに巻貝による条痕により施され、その方向は外面が右下一左上、内面の体部が右下一左上、口縁部が横に近い右下一左上である。外面口縁部直下には2条の凹線を横方向に巡らせ、凹線をはさむ位置に半截した竹管による刺突文が3列施されている。器壁はやや薄い。胎土はやや粗く径4mm以内の長石、石英、角閃石、金雲母を多く含む。色調は暗茶褐色を呈する。遺存状態は良好で割れ口も新しく、外面には煤が付着している。口縁部の波状に突出した位置の下方面に当たる体部の凹線上には、補修孔かと思われる焼成後の穿孔がある(外径:外面1.1×0.9cm、内面0.7×0.6cm、内径:0.3×0.2cm)。

前期 深鉢体部の破片が1点(第27図1)あり、室町時代洪水堆積層出土である。これは外面に連続爪形文、内面にナデ調整を施した器壁の薄いもので、北白川下層Ⅱa式にあたる。胎土は精緻で径1mm以内の石英、長石、金雲母を多く含む、色調は暗茶褐色を呈する。遺存状態は割れ口が少し磨耗してはいるが良好で、外面に煤が付着している。

後期 浅鉢体部片1点(第27図6)、深鉢口縁部片1点(第27図3)、深鉢体部片2点(第27図4・5)がある。浅鉢体部片は、SDN2Ⅱ期堆積層出土で、外面に幅6.5mmの凹線を円弧状に数条施し、中期の屋田式の可能性も考えられるものである²⁾。胎土は粗く径5mm以内の石英、長石、くさり礫、チャート粒を多く含む。色調は灰白色である。器表面、割れ口は磨耗している。深鉢口縁部片はSDN2Ⅱ期堆積層より出土し、口縁端部に幅約1.5cmの凸帯を巡らした円帯文土器で、北白川上層Ⅱ式にあたる。器壁は薄い。胎土は粗く径4mm以内の長石、石英、くさり礫を多く含む、金雲母も少しみられる。色調は灰茶色を呈する。器表面、割れ口は磨耗している。深鉢体部片(第27図4)は古墳時代包含層(茶黒色粘質土層)出土で、外面に斜方向の沈線文を1条有する。調整は外面にはナデによるものかハケ状の痕跡が、内面には右下→左上方向の砂粒の動きが認められる。胎土はやや精緻で径2.5mm以内の長石、石英、金雲母を多く含む。色調は茶灰色を呈する。遺存状態は比較的良好である。深鉢体部片(第27図5)は室町時代洪水堆積層出土で、外面にはナデの擦ついたものか極一部に線条痕を留め、内面には二枚貝による線条痕が下部では縦方向、上部では右下一左上方向にみられる。胎土は粗く径5mm以内の長石、石英、角閃石、金雲母を多く含む。色調は暗茶褐色を呈する。

後期～晩期 深鉢体部片2点、浅鉢体部片1点がある。深鉢体部片は2点ともに室町時代洪水堆積層より出土し、器表面、割れ口ともに磨耗が著しく、調整は不明である。胎土は粗く径6mm以内の長石、石英、角閃石を多く含むものと、やや精緻で径2.5mm以内の長石、チャート粒を多く含むもので、色調は前者が茶褐色、後者が灰黄色を呈する。浅鉢の底部に近い体部片はSDN2Ⅱ期堆積層出土で、遺存状態は悪く、内外面の調整は不明である。胎土は粗く径5mm以内のテ

ャート、長石粒を多く含む。色調は暗褐色を呈する。

以上、縄文式土器を各時期別に観察したが、早期末から前期にかけてと後期の土器片が比較的遺存状態の良好な事から、これらの時期の遺構が太平寺遺跡のごく近くにあった可能性が高い。

石器 (第28図1)

凹基無蓋式石鏃が完形で1点、古墳時代の包含層である茶黑色粘質土層より出土しており、その表面は少し白っぽく風化している。成形および調整は両縁からの剝離により、正面は中央部にまで剝離がおよび稜をなすが、背面の右側は縁辺部だけに留まり、背面右半分に大剝離面が残る。長さ3.07cm、幅1.60cm、厚さ0.32cm、重さ1.31g、材質はナヌカイトである。

B 弥生時代

土器 (第36図1、第53図1、2)

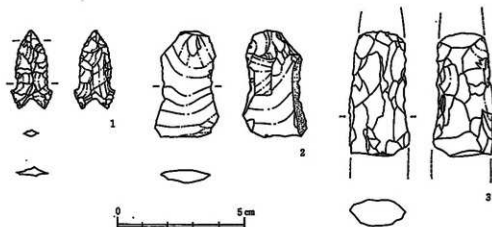
弥生時代に属する遺構には沖積段丘面のSKN5があり、それを覆う包含層として灰茶色粘質土層がある。SKN5からは弥生時代中期と思われる土器の細片が出土しているが、残存状態が悪く詳細は不明である。灰茶色粘質土層からは中期の変、高環の破片が各1点ずつ出土しており、他に細片が少量みられる。変(第36図1)は口縁、体部の残存状況が悪く、法量が出しにくかった為、図上復原したもので、法量は底径を除いた他のもの全てが推定値である。屈曲して短く外反する口縁の端部は上方に僅かに拡張している。胴部の張りは口径よりやや大きめで、重心の位置は器高のうち口縁より1/3の所にあると思われる。底部は平底である。器壁が全体に薄い。調整は体部外面を叩いたのち、上半をナデ、下半をヘラ削りしたものかと思われるが、残存状態が悪く、下半のヘラ削りは不明である。体部内面にはヘラ削りを施している。高環は風化していないが、脚柱部のみ残存し、坏部底を凹板充填法により作ったものである。変・高環ともに第Ⅲ～Ⅳ様式に属する。

その他に、弥生時代以降の堆積層より弥生式土器が少量だが出土している。沖積段丘面では古墳時代埋没河川(SDN2)Ⅲ期堆積層(1～8層)出土のもの(第53図1・2)、氾濫原では室町・江戸時代洪水跡、江戸時代シルト堆積層出土のものがあり、時期は弥生時代中期・後期のものがみられる。

石器 (第28図2・3; 図版272上段)

石槍1点、不定形刃器6点、不定形石器1点、剝片17点があるが、弥生時代包含層出土の剝片1点を除き、他は弥生時代以降の堆積層より検出されたものである。

石槍(第28図3)は氾濫原の蛇行州および後背湿地堆積層出土で、その表面は全体にローリングを受けて磨耗している。これは上下端部が欠損しており、割れ口は比較的新しい。形状は左側縁がほぼ直線的であるのに対し、右側縁は僅かに外彎し、下部で少し幅が広がる。成形、調整は両側縁からの剝離によるが、剝離面は整ってはず、稜線は直線的に通っていない。縁辺部の細かな調整剝離は殆ど施されていない。正面中央には大剝離面を縦長に小さく留める。残存長さ4.95cm、残存幅2.3cm、厚さ1.16cm、重さ17g、材質はナヌカイトである。



第28図 石 器

不定形刃器はSDN 2堆積層より2点、室町時代洪水堆積層より4点出土しており、いずれもローリングを受けて表面の磨耗が著しい。風化の状態は縄文時代の石鏃ほどではなく、弥生時代のものと思われるものである。材質はサヌカイトを用い、成形・調整は剥片の1辺ないし2辺に施している。6（図版272上段）は氾濫原、室町時代洪水堆積層出土のもので、上端部に自然面を留め、刃部は縁辺部にのみ片面側へ剝離調整している。長さ4.08cm、幅5.33cm、厚さ1.24cm、重さ21.9gである。

不定形石器（図版272上段—1）は古墳時代包含層の黒色粘質土層より1点出土し、風化の度合からみて弥生時代のものと思われる。両面に大剝離面を残し、右側縁は両面側へ、左側縁は背面へ剝離調整を施している。上端部は古い折れ面をなす。剥片の大きさからみて、石鏃、石錐の未成品を作る段階で失敗したものか、不定形刃器の折れたものか不明である。長さ2.74cm、幅3.55cm、厚さ0.81cm、重さ7.5gである。

剥片は弥生時代包含層の灰茶色粘質土層より1点、古墳時代の包含層より1点、SDN 2堆積層より5点、室町時代洪水堆積層より10点出土しており、全体に風化および磨耗がめだつ。材質は全てサヌカイトである。灰茶色粘質土層出土の剥片（第28図2）は上端、左側縁に自然面を残す縦長の剥片で、風化の度合が縄文時代の石鏃と同程度から縄文時代の剥片の可能性が有る。長さ4.25cm、幅2.51cm、厚さ0.54cm、重さ6.1gである。室町時代洪水堆積層出土の剥片（図版272上段—2）は、石槍か何かの成形時にできた剥片と思われるもので、背面に調整剝離面、正面に主要剝離面を残す。長さ2.88cm、幅3.16cm、厚さ0.35cm、重さ2.5gである。

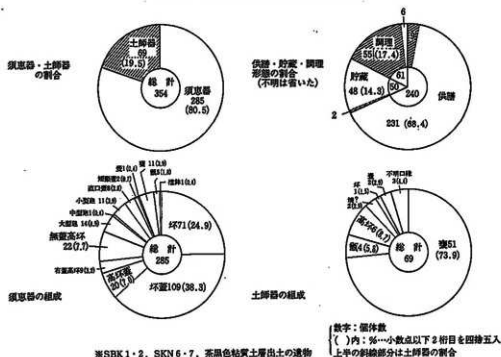
C 古墳時代（第36～53図；図版245下段～265、271、272下段）

太平寺遺跡出土の遺物の大半がこの時代に属する。この時代の遺構としては、沖積段丘面の堅穴住居2棟（SBK1・2）、落ち込み（SKN6・7）、埋没河川（SDN2）がある。包含層には沖積段丘面の茶黒色粘質土層およびその下層の黒色粘質土層があり、茶黒色粘質土層は堅穴住居2棟（SBK1・2）と落ち込み（SKN6・7）の上面を覆う。氾濫原では室町・江戸

時代洪水跡からも古墳時代の遺物は若干出土している（第55図9）が、ここでは沖積段丘面出土の遺物に限定して述べる事にする。

出土遺物には須恵器、土師器、製壺土器、鴨羽口、鉄滓、磁石がある。遺物の遺構別、層別別出土点数は第31～33図、第10～13表の通りで、遺構およびその周辺に集中して出土する。遺構は明瞭な掘り方を持たない為、遺構の所在する地点から出土した茶黒色粘質土層出土遺物をも含め、遺構別遺物の組成とその割合を出したものが第14表の円グラフである。土師器・須恵器の割合は、SBK 1・2、SKN 6・7、茶黒色粘質土層出土のものを総計して出すと、第3表の円グラフに見る通り、約2：8である。

第3表 古墳時代の遺物組成とその割合



※SBK 1・2、SKN 6・7、茶黒色粘質土層出土の遺物

数字：個体数
{ }内：%…小数点以下2桁目を四捨五入
上半の斜線部分は土師器の割合

土器の点数は一定の基準を設けて出したもので、破片数とは異なる。須恵器の壺は立ち上がり部～受部まで、環壺は口縁部～腹部まで、高環壺はつまみ部ないしつまみ部の痕跡を留めるものを数え、高環、壺、甕、甕、甕、土師器、製壺土器等は原則として口縁部の残存するものを点数に入れた。但し、土師器の高環脚部や須恵器の甕脚部の様に、明らかに器種の分るもので出土量の極少ない遺物についても点数の中に含めた。

土器

須恵器には壺、環壺、高環壺、有蓋高環、無蓋高環、把手付壺、鉢、溜鉢、甕、直口壺、短頸壺、壺壺、有蓋短頸壺、小形壺、広口壺、提瓶、甕、甕、器台の各器種がある。土師器には壺、高環、甕、甕、壺の各器種がみられる。以下、須恵器、土師器の主要な器種について分類を行っ

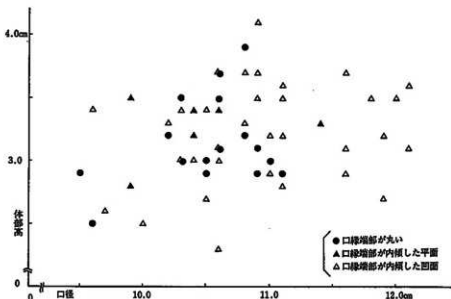
た。

須恵器

環 形態的な特徴によりA～I類に分類した。

- A 口縁部は内傾して低く立ち上がり、端部は丸く納める。全体形は土釜状を呈する。
 B 口縁部は内傾してやや高く立ち上がり、端部は丸く納める。底部は浅く、中央が平坦である。
 C 口縁部は高く立ち上がり、端部は内傾した凹面をなす。底部は浅く平に近い。
 D 口縁部は高く立ち上がり、端部は内傾した凹面ないし平坦面をなす。底部はやや深く丸い。
 E 口縁部はやや高く立ち上がり、端部は丸く納める。底部はやや深く丸い。

第4表 環及び高環の体部高、口径よりみた流量の分布状況



- F 口縁部は内傾しやや高く立ち上がり、端部は内傾した凹面をなす。底部は浅くて丸い。
 G 口縁部は内傾して低く立ち上がり、端部は丸く納める。底部はやや深く、中央部が平である。
 H 口縁部は内傾しG類よりも低く立ち上がり、端部は丸く納める。底部はやや浅く丸い。
 I 口縁部はH類よりも更に強く内傾して立ち上がり、端部は丸い。底部はやや深く平で、体部との境が角ばる。

以上、主に口縁部の立ち上がりと底部の特徴によりA～I類に分けたが、太平寺遺跡ではD、E類が大半を占め、茶黒色粘質土層出土の遺物の大部分がこれに該当する。陶色編年のI型式後半に属すると思われるB～E類はバラエティに富む事から、はじめ細分化を試みたが、環及び高環の環部で口径と体部高の表を作成する事により、次の様な傾向が明らかとなった。

第4表で見る通り、体部高が2.9cm未満では口縁端部を丸く納めたものは2点だけ認められるが、他は全て内傾した凹面ないし平坦面をなし、口径にはばらつきが認められる。これらは底部が浅く平に近い一群=B・C類である。

体部高の 2.9cm 以上のものには口縁端部の丸いもの、内傾した平面ないし凹面をなすものがあるが、端部を丸く納めたものには口径の小さい傾向 (10~11cm) が認められ、底部の深めで丸い一群 = E 類として捉えられる。端部が内傾した平面ないし凹面をなすものには口径のばらつきが認められ、口径、体部高の表では E 類と半ば重なって存在する一群 = D 類として捉えられる。

従来より環・坏蓋は I 型式末に小型化し、底も丸くなると言われているが、この事例をもって太平洋遺跡出土の環に当てはめてみると、体部高の高い (底が深く丸い)、口縁端部の丸い一群 (口径が小さめでまとまっている) = E 類は、包含層出土の遺物の中で最も新しい傾向を有する類であるといえそうである。B~E 類の前後関係でみるならば、底部の平なもの = B・C 類から底部の丸い D・E 類へと移行するが、このうち D 類は口径のばらつき具合が C 類と大差なく、E 類は口径にまとまりのみられる事から、C→D→E 類へと変化するといえる。

坏蓋 形態的な特徴により A~I 類に分類した。

- A 天井部が低く平である。口縁部は高く、端部で内傾した凹面をなす。稜部は小さく突出する。
- B 天井部は低めで平に近い。口縁部は高く、端部で内傾した凹面ないし平坦面をなす。稜部は大きく突出する。
- C 天井部は高く平に近い。口縁部は高く、端部で内傾した凹面をなす。稜部は大きく突出するが、稜部直下を凹ませて稜を突出させたものもある。
- D 天井部は高く丸い。口縁部は高めで、端部は内傾した凹面ないし平坦面をなす。稜部は明確に突出するが、A~C 類の様な鋭さに欠け丸みを帯びる。
- E 天井部はやや低く丸い。口縁部は高く、端部で内傾した平面ないし凹面をなす。稜部は角ばる。
- F 天井部はやや低めで丸い。口縁部はやや高く、端部で内傾した凹面ないし平面をなす。稜部は鈍く突出する。
- G 天井部はやや低めで丸い。口縁部は低めで、端部が内傾した凹面をなす。稜部は沈線状に凹み、殆ど突出していない。
- H 天井部は高く丸い。口縁部は外下方へ開き、端部で内傾した凹面をなす。稜部はない。
- I 天井部はやや高く丸い。稜部はなく、天井部からなだらかに彎曲して口縁部に至り、端部は丸く納める。

以上、天井部、稜、口縁部の特徴により A~I 類に分けたが、D 類が最も多い、茶黒色粘質土層出土の坏蓋には B~D 類があるが、これらは口縁端部が内傾した平面ないし凹面をなすものが殆どであり、口径と体部高でみると、体部高 2.1cm 以下のものは視覚的にも天井部が平に映り、2.2cm 以上のものについては、やや丸みを帯びたものが丸いものとして捉えられるようである。この数値はあくまでも補助的なものであり、環の様に口縁端部の丸いものが体部高 2.9cm 以上に備在する訳ではない。これにより、口径と体部高からは環と同じように 1 つの群をなすものを見つけ数値で示す事は困難であるが、環とセット関係をなす事を前提とするならば、体部高の低い

一群=B類は環C類に、体部高の高い一群=C・D類は環D・E類に該当すると思われる。环蓋C・D類は体部高の高い点で共通するが、天井部の平に近いものをC類、丸いものをD類として区別でき、环蓋C類は環D類と、环蓋D類は環E類とセットをなすであろうと想定される。

高环蓋 基本的には环蓋と同じだが、つまみ部分の形態上の特徴も含めてA～F類に分けた。

A 天井部は高く丸い。口縁部は外下方へ開き、端部は丸く納める。稜部は大きく突出する。つまみは径が小さくて高い。天井部外面は手持ちへつ削りである。

B 天井部は平に近い。口縁端部は内傾した凹面をなす。稜部はやや大きく突出する。つまみは径が小さめで、上端部は凹面をなし、更に中央が僅かに突出するものもみられる。环蓋B類に類似する。

C 天井部は平に近く、やや低めである。口縁端部は内傾した凹面をなす。稜部は明確に突出する。つまみは径が大きく、上端面は浅く凹み中央が僅かに出っ張る。

D 天井部は高く丸い。口縁端部は内傾した凹面ないし平面をなす。稜部は大きく突出する。つまみはC類と類似するが、上端面中央が大きく突出したものもある。环蓋D類と天井部の丸い部分で共通する。

E 天井部はやや高く丸い。口縁端部は丸く納める。稜部は明確に突出する。つまみは径が小さめで、上端部が平面ないし凹面をなす。天井部外面に列点文を施したものがある。环蓋D類と類似する。

F 天井部はやや丸く高めである。口縁端部は内傾した凹面をなす。稜部は小さく突出する。つまみは径が小さく、上端部が凹面をなす。

以上、A～F類はつまみ他の形態の特徴によって分けた。B類は天井部が平に近く体部高 2.1cm 以下の一群であり、C～F類は主に体部高が 2.2cm 以上で天井部が丸い一群にあたる。C類は天井部が丸い中でも平に近い部類に入り、つまみに共通性が認められる。D～F類は天井部が丸い。D・F類の区別は稜部の突出度により行った。C～F類を体部高 2.2cm 以上として一括したのは、3 (第39図) は体部高が低く、4 (第39図)、4 (第48図) では体部高が高いが、口径、器高、つまみの形態に共通性が見い出され、体部高に若干の違いは認められても1つの群でF類として捉えた方が良いと考えたからである。

高环 有蓋高环、無蓋高环がある。

有蓋高环 脚部の特徴で大別するとA、B類に分けられる。A類：台形状の透かしを穿ち、脚裾部を拡張したもの。太平寺遺跡では最も多く出土している。B類：透かしをもち、脚裾部を拡張していないもの。脚はA類に比べ短い。

A類を細分すると以下の様になる。(第39図)

- a 脚裾部を上、下に拡張し、裾部外面に稜を有するもの。坏部は環D類に類似する。(11～15)
- b 脚裾部は断面逆三角形を呈する。裾部外面上部に凹縁が1条走るものがある。坏部は環D類に類似する。(10・16)

c 脚部はaと同じだが、環部が環E類に類似する。(17)

B類を細分すると以下の様になる。(第48図)

a 基部は太く、脚部は短く外下方へやや内彎ぎみに下り、端部は平面をなす。円孔透かしもみられる。環部は環E類に類似する。(11)

b 基部が細めで、脚部は短く外反ぎみに下り、端部で凹面をなす。環部は環F類に類似する。(12・13)

以上、大別してA、B類としたが、Aa類が主体をなし、その破片と思われる脚部も多い。環部の変化に従うと、Aa・Ab類→Ac・Ba類→Bb類の前後関係になる。Aa類の中では、脚部の上端部が貼付凸帯状にみえて裾部断面が四角形状をなすものから、凸帯と脚部が一体化したものへ変化し、裾部断面も菱形形状をなす。Ab類の裾部断面が逆三角形状を呈するものは裾部断面が菱形形状の上端部を更に外方へ移動したか、または上端部のつまみ出しを省略したと思われる形態で、Aa類よりもAb類の脚が新しい要素をもつと考える。

無蓋高環 文様の有無、脚部の特徴で大別するとA、B類に分けられる。A類：環部に文様を施し、脚部に台形状の透かしを穿つ。脚部は有蓋高環A類と共通する。B類：環部が無文で脚部に透かしをもたないもの。

A類を細分すると以下の通りである。(第40図)

a 有蓋高環Aa類と脚が類似するが、寸法が少し大きめである。環部は平に近い底部から屈曲して体部ではほぼ直立口縁部で外反するといった具合に、底、体、口縁部が明確なものと、底部から体部または体部から口縁部にかけてなだらかにつづくものがある。把手は断面の丸いのがつづくものが1点みられる。(3・12)

b 脚部部の拡張度は小さく、裾部外面がほぼ平面をなす。環部は底部から体部ないし、体部から口縁部にかけてなだらかにつづく。把手は断面円形状だが輪をなさない。(7・13)

c 脚部部を下方へ拡張したもの。環部は底部から体部にかけてなだらかにつづき、口縁部で屈曲して立ち上がる。把手は断面が扁平な楕円形状のものがつく。(10)

B類を細分すると以下の通りである。(第48図)

a 脚部はやや外彎して外下方へ下り、端部で上方ないし下方へ僅かに拡張する。環部は環蓋を逆にした形状で、後部は小さく突出する。(22)

b 脚部はやや外彎して外下方へ下り、端部で更に開く。環部は環蓋を逆にした形状で、後部は極小さく突出する。(24)

以上、無蓋高環をA、B類で大別したが、太平寺遺跡では無蓋高環A類が大半を占める。A類の変化は有蓋高環脚部の変化とはほぼ同じである。環部の変化は口縁、体、底部の区別されたものから区別の不明瞭なものへ変化し、把手も輪状をなすものから退化したものへと推移する事から、a→b、cへと変化すると思われる。B類の変化は土師器的な様相を残す脚部片(第48図29)に脚部の高いものがみられ、新しい様相を示す脚部片(第48図30・31)に低いものがみられる事に

より、脚部の高いものから低いものへ変化したものかと考えられる。

高環脚部 高環の坏部と脚部の脚

第5表 高環脚部と坏部の組み合わせ

係は第5表の通りである。この表からは、脚に透かしがなく増部を僅かに拡張したものは無蓋高環B類だけである事が分る。その他のものについては、有、無蓋高環の区別はつけ難い。

そこで、短脚一段透かしについては、茶黒色粘質土層出土の坏部も共に遺存する高環の法量を計測し、その平均値をとると、無蓋高環の方が有蓋高環よりも脚部全体に大きめである事が分った。脚端部径では無蓋高環が10.0~13.0cm (平均値10.8cm)、有蓋高環が8.8~9.8cm (平均値9.1cm)、基部径では無蓋高環が

4.6~6.2cm (平均値5.5cm)、有蓋高環が4.3~5.3cm (平均値4.8cm)、脚裾部高では無蓋高環が1.0~1.6cm (平均値1.4cm)、有蓋高環が1.0~1.8cm (平均値1.4cm) となっている。脚裾部高は殆ど大差ないが、脚高と脚裾部径において無蓋高環の方が有蓋高環よりも大きめである。

この事から、短脚一段透かしの脚部破片においては、脚裾部径が約10cm未満のものを有蓋高環、約10cm以上のものを無蓋高環と推測した。但し、一律に脚裾部径10cmをもって判断できるものではないので、今回報告する脚部破片については、坏部の一部残存するものでは内底面に仄をかぶっているかどうか(重ね焼きの痕跡については後述)考慮に入れ一応の目安とした。

長脚二段透かしのものについては当遺跡で良好な遺存状態のものがなく、脚部の寸法で有蓋、無蓋高環の区別ができるものか不明である。

有蓋、無蓋高環の区別をし難い脚部破片は、脚裾部の拡張の有・無、透かしの有・無でA、B類に分けた。

A 脚裾部を拡張し、台形状ないし円孔透かしを穿ったもの。大きさや陶器窯出土の類例等から考えて円孔透かしのものは有蓋高環の脚かと思われる。

B 短脚で透かしを基本的にはもたず(但し、小円孔を穿ったものもある)、脚裾部は拡張していないもの。形態上、有蓋高環B類と無蓋高環B類の流れをくむものかと思われるものである。有蓋高環B類と思われるものは脚がほぼ直線的に外下方へ開き、下増部は平坦ないし内傾した凹面をなすのに対し、無蓋高環B類と思われるものは脚裾部寄りて水平に近く開き、増部は外傾し

有・無	透かし	脚端部	有蓋または無蓋高環の類
	形状		
有	台形(長方形)状 または三角形状	拡張する (幅0.9~1.8cm)	有蓋高環 A類 無蓋高環 A類
		拡張しない (幅1.0cm)	? 脚 A類 (有蓋?)
	円形状	拡張しない (幅0.6~0.8cm)	? 脚 B類 (有蓋?無蓋?)
無	(僅かに)拡張する (幅0.7~0.9cm)		無蓋高環 B類 ? 脚 B類 (無蓋?)
		拡張しない (幅0.5cm)	有蓋高環 B類 無蓋高環 B類 ? 脚 B類 (無蓋?)

(?は坏部が不明のもの)

た平面ないし凹面をなす。

直口壺 甕と類似するが、穿孔されていない事、頸部と口縁部の境に段をもたず、直立ぎみに口縁が立ち上がる点で甕とは異なる。大きさは中型甕と同じ位である。口縁端部は丸く納める。形態の特徴によりA～C類に分類した。

A 口縁部は斜め上方に僅かに内彎ぎみに開く。肩部は張り、胴部最大径の位置が頸部より体部高の1/4未満にある。文様は頸部に凸帯、波状文を交互に配し、胴部には2条の凹線の間波状文が施されている。

B 頸部はやや太く、口縁部は直線的に斜め上方に開き、端部寄り僅かに外反する。胴部の形態はA類と類似する。口頸部中央には凹線が1条、胴部にはカキ目が施されている。

C 口縁部は欠損し不明だが、頸部が太く、胴部は球体状をなす。胴部最大径の位置が頸部より体部高の1/4未満にある。文様は頸部に凸帯、波状文を交互に配し、胴部には沈線文、列点文が施されている。

以上、A～C類に分類したが、直口壺A類は甕B類と頸部から胴部にかけての形態上の特徴が共通し、直口壺C類は甕C類に共通した部分が認められる。

第6表 甕・直口壺の量と平均値

	口径 (cm)	基部径 (cm)	体部最大径 (cm)
大型甕	11.4～13.4 (平均12.3)	6.4～7.8 (平均7.2)	15.4～19.0 (平均16.8)
中型甕	10.3	6.3	14.0
小型甕	7.2～10.8 (平均9.4)	4.7～6.0 (平均5.6)	7.7～13.5 (平均10.4)
直口壺	10.5～10.6 (平均10.6)	5.8～7.4 (平均6.6)	13.5～14.4 (平均13.9)

甕 大型、中型、小型があるが、大きさに関係なく形態の特徴によりA～F類に分類した。

大型甕は口径11cm以上、小型甕は口径11cm未満である。これは茶黑色粘質土層出土の甕を計測し、その結果をもととした。中型甕は口径だけでは小型甕と区別がつかないが、胴部最大径が小型甕よりも大きい為、出土点数は少ないが区別した。第6表は茶黑色粘質土層出土の甕の量と平均値である。直口壺の量と平均値と比較する為に出した。

た。

A 頸部は細く上外方にのび、頸部と口縁部の境の内面に段を有する。口径は小さい。口縁端部は丸いが、部分により内傾した凹面をなす。肩部は張り、底部はやや尖がりぎみである。胴部最大径の位置が頸部より体部高の約1/4にある。孔部は胴部最大径の位置よりも上部に穿孔している。無文である。小型がみられる。

B 頸部は細く、頸部と口縁部の境の内面に段を有するが、A類程に顕著でない。口縁端部は丸いもの、内傾した凹面をなすものがあり、大型は後者が多い。口径は胴部最大径よりも小さい。肩部は張り、底部は丸いものと尖がりぎみのものがある。胴部最大径の位置は頸部より体部高の1/4未満にある。文様は口、頸部に波状文、体部に波状文または列点文を施している。大、小型がある。

C 頸部は太く、頸部と口縁部の境の内面の段は浅い。口径は体部径と同じか少し大きめである。

口縁端部は内傾し、平面ないし凹面をなす。肩部はB類よりもやや張りがなくなり、底部は丸みを帯びるが、胴部全体は扁球状に近い。孔部は胴部最大径の位置の真下にあたる。文様は口、頸部に波状文、胴部に波状文ないし列点文を施している。大、中、小型がある。

D 頸部と口縁部の境の内面の段はC類よりも更に浅くなり、頸部から口縁端部にかけてほぼ直線的に斜め上方に大きく開く。口径は体部径よりも大きい。口縁端部は内傾した凹面をなす。胴部は球体状をなし、孔部は胴部最大径の位置にある。文様は口、頸部に波状文、胴部に列点文を施す。小型がある。

E 口縁部は欠損し不明だが、頸部は太く直立ぎみに長く立ち上がる。胴部は球体状をなす。孔部は胴部最大径の位置よりも上部にある。文様な頸部に波状文を施している。小型がある。

F 小型特殊種。口縁部は欠損し不明だが、胴部は二重で、外側に長方形の透かしを有し、内側は上げ底状である。孔部は胴部最大径の位置よりやや下部に位置する。

特殊種は陶色ではTK85・232号窯、野々井第5地点のものが報告されているが、太平寺遺跡出土のものと瓜二つのものではない。

短頸壺 形態的な特徴によりA、B類に分類した。

A 口径が体部最大径よりも少し小さいもの。口縁端部が面をなすもの、丸く納めるものがある。底、胴部は丸い。カキ目を施したものがある。大、小形がある。

B A類と比較し、胴部最大径に対する口径が小さいもの。口縁端部は丸く納める。肩部は張り、胴部最大径の位置がA類よりも更に上部にある。底部は平である。大形がある。

以上、個体数の少ない短頸壺をA、B類に分けたが、形態的な特徴からみて、胴部が丸く重心が胴部のほぼ中央に位置するものから、肩部が張り、胴部最大径が上位に位置するものへ変化したものかと思われる。

壺 口縁端部の特徴によりA～O類に分類した。分類の基準には入れていないが、口径には30cm以上40cm未満、26cm以上30cm未満、22cm以上26cm未満、20cm以上22cm未満、15cm以上20cm未満、15cm未満の6種類がみられ、全体に口径は30cm未満のものが殆どである。

A 頸部は斜め上方に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部寄り外面には貼付凸帯を1条有する。口縁端部を丸く納めたものと角ばったものがある。

B A類の口縁端部を上方に拡張した感じのもの。

C A類の口縁端部を上下に拡張した感じのもの。口縁端部内面のナデには強いもの、弱いものがある。

D 口縁端部寄り外面に凸帯を持たないもの。口縁端部は上下に肥厚する。

E D類の口縁端部を上下に拡張したもの。8(第50図)の口縁端下部は貼付凸帯状をなす。

F 口縁端部を下方に拡張し、断面三角形形状を呈するもの。胴部は球体状をなすものが残存する。

G 口縁端部を上下方に拡張し、端部外面中央に稜をもつもの。

H G類に近いが、口縁端部外面が丸みをもつもの。

- I 口縁端部を丸く肥厚させたもの。口縁端部を折り曲げて丸くさせたものもある。
- J 口縁端部を下方へ折り曲げ、断面三角形を呈するもの。
- K 口縁端部は断面形が四角く、上端部が僅かに突出しているもの。
- L 口縁端部は断面が長方形をなすもの。
- M 口縁部は斜め上方に開いた後屈曲し、更に斜め上方に開く。屈曲部外面には凸線が1条走る。口縁端部は平坦で僅かに外傾する。
- N 口頸部はO類と類似し、端部が上下に拡張してやや丸みを帯びる。胴部径は口径よりもかなり大きくなる点でO類とは異なる。
- O 口径の割に頸部が太く、口頸部は短い。口縁端部は丸く肥厚させている。他の類とは異なり、胴部径が口径より少し大きい程度である。

以上、A～O類に分類したが、口縁部の破片が多く、全体形の分るものが数少ないために、口縁部の特徴に限って分けた。また、甕と広口壺の区別が明確につけられない為、広口壺の範疇に入りそうなものも、ここでは一括して取り扱った。

A～C類は口縁端部寄り外面に凸帯を1条有するものである。口縁端部が肥厚せず丸く納めたものから、端部が角ばり拡張度の大きいものへA→B→C類と変化したと思われる。D～L類は口縁端部寄り外面に凸帯をもたないものである。口縁端部を僅かに肥厚させたものから、断面長方形のものまで、D→E・F→G→H→I→J→K→L類へと変化すると思われる。E・F類としたのはE類の口縁端部の拡張度が弱く、F類は下方にのみ拡張している為、G類と比べ拡張度が弱い点で共通するからである。G類は口縁端部が上下に拡張し外面中央に稜を有するが、H類になると丸みを帯び、I類では完全に断面形が丸くなり、J類以後L類まで断面が長方形を呈する様に変化していく。

MはA～L類の形態と全く別の系譜に属するものであり、形態上の特徴も大きく異なる。

N、O類は口頸部の短い点でE類(第50図8)、F類(第50図10)とは共通する。肩部が大きく張り出す点では、O類だけ体部の張りが弱く異質である。

甕 口縁部の形態によりA、B類に分けた。

A 口縁端部は上下に拡張し、端部外面に稜をなす。甕G類の口縁端部と類似する。

B 口縁端部は上下に拡張し、端部外面は平面をなし、断面三角形を呈する。

器台 形態的な特徴によりA、B類に分類し、B類は更にa～cに細分した。

A 筒形器台。口縁端部は上外方に拡張し、端部外面は浅い凹面をなす。環部外面に凸帯2条と波状文1条を交互に配する。施文前のカキ目調整がみられる。脚部は欠損し不明である。

B 高環形器台。環部から脚部まで残存するものはないが、環部、胴部毎にa～cに細分した。

環部a 口縁部は短く外反し、端部で上外方へ拡張するがシャープなつくりで、端部外面は明確な凹面をなす。文様は波状文帯間に2条のややシャープな凸帯を配する。

環部b 口縁部は短く外反し、端部で上下に肥厚し外面が浅い凸面をなす。文様は2条1単位の

凸帯間に2帯の波状文を配する。基部直下に長方形の透かしが現存する。

坏部c 口縁部は体部の続きで僅かに内傾して立ち上がり、口縁部上端は内傾した浅い凹面をなす。無文である。

坏部a～c以外に、坏部aに先行すると思われる鋸齒文を施した破片がある。既刊の『陶邑』では陶邑古窯址群出土の鋸齒文を施した器台は見当らない。

脚部a 脚部は下外方へ僅かに外反して開き、底面は平坦で外傾する。透かしは長方形のものを縦1列に配する。文様は波状文4帯と凸帯2条を交互に配する。裾部はカキ目調整を施す。

脚部b 脚部は下外方へほぼ直線的に開き、底面は平坦である。裾部寄りに三角形の透かしが現存するが、配置等是不明である。文様は2条1単位の凸帯文間に2帯の波状文を配する。

脚部c 筒状に細い脚柱部から下外方へ外傾して開く脚柱部破片と、裾部寄り凸帯を境として直線的に下外方へ下る脚部破片があり、類似した形態をなすであろうと思われるものである。脚柱部破片には長方形の透かしを縦1列に4カ所配し、文様は波状文3帯と凸帯2条を交互に施している。

土師器

窰 土師器全体の約7～8割を占めるが、全体形の分るものが少ない為、口頸部の特徴により分類した。口径は必ずしも全体の大きさを示すものではないが、ここでは便宜上口径18cm以上を大形、10cm以上18cm未満を中形、10cm未満を小形として記述した。成形、調整は外面にハケ目、内面には口縁部から頸部にかけてハケ目を施した後、底部から頸部直下にまでヘラ削りを施したものが殆どである。

A 口縁部は外反し、頸部は‘く’の字状に屈曲する。胴部外面には叩き、内面には指押えがみられる。大形がある。弥生式土師器Ⅰ様式と一見類似する。

B 口縁部は外反し、頸部は‘く’の字状に屈曲するが、頸部内面は稜をなし鋭い。成形、調整は内外面にハケ目を施した後、内面は頸部の稜までヘラ削りを施す。大形がある。

C 口縁部は直線的に斜め上方に開き、頸部は‘く’の字状に屈曲する。胴部は長めである。成形、調整は内外面にハケ目、内面には更にヘラ削りを施す。大形がある。

D 口縁部は外反し、端部で内面側へごく僅かに肥厚する。頸部は‘く’の字状に屈曲する。成形、調整は内外面ともハケ目、内面には更にヘラ削りが施されている。大、中形がある。

E 口縁部はD類よりもやや直線的に外反し、端部でごく僅かに肥厚する。頸部は‘く’の字状に屈曲する。胴部は長めである。成形、調整は外面にハケ目、内面にヘラ削りを施す。大形がある。

F 口縁部はやや直線的に斜め上方に開き、端部でごく僅かに肥厚する。頸部の屈曲はD、E類よりもゆるやかである。胴部は長めである。成形、調整は外面にハケ目、内面にはナデ、ヘラ削り、ハケ目の後ヘラ削りを施したものがみられる。中、小形がある。

G 口縁部はやや直線的に斜め上方に開き、端部は薄くつくり出す。頸部の屈曲はゆるやかであ

る。胴部は長めである。成形、調整は外面にハケ目、内面にハケ目の後ヘラ削りを施す。中形がある。

H 口縁部は外反し、頸部はややゆるやかに「く」の字状に屈曲する。胴部は球体状を呈する。成形、調整は外面にハケ目、内面にハケ目の後ヘラ削りを施す。中、小形がある。

I 口縁部はやや直立ぎみに立ち上がり、頸部の屈曲はゆるやかである。胴部は球体状を呈する。成形、調整は外面ハケ目、内面ハケ目の後ヘラ削りを施したものと、外面ナデ、内面指押えおよびナデを施したものがある。中形がある。

J 口縁部は外反し、頸部は「く」の字状に屈曲する。胴部は球体状を呈すると思われる。成形、調整は外面にハケ目、内面にハケ目の後ヘラ削りを施す。中形がある。

K 口縁部は直線的に外反し、頸部は「く」の字状に屈曲する。胴部は偏球状を呈する。成形、調整は外面にナデ、内面にハケ目の後ヘラ削りを施す。中形がある。

L 口縁部はやや直立ぎみに立ち上がり、頸部の屈曲はゆるやかである。胴部は長めである。成形、調整は外面にハケ目、内面にヘラ削りを施す。中形がある。胎土中に結晶片岩の砂粒を含むものが2点あり、これは茶黒色粘質土層出土のものである。

M 口縁部は内彎ぎみに斜め上方に開き、端部で内面側へ断面三角形状にごく僅かに肥厚する。頸部は「く」の字状に屈曲する。成形、調整は口縁部内、外面にナデを施す。中形がある。

Ⅱ 胴部の特徴によりA～C類に分類した。成形、調整は外面ハケ目、内面ハケ目の後ヘラ削りを施しているものが多い。

A 平底の底部から口縁部にかけて内彎ぎみに開くもの。口縁端部は丸く納めたものと平坦面をなすものがある。残存する把手は乳棒状のものを挿入法により取り付けている。成形、調整は外面は不明、内面は胴部上半に横方向のハケ目を施している。

壺 小形壺、短頸壺、二重口縁状の壺がある。

小形壺 頸部は太く、胴部は球体状をなす。口縁部は欠損の為不明である。調整は外面に縦ないし斜め方向のハケ目、内面にナデを施している。

短頸壺 頸部は短く直立した後、口縁部で外上方に開く。胴部は丸みをもって張る。調整は内外面ともにナデを施し、内面には粘土紐の縋ぎ目を残す。

二重口縁状の壺 頸部は太くて短く、口縁部は一旦外反して開いた後屈曲し、更に外上方へ開く。胴部は欠損しており不明である。ナデ調整が施されている。小形である。

高坏 壳形品は無いが坏部の形態でA～C類に分類した。

A 口縁部は内彎ぎみに立ち上がり、端部は丸く納める。ナデ調整である。

B 坏部は内彎ぎみに浅く開き、口縁端部は丸く納める。内面に横方向のハケ目調整を施す。

C 坏部は平な底部から屈曲して外上方へ外反して開き、口縁端部は丸く納める。

坏 形態上の特徴によりA、B類に分類した。

A 口縁部は内彎ぎみに立ち上がり、端部で小さく外反する。成形、調整は口縁部に横ナデ、底

部外面にヘラ削りを施す。

B 口縁部は内彎ぎみに立ち上がり、端部は丸く納める。口縁部外面には横方向のヘラミガキ、内面には放射線状にのびる暗文を施す。

漢式系土器（第53図23） SDN 2Ⅱ期堆積層より土師質鉢の底部分が1点だけ出土している。いわゆる漢式系土器の平底鉢と思われるものである。胴部外面には回転によるヘラ削りが、内底面には指ナデ、胴部内面にはナデが施されている。底部外面には粘土板と粘土紐の接合痕を留める。製作技法としては、先ず粘土板を置き、その周囲を一周する様に粘土板の外側に粘土紐を巻き、その上へ粘土紐を巻き上げていったものであろう。

八尾南、久空寺遺跡出土の漢式系土器には、胴部外面に叩き目が残り、底部直上部分のみ叩き目の後ヘラ削りが施されている。これに対し、当遺跡出土の漢式系土器には叩き目の痕跡は認められないが、胴部を叩き成形した後ヘラ削りを施したものと認められ、他遺跡出土のものに比べヘラ削り範囲が広いのが特徴である。

製塩土器 沖積段丘面より合計78点出土した。そのうち、茶黒色粘質土層出土のものが全体の約7割を占める。茶黒色粘質土層（SKN7出土のものも含む）出土の地点別数量は第31図の通りであり、SKN7周辺に多い。形態的な特徴でA、B類に分類した。

A 底の丸いコップ状を呈する。胴部の特徴でa、bに細分できる。

a 筒状のもの（第53図5）。

b 底にやや広がりをもつもの（第44図20）。

B A類よりも器高が低く塊状をなす（第44図21；図版256—1上）。

太平寺遺跡では78点中1点だけB類が認められ、その他は全てA類と思われる。A類はa、bに細分したが、細片が多い為、a、bのどちらが主体をなすかは不明である。成形、調整技法には3種類ある。1：内外面ともナデ、2：外面叩き目、内面ナデ、3：外面ナデ、内面貝殻痕によるハケ目状の条痕。胎土には3種類ある。1：緻密で灰白色ないし灰黄色が主体のもの、2：結晶片岩の砂粒を含むもの、3：金雲母を含むもの、或いは灰褐色を呈するもの。

茶黒色粘質土層出土の製塩土器に限定して述べると、A類では成形、調整1と胎土1が殆どだが、成形、調整1に胎土2と3のものが各1点ずつと、成形、調整2に胎土2のものが4点ある。他に細片で点数から省いたが、成形、調整2に胎土3のもの（図版256—1下）もみられる。成形、調整技法と胎土の違いに関連性があると思われる。B類では成形、調整3に胎土1がみられ、肉眼観察ではA類の胎土1との区別はつかないが、色調が全体にB類の方が橙色っぽい。

沖積段丘面 古墳時代遺構内出土遺物

SBK1 ビットから極細片の土師器が2点、製塩土器が1点出土したが、細片の為四化できなかった。これらは茶黒色粘質土層出土の土器と類似する。

SBK2（第36図18・19；図版246—4・5） ビットから須恵器の大型甕胴部片が1点のみ出土し、これは茶黒色粘質土層出土の大型甕B類と接合した。

SBK1・2の浅い落ち込みからは須恵器の坏D類(19)が1点、坏蓋D類?1点、飯A類1点、摺鉢の口縁と思われる短く外反して端部を丸く納めるものが1点、甕の胴部片が1点出土した。土師器では甕が1点あるが、細片の爲分類できなかった。轆轤口は細片が多いが、個体数はおよそ2点であろう。鉄滓も細片が多く、計315.9gあるが、体積の割にやや重い。

SKN7(第37図;図版246-6・7;図版247) 須恵器、土師器、製塩土器、轆轤口、鉄滓が出土しており、他の遺構に比べ出土量が最も多い。以下、挿図番号を()内に記し説明する。

須恵器は坏6点でC類(4・5)3点、D類(6・7)があり、口縁端部は内傾した平面ないし浅い凹面をなす。坏蓋は13点でB類(2)2点、D類(1)6点、E類(3)1点、不明4点があり、D類が最も多い。口縁端部はD・E類の内2点が内傾した平面をなし、他は全て内傾した凹面をなす。高坏蓋は3点でD類(12)とつまみ部分の破片2点がある。無蓋高坏は3点(8・9)で、いずれも坏部のみ残存する。底体部の境は丸みを帯び、体部から口縁部にかけて直線的につづく。文様構成は凸帯と波状文を施したもの(9)が2点、凸帯間に波状文を施したもの(8)が1点ある。脚は3点で、有蓋高坏Aa類の脚と同じもの(10)、脚A類(11)、無蓋高坏Ac類と思われるものである。(10)以外は脚柱部にカキ目が施されている。大型甕口縁部破片が1点あり、B類に属すると思われるが、口縁端部は丸く納める。短頸甕はA類(13)が1点あり、黒色粘質土層出土のものに比べ小形で器壁が薄い。体部外面にはカキ目が施されている。甕は1点(14)あり、口縁端部を上下に拡張し中央に稜をもつて甕G類と類似する。肩部は受り、頸部には凸帯、波状文、肩部には列点文と沈線文を交互に配する。胴部外面にはカキ目が施されている。甕はC類(15)が1点と他に体部片が2点ある。

土師器では甕が9点あり、B類(16)2点、D類(17)3点、H類2点、不明1点があり、口縁部細片が多い。

製塩土器は7点あり、細片が殆どだが、A類(18)ばかりと思われる。成形、調整は内外面ともナデが多いが、1点だけ叩き目を施し灰褐色を呈したものがある。

轆轤口は先端部破片が1点出土した。

鉄滓は計307.1gで約8ヶの小塊があり、体積の割に重いものが多い。

SKN8(第36図20・21;図版246-3) 須恵器、土師器、製塩土器、轆轤口が少量出土した。

須恵器では坏が2点あり、CかD類とD類が各1点みられる。坏蓋はD類1点、有蓋高坏はAa類かと思われる脚(20)1点、小型甕はD類(21)が1点ある。

土師器は甕B類?の口縁部破片が1点ある。

製塩土器は体部片のみ9点あり、1点は内面にハケ状の、その他はナデの調整が施されている。

轆轤口は破片が1点ある。

沖積段丘面 包含層出土遺物

茶黑色粘質土層(第31・33・38~44図;図版248~256) 茶黑色粘質土層はSKN6・7、SBK1・2を覆う包含層であり、一括性の高い遺物が多く出土した。時期は『陶色』編年によると、Ⅰ型式の後半段階に属するものが殆どである。この層出土の遺物中にはSKN6・7、SBK2出土の遺物との接合例もあるが、その場合は原則として遺構内出土遺物として数えた。また、SDN2Ⅱ期堆積層である青灰色シルト10層出土遺物との接合例は、青灰色シルト10層の方へ入れた。遺物は須恵器、土師器、製塩土器、幡羽口、鉄斧、砥石が出土している。器種別数量表は第11~13表の通りである。地点別遺物出土分布図は第31・33図に示した。

須恵器は284点出土した。出土量の多い順に坏蓋、坏、無蓋高环、高环蓋、大型甕、小型甕、甕、有蓋高环、直口壺、飯、短頸壺、中型甕、壺がある。

坏蓋(第38図)は94点でB~E類があるが、全体に天井が丸く、稜部が明確に突出し、口縁部は内傾した面をなすもの=D類(9~17)が最も多い。但し、D類の中でも(9・10)はBに近い特徴を備える。次いでB類(1~6)、C類(7・8)、E類(18・19)の順に多くみられる。これら以外に、混入と思われるⅡ型式後半のもの(20)が5点ある。

坏(第38図)は62点でB~E類があるが、底部は丸く立ち上りの高い、口縁部の内傾して面をなすもの=D類(27~36)が最も多く、次いでE類(37~43)が多い。C類(22~26)は少量あり、B類(21)は1点しかない。他に混入と思われるⅡ型式後半のもの(44)も2点みられる。

無蓋高环(第40図)は19点で坏部から脚部まで残存するものは少なく、坏部の破片で点数を出した。A、B類がある。A類(2~15)は16点あり、坏部が底部から体部または体部から口縁部にかけてなだらかに続くものが多い。口縁部は1点だけ内傾した凹面をなすもの(2)があるが、他は全て端部を丸く納めている。脚部まで残存するものをa(3・12)、b(7・13)、c(10)と細分したが、脚部片(16~23)を見てもAa類が主体をなすと思われる。B類(1)は1点だけ判別できたが、一見坏蓋ないし高环蓋と間違えそうな形態である。B類(1)の脚は不明だが、SDN2Ⅱ期堆積層出土のものと同様、透かしの無い形態をなすであろうと思われる。他に坏部底の破片が2点ある。

有蓋高环(第39図)は9点でA類のみある。脚部部は一樣に拡張し、裾部外面に稜をもつものが多い。細分すればa(11~15)主体で、b(10・16)、c(17)もみられる。Aa類とAc類の脚部は形態上同じである。脚部で見ればAa、Ac類よりもAb類の方が新しい傾向をもつに対し、坏部で見ればAa、Ab類よりもAc類の方が口縁部を丸く納めて新しい傾向をもつ。この事から、坏部、脚部ともに新しい傾向を備えたものはみられないが、資料不足と今回設定した類そのものの基準にも問題が残ると思う。

高环脚部(第39・40図)は18点で、器種別数量表には載せていないが、脚部部を残す破片の個体数である。16~23(第40図)は無蓋高环の脚部と思われるもの、18~20(第39図)は有蓋高环の脚部と思われるものである。有蓋、無蓋高环A類の脚部が殆どであり、18・20(第39図)の様

な脚A類も2点みられる。

高环壺(第39図)は17点で、环壺と同じく天井部に丸みをもち、稜部は明確に突出している。稜部の突出度は环壺と比較しより顕著である。B～E類があり、C類(5・6・8)が多い。

甕(第41図)は22点で、大型甕11点、中型甕1点、小型甕10点で、B～D類があり、B類(1・2・5・8～10・12・13)が最も多い。

直口壺(第41図)は8点で、A、C類があり、A類(15～17)が多い。直口壺A類は甕B類の胴部と形態上の特徴が類似する。

短頸壺(第42図)は1点で、A類があり、他と比べて小形である。

甕(第42図)は10点で、A～D、G類があり、G類(6～8)が最も多い。他に頸基部の破片が8点、胴部の破片が個体数で50点ある。成形、調整は外面に平行叩き、内面にはスリクシまたは半スリクシを施したものが多く。

甕(第43図)は4点で、A、B類があり、B類(2)が多い。A類(1)は1点だけほぼ完形で出土し、把手直下より口縁部にかけて漆が付着して使用した痕跡を留める。

土師器(第43・44図)は58点出土した。多い順に甕、高环、甕、壺、環がある。

甕(第44図)は40点でA～D、F～H、J、L、M類があり、B類(2・7・9・11)、D類(4・12)が多い。A類(1)は胴部外面に叩き目、内面にナデが施されている。L類(15～17)のうち、(16・17)は胎土中に結晶片岩を含む。

高环は6点あり、環部はA、B類、不明が各1点づつの3点、脚部は3点あるが、主に細片で凶化していない。脚部の成形、調整には2種類みられる。1：脚柱部内面にヘラ削りを施したものの、2：粘土皿のつぎ目を残すものであり、1の胎土は粗く、2の胎土は精緻である。

甕(第43図)は4点で、A、B類があり、A類(4～7)が多い。他に底部の細片が5点ある。

壺(第44図)は2点で、二重口縁状の小形壺であり、口縁部のみ残存する。

環(第44図)はA類1点のみあり、胎土中に大量の微粒金雲母を含み精緻である。

環か不明の内響する口縁部破片が2点あり、胎土は環よりも粗く、内外面にナデ調整している。

製壺土器(第44図20、21)は55点出土した。細片が多く、口縁部と思われる部分で個体数を数えた。A、B類があり、B類(21)は1点で、他は全てA類(20)と思われるものである。

轆羽口(第60図1・3)は44点出土した。残存部分に関係なく、個体別の点数を出した。破片が多いが、中には遺存状態の良好なものもみられる。鉄滓、轆羽口、製壺土器は併せて出土している場合が多いようである。

鉄滓(第60図5；図版271下段一3)は合計6280.1g出土した。トレンチ東端北屑口の茶黒色粘質土層および黒色粘質土層出土のものが最も多く、約半分を占める。体積の割に重いもの、軽いものの二種類があり、全体に軽いものの方が量が多い。

磁石(第61図1・2)は7点出土した。六角柱状に面をなしたものが多く。

黒色粘質土層(第36図3～7；図版246一1) 黒色粘質土層出土の遺物には、上層の茶黒色

粘質土層出土遺物との接合例が幾つか認められた。須恵器では無蓋高環（第40図4・5・10）、甕（第42図5）、壺（第37図14）、土師器では甗（第43図6）がそれにあたり、形態的な特徴では茶黒色粘質土層出土遺物の中でも古い要素を残すものが多い。茶黒色粘質土層出土の遺物と接合したものは茶黒色粘質土層の方へ含めた。

遺物は須恵器、土師器、製塩土器、鴨羽口、鉄滓、砥石が出土している。器種別類別表は第13表、地点別遺物出土分布図は第32図の通りである。

須恵器は4点出土した。環は1点でE類（6）がある。底部は丸みをもち、立ち上がりは高い。ヘラ削りは左回りで、内底面のナデは一定方向に数回施している。無蓋高環は口縁部細片が1点で、斜め上外方に開く。端部は薄く丸い。内面に灰を多くかぶっている。甕は2点で小型甕（7）口縁部と大型甕の胴部片がある。7は凸帯から斜め上方に外反して開き、端部はやや薄く丸く納める。胎土は蓋環に比べ緻密である。大型甕は胴部から底部にかけてのもので、胴部最大径の位置に波状文と沈線文が施されている。内面には叩きらしい痕跡が、外面には左回りのヘラ削りがみられる。底部内面には灰をかぶっている。

その他に数量表には含めていないが、壺の胴部と思われる破片が1点あり、頸部からなだらかに下って球胴状をなす。底部は欠損しており不明である。胴部下半の外面に横方向のち縦方向のナデを施すが、叩きの痕跡を留める。内面には左回りのヘラ削りを胴部下半に施している点で、他の須恵器と比較し特異である。胎土はやや粗い。その他、環か環蓋不明の破片1点、甕胴部片2点がある。甕は外面に粗い平行ないし格子の叩きを施し、内面はスリクシている。

土師器は5点出土した。高環は脚柱部破片（5）1点で、外面は不明だが内面に指押えの痕跡を留める。甗は口縁部細片が1点あり、内面にヘラ削り、口縁増部に横ナデが施されている。甕は口縁部細片ばかり（4）3点ある。他にSDN2Ⅰ期堆積層出土の甕（第36図3）との接合例もある。頸部片2点、胴部片21点もみられるが、いずれも細片である。成形、調整痕を留めるものは6点あり、外面ハケ目、内面削り又はハケ目を施している。その他に数量表には含めていないが、鍋底部かと思われる平底の破片1点がある。

製塩土器はA類の口縁部破片が3点あり、成形、調整はナデである。

土器以外に、焼けた粘土小塊が2つあり、その1つに靨の疝瘻ないし靨が認められた。胎土は砂粒を含まず精緻である。色調は灰黄色を呈する。

埋没河川（SDN2）出土遺物（第36・45～53図；図版246—2、図版257～265）

Ⅰ期の遺物（第36図2・3・8～17） SDN2Ⅰ期堆積層からは須恵器、土師器、製塩土器、鴨羽口、鉄滓が少量出土している（第10～12表）。

須恵器は11点出土した。

環は2点でC類（16・17）がある。底部は丸みをもち、立ち上がりは高い。

環蓋は3点でB類（14）、C類（13）、不明1点がある。天井部は平に近く、襍部は大きく突出する。ヘラ削りは右回りで殆ど以上施している。13は天井部内面に一定方向のナデを施してい

るが、同心円状の細かい叩き(当て具痕?)を残す。他に環か環蓋の細片1点がある。

高環脚部は1点あり、形態からみて有蓋高環B類の脚部と思われるものである。(11)。

甕は1点で大型甕の頸部から胴部にかけてのもの(8)があり、外面には灰をかぶり施文されているかどうか不明である。頸部内面には口縁部を接合した際の指押えの痕跡を留める。

短頸壺はA類(12)の大形が1点ある。外面には粗い平行叩き(2cm幅に6本)の後カギ目を施すが、口縁部にまで叩きの痕跡を残す。内面は同心円叩きの後ナデているが僅かにその痕跡を留める。胎土は蓋環と同じくやや粗い。

壺は1点で口縁部は細い頸部から外反し、屈曲して斜め上方にのび、端部寄りで内方へ屈曲する(9)。口縁端部はやや薄く丸く納める。無文である。頸部寄り凸帯は上部をシャープなものナデて浮き上がらせたものか。上下を凹ませて突出させた凸帯とは異なる。胎土はやや粗い。

甕は1点あり、G類(10)に入れたが、端部外面は稜をもたず丸みを帯びている点で異なる。無蓋高環Aも類の脚部部に類似する形態である。口縁端部内面のナデは弱い。頸部外面には波状文が施されている。胎土はきめ細かい。甕としたが、壺の可能性もある。他に甕の胴部片が8点あり、外面は平行叩きが多いが格子叩きもみられ、内面はスリケシたものが多い。外面が粗い平行叩きのものには、内面に同心円叩きを留めるものが2点ある。

器台は1点でA類(15)の脚下部破片である。最下段の透かしの底辺から欠損したもので、透かし部分は殆ど残存していないが、三角形状を呈していた様である。透かし直下に先端の丸い凸帯を2条と、2条1帯のやや雑な波状文を有する。胎土はきめ細かい。

土師器は4点出土した。甕ばかりでD類(2)1点、I類(3)3点である。D類は大形であるが、I類は3点とも中形である。3は黒色粘質土層出土の甕と接合した。成形、調整はD、I類ともに外面ハケ目、内面ヘラ削りを施すが、口頸部に一部ハケ目を残すものもある。他に頸部片1点、胴部片8点があり、大形の胴部外面には煤が付着している。

製塩土器はA類の口縁部破片が9点ある。成形、調整はナデが多いが、2点は貝殻腹縁による条痕が一部認められ、その器壁は他のものに比べやや厚手である。また、器壁が厚いもので器表面のもうい製塩土器かと思われるものも1点含めている。胎土は全体に緻密で、色調は橙色ないし灰黄色を呈する。

罐羽口は9点あり、小破片が多い。全体の形状は茶黒色粘質土層出土のものとはほぼ同じである。残存状況の良い1点では、残存長6.0cm、外径5.5cm、内径2.3~2.4cm、先細りの筒状をなし、先端部の外径は4.0cmを測る。外面の調整はナデである。内面から3~4mmの厚さで亀裂を生じているが、竹に粘土を何重にも巻いて作った痕跡か。色調は先端部から基部に向けて、外面では黒色、暗灰色、灰色、灰白色、内面では暗赤褐色、橙色、浅黄橙色を呈する。

鉄滓は総重量1119.5g出土した。長さ7cm未満の小破片が多い。体積の割に軽いもの、重いものの両者がある。片面は凸、もう一方の面は平ないし浅い凹面をなすものが多い。凸面側は小さく凹凸しており、木炭、砂礫を含んだものがある。凹、平面側には鉛状に溶けた部分もみられる。

表面には無数の気孔があり、錆びた色調のものが多いが、飽状に溶けた部分では暗青灰色を呈する。

磁石は2点出土した。図版272下段—2は六角柱状をなす砂岩製だが、もう1点は一面に砥石面を留める細片で、材質は凝灰岩質砂岩である。

Ⅱ期の遺物(第45・46図、第49図8；図版245下段—3・3'；図版262—3) S₁DN2Ⅱ期堆積層からは須恵器、土師器、轆轤口、鉄滓が出土している。

須恵器は27点出土した。坏(第45図)は6点でD類(5・8・10)3点、E類(6・7・9)3点がある。底部は全体に丸くて深めである。坏蓋(第45図)は4点でB類(3)、D類(1・2・4)がある。天井部は丸い。高坏蓋(第45図)は1点でF類(11)がある。有蓋高坏(第45図)は2点でA類(12・13)があり、坏部は坏D類と類似する。無蓋高坏(第45図)は2点でA類(14・15)がある。14は茶黒色粘質土層出土の破片およびSKN7出土の脚端部細片と接合した。大型甕は1点で基部から胴部にかけての破片である。B類と思われる。

直口壺？(図版245下段—3・3')は1点で、B類？の基部から底部にかけての個体が残存し、製作技法を観察する事ができた。成形、調整は外面では胴部上半部を横ナデ、下半部を右回りのヘタ削り、底部を不特定方向にヘタ削りしているが、胴部に縦方向の平行叩き目(1つの間隔が0.2cm)、胴部下半に横方向の平行叩き目を一部残す。内面では底部に直径6.7cmの粘土板のつぎ目を留め、半径約1.2cmの叩き目が粘土板とのつぎ目より少し上部にまで及ぶ(3)。このつぎ目より胴部までは沈線状の凹みをもつ横ナデ、胴部より上方は平滑な横ナデであるが、胴部分に粘土のつぎ目が残る(3')。

以上の観察結果をもって製作技法を推測すると、先ずロクロに直径約7cmの粘土板を置き、その上に粘土紐を胴部まで巻き上げ成形した後、外面に平行叩き(内面は当て具が不明)を施す。叩きの前後には底部内面(粘土板部分)を半径約1.2cmの叩きの原体により凹ませる。その後、胴部に回転ナデを施す。胴部から頸部にかけては後でつぎ足し、叩き成形後横ナデを施す。口縁部は最後に作り足したものとと思われる。底部はロクロより切り離し、乾燥後に不特定方向の削りで底部を丸く仕上げ、胴部下半に回転ヘタ削りを施す。胴部はヘタ削りを施した後、一部横ナデを施す。施文は胴部から頸部にかけて粘土をつぎ足し、横ナデ調整を施した後、胴部最大径の位置に沈線2条と、沈線間に列点文を配したものと推測する。

短頸壺は1点(第49図8)でA類がある。小形壺は1点(第45図16)ある。甕(第45・46図)は5点で、A類(19)、C類(3)、F類(17)、G類(18)がある。18は頸部に波状文が施され、胴部の狭りも弱い点から壺の範囲に入るものかも知れない。4は大甕の胴部下半が大きく残存する為、個体数の中へ含めたものである。底部中央および底部接地面より上部は凹んでおり、挽きひずみがひどい。外面には坏や甕の破片が7点落着してみられる。成形、調整は外面では平行叩きの後カキ目を施すが、底部では平行叩きが重なって格子状を呈する。内面はナデられているが、同心円文叩きの痕跡を留める。他に、頸部片6点、胴部片1点がある。器種不明は1点

(第45図20)で口縁部のみ残存する。小形の浅い碗状を呈し、口縁部は外傾した凹面をなす。器台(第46図)は2点でA類(1)、Bb類(2)がある。2は氾濫原の室町時代洪水堆積層出土の破片と接合し、沖積段丘面の黒色粘質土層出土の破片とは同一個体と思われるものが認められた。

土師器は胴部片が9点出土した。大形甕の胴部片と思われるものは4点あり、外面にハケ目、内面にヘラ削りを施している。小形甕は頸から肩部にかけて残存するものが1点あり、内外面にハケ目を施し、内面に粘土紐のつぎ目を留める。この小形甕片は胎土中に微粒金雲母を含む。その他、犬形、小形不明の胴部片には、外面に叩き、内面に削りを施したもの、胎土中に砂粒を多く含むもの、結晶片岩の砂粒を多く含むもの、微粒金雲母を含むものが各1点ずつみられる。

罐羽口は1点(第60図2)あり、先端部分が残存する。

鉄滓は総重量117gで小片がみられる。

Ⅱ期の遺物(第47～53図;図版258～265) 埴沢河川(SDN2)Ⅱ・Ⅲ期にあたる堆積層からの出土遺物には、Ⅱ期にあたる土層出土の遺物と異なり、Ⅰ型式からⅡ型式後半にわたる広い時期幅のものが混じり、Ⅰ型式1段階に属すると思われる須恵器が数点出土している。全体に焼成不良やゆがみのあるもの、窯休片の溶着したものなどが多い。割れ口や器表面はローリングを受けて磨耗したものが多く、これはSDN2堆積層Ⅱ期の須恵器と様相を異にする。出土遺物は須恵器が最も多く、土師器は少ない。他に縄文土器、弥生土器、製塩土器、鉄滓が少量だが出土している。以下、古墳時代の遺物について説明をしたい。数量の出し方は器形の分る破片を全て数えた。但し、体部、坏蓋の天井部や坏底部破片等は点数からは除いた。ここでは遺物の分類を行ってはいがが類別数量表は出していない。

須恵器は(第47～52図;図版258～264)計2862点出土した。出土量の多い順に坏、坏蓋、甕、無蓋高坏、甕、器台、高坏蓋、有蓋高坏、壺、短頸壺、直口壺、坑、壺蓋、提挈、甌がある。

坏は1310点(第47図;図版258)で、A・D～I類がみられ、D～G類(第47図16～27)が多い。A類(第47図31・32)には大・小形があり、小形では手持ちヘラ削りが施されており、両者ともにⅠ型式1段階に属すると思われるものである。I類(第47図33)は裏返して焼成されたらしく、底部外面に自然釉をかぶる。

坏蓋は1155点(第47図;図版258)でA・D～I類があり、D・F類(第47図2～9)が多い。A類(第47図1)は天井部が平で口縁部が高く、Ⅰ型式2段階に属すると思われるものである。

甕は133点(第50・51図;図版263)でA・D～O類があり、G～I類(第50図3・5・11～13、第51図1～6)が多い。A類(第50図1)は口縁部を丸く納めⅠ型式1段階に属すると思われる。甕としたものの中には器形が広口壺状のものもあるが、明確な甕、壺の判断基準を私自身持ち合わせていない為、一括して甕とした。

無蓋高坏は77点(第48図;図版260)でA・B類があり、A類(第48図16～20)が多い。A類

は28の様な長脚2段透かしになるであろうものは出土量が少なく、短脚一段透かしが主流を占める。B類(第48図21~24)は包含層出土のものに比べて出土量の多いのが特徴である。

有蓋高環は24点(第48図; 図版259)でA・B類があり、A類(第48図7~10)が多い。しかし、無蓋高環同様にB類(第48図11~13)の出土量が包含層出土のものに比べ多い。

高環脚部は211点(第48図; 図版260)で数量表には載せていないが、種々の脚部が出土しており、透かしの有・無で大別できる。透かしの形には長方形を呈したものが多く、円形のものもみられる。包含層出土の高環と比較し、透かしの無いもの、円形透かしのものが比較的多く認められ、これらの脚端部は殆ど拡張していないのが特徴である。

高環蓋は31点(第48図; 図版259)でA・B・E・F類がある。A類(第48図1)は天井部外面に手持ちへつ削りを施し、稜部は大きく突出する。口縁端部は丸い。I型式1段階に属すると思われるもので、1点だけ出土している。E類(第48図2)は天井部外面に列点文を交互に配したもので、他にもう1点施文された高環蓋がある。扁平で中央の凹んだつまみ部分を残す天井部破片(第48図6)もみられる。

甌は58点(第49図; 図版261)でA~F類がある。A類(第49図2、3)はI型式1段階に近い形態をなす。F類(第49図1)は1点だけ出土した。

直口壺は7点(第49図; 図版261)でA~C類があり、B類(第49図12)は無文で口縁端部の開き方が他とは異なる。

短頸壺は8点(第49図; 図版262)でB類がみられる。

壺は13点(第49・52図; 図版262)で広口壺体部と思われるもの(第52図9)、小形壺(第49図7)、有蓋短頸壺(第49図15)がある。有蓋短頸壺には(第49図14)の様な蓋がセットとして用いられたものであろう。

碗は6点(第52図)で有文のもの、無文のものがある。

摺鉢は2点(第52図4、7)で口縁部破片、底部破片が各1点づつある。

器台は33点(第52図; 図版264)で高環形器台、筒形器台があり、前者が多く出土している。11(第52図)は環部外面に鋸歯文を施したもので、当遺跡ではⅡ期の土層より計2点出土している。

その他に2点(第52図)、鉢かと思われる碗を大きくした形態をなすもの(1)と、生焼けて鉢の様なものか不明のもの(6)がある。

土師器(第53図; 図版265)は計75点で出土点数の多い順に甕、高環、瓶、杯、小形壺、ミニチュアがある。総じて河川内出土の割に遺存状態は良いが、出土量の少ないのが特徴である。

甕は57点でC・E~K類がある。このうちE・K類は包含層にみられない類である。13、22(第53図)は胎土中に微粒金雲母を含んでいる。

高環は2点でC類(第53図4)が1点あり、脚部破片も1点みられる。他に高環か不明の破片も2点ある。

瓶は4点でB類口縁部破片、C類(第53図9)、底部破片がある。C類は1点だけであり、鍋状の形態をなす。

小形丸底壺は1点で底部のみ残存する(第53図3)。

坏は2点でB類(第53図7)があり、内面に暗文、外面にヘラ削り調整を施している。

壺は1点で(第53図8)を壺としたが、長頸の大形甕の口縁部か不明である。

漢式派鉢は1点(第53図23)ある。

ミニチュアは1点(第53図6)で手づくねの土器である。

その他は5点で図化していないが、器台かと思われる破片が2点、不明が3点ある。

製土器(第53図5)は計9点でA類の細片が認められた。

鉄滓(第60図4; 図版271下段4・5)は計2034.2g出土した。比較的残存状況の良いものが3個みられる。

坏・坏壺の仕上げナデについて(第7、8表)

第7表 坏内底面仕上げナデ(混入の2点含まず)

第8表 坏壺内天井面の仕上げナデ(混入の5点含まず)

内底面のナデ 類	仕上げナデ					計 (点数)
	1	2	3	4	不明	
B				1		1
C	1		6	2	2	11
D	5	3	2	10	4	24
E	3	2	1	4	8	18
CかD					15	15
計 (点数)	9	5	9	17	29	69

内天井面のナデ 類	仕上げナデ					計 (点数)
	1	2	3	4	不明	
B	7	5		3	5	20
C	2		1	2		5
D	18	4	2	5	5	34
E		1		1	1	3
B~D 不明	2				40	42
計	29	10	3	11	51	104

沖積段丘面出土の坏の内底面、坏壺の内天井面には4種類の仕上げナデがみられる。1) 不特定方向に丁寧なナデを施したもの 2) 一定方向に3回以上のナデを施したもの 3) 一定方向に1~2回のナデを施したもの 4) 回転ナデを施したものである。

SDN2および茶黒色粘質土層出土の遺物は、器種別に分類した中に共通性が見い出され、時間的な幅に大差がない。そこで、遺構をも含む茶黒色粘質土層出土の坏で類別に仕上げナデの特徴をみると、第7表の通りとなった。B類は出土量が少なく、比較の対象にはなりえず、除外して考えると、C類では3の仕上げナデが一番多いのに対し、D、E類では4の仕上げナデが最も多い。よって、新しい傾向を示すD、E類は、古い傾向を残すC類に比べ、簡略化した仕上げナデの割合が高いと言える。

坏壺でも坏と同じく類別の仕上げナデをみたが、坏とは異なり、類に関係なく丁寧な仕上げナデを施したものが多くの特徴である(第8表)。

以上、坏・坏壺の内面の仕上げナデについて観察したが、古い傾向を残す型式に丁寧な仕上げナデが必ずしも施されているものではなく、当遺跡出土の限定された時間の幅内では、各類と仕

上げナデの関連性は、坏の一部の資料（ナデ3、4）を除き、殆ど認められなかった。

坏・坏蓋内面の圧痕（叩き）について（第35図）

茶黒色粘質土層出土の坏の内底面には同心円状の圧痕を残すものが2点（第38図24）あり、兩者ともにC類に属する。SDN2のⅡ期堆積層からも圧痕を残す坏（第35図3）が出土しており、前述と同じくC類に属する。

茶黒色粘質土層出土の坏蓋の内天井面には坏と同じく同心円状の圧痕を残すものが3点あり、B類（第35図2）が2点、他にD類がある。

坏蓋ともに内面に圧痕をもつものは茶黒色粘質土層出土の中で出土量の少し多い目の類に属しており、包含層の中で最も新しいと思われる類のものには圧痕が認められなかった。

その他、特殊例として、坏蓋の天井部外面に平行叩きの痕跡を留めるものが1点（第35図1）あり、D類に属すると思われるものである。

須恵器甕胴部の叩きについて（第9表）

第9表 須恵器甕胴部叩き

叩き	4			5			6			7			8			9			10			14			小計	計 (%)
	A	B	C	茶	A	B	C	茶	A	B	C	茶	A	B	C	茶	A	B	C	茶	A	B	C	茶		
ナデ	1							1		1														2	11 (18.0)	
	2							3			1	2												6		
	3			1					1	1														3		
格子	1							1	1	1	2		4											10	13 (21.3)	
	2						1						1											2		
	3				1																			1		
風	1							1	2	3	1	3	5	2		2	2		1	1	1	1		1	26	37 (60.7)
	2				1	1			1		3	1						1			1			9		
	3													1					1					2		
平行	1							1	2	4	2	4	6	4	2		6	2		1	1	1	1		1	38 (62.3)
	2				1	1			1		4		3	2	2	1		1		1		1			17 (27.9)	
	3										1	1							1						6 (9.8)	
総計	1				3			15			22		12			2		5		1				61	100	

A: SKN 7、B: SKN 6、C: SBK 1,2、茶: 茶黒色粘質土

沖積段丘面の遺構および茶黒色粘質土層より出土した甕は口縁部では12個体認められたが、更に胴部の破片では61個体を数えた。これらの胴部外面には、格子叩き、格子風叩き（一見格子叩きに見えるが、実際は1方向の条線が濃く、もう1方向の条線が薄いもの）、平行叩きがある。内面には1) 丁寧にナデたもの、2) 半ば又は一部ナデたもの、3) ナデを施さず、同心円又は青海波文を留めるものの3種類がある。また、胴部外面には同じ叩きの種類でも粗・細があり、これらを区別する為に最も残存状況の良い叩きの個所を選び、2cm幅に何本の凹みを有するかを示したものが第9表である。これには口縁部を残すものは入れなかったが、口縁部の残存するもので叩きの認められたものは4点あり、そのうち3点は平行叩き、1点は格子風叩き（第42図

5) で、全て2cm幅に7本の叩きである。胴部内面には(第42図8)を除いたものに、1、2のナデが施されている。同心円等の内面叩きの半径は1.5cm~2.9cmの間である。

第9表では内面ナデ1、2が全体の約9割を占める。外面の叩きが多い順に平行(60.7%)、格子風(21.3%)、格子(18.0%)となっており、2cm幅に6、7本が最も多い。

須恵器のヘラ記号について(第34図)

太平寺遺跡では遺構・層位に関係なく、16種類のヘラ記号が認められた。器種では坏が一番多く、次に甕、高環、甗、坏蓋の順にヘラ記号が多く施されている。

SKN6・7、SBK1・2、茶黒色粘質土層出土の遺物を合計すると、須恵器の全個体数284点中13点(4.6%)に10種類のヘラ記号が認められた。器種別には坏7点(9.9%)に6種類、坏蓋1点(1.0%)、無蓋高環4点(19.0%)に4種類、小型甗1点(9.1%)となっており、無蓋高環の2種類については坏・坏蓋にそれぞれ同じ種類がみられる。但し、茶黒色粘質土層出土の坏蓋1点のみは天井部が丸く稜の失せた新しい特徴を示し(第38図20)、包含層の中でも一括の遺物とは区別される。残る12点のヘラ記号を有する遺物については一括性が高い。器種別にヘラ記号の施されている遺物の類をみると、坏ではB類(12)1点、C類(1・8・9・11)4点、D類(15)1点、E類(16)1点であり、C類が多い。ヘラ記号は坏の外底面に施されているが、(1)は内底面に認められ、スナ状の圧痕の可能性も考えられる。無蓋高環はA類(第40図4・11)、Aa類(第40図12)、Ab類(第40図13)にヘラ記号が認められた。Ab類は脚部に、他は坏部にヘラ記号が施されている。小型甗はC類(3)に認められた。ヘラ記号の施されている坏、無蓋高環の中には同じ類のものも幾つかあるが、記号自体と細部の形態的な特徴が異なる。

SDN2のⅡ期にあたる土層出土遺物のヘラ記号には坏では3種類(10、14、茶黒色粘質土層出土の11と同じ種類のもの)、甕では3種類(4~6)がみられる。甗(第49図2)底部には(13)と同じ種類の、甗(第49図4)口縁部内面には(8)と類似したヘラ記号が認められた。高環脚部(第48図27)には(2)のヘラ記号が透かしと反対側の位置に施されており、このヘラ記号は高環の1点だけである。

太平寺遺跡出土のヘラ記号をまとめると次の様になる。

1. SKN6・7、SBK1・2、茶黒色粘質土層出土の須恵器を合計して、ヘラ記号をもつものは全体の4.6%を占め、坏底部外面に最も多く認められた。
2. *x、*yのヘラ記号は坏、坏蓋、甗、甕、高環にみられ、時期はⅠ型式後半からⅡ型式後半までの間に属する。このことから、*x、*yはヘラ記号の中でも特に多用されたものといえる。
3. 坏などの同じ類のものには異なったヘラ記号を用いている。

重ね焼きの痕跡について(図版245下段-1・2)

茶黒色粘質土層出土の須恵器には灰を被ったものが多く、その部分は限られた場所に認められ

る事から、焼成時にどの様に固定して置いたか、一部推測が可能である。坏蓋では蓋の外面に、坏では受部外面に灰がかかっており、坏の受部に蓋の口縁端部が溶着した例もある事から、坏は蓋をかぶせた状態で焼成したと推定できる。有蓋高坏は外面に灰を被った例が3点あるが、内面に灰を被ったものは1点もない。高坏蓋は外面に灰を被ったものが6点認められ、そのうち4点に直径7.5~9.8cmの輪状の溶着痕が残る。1点だけは天井部外面に器種不明の底部片が溶着した例もみられる。この事から、有蓋高坏は蓋をかぶせた状態で、更に蓋の上へ高坏の脚を乗せ、焼つか積み重ねて焼成したものが多いと思われる。無蓋高坏は内面に灰のかかったものが22点中19点あり、残る3点のうち1点は外面に自然釉がかかった特異な例である。他の2点には灰がかかっていない。灰のかかった19点のうち16点は坏底部が残り、その中でも11点については坏部内底面に重ね焼きの痕跡を留め、直径8.6~12.1cmの間の輪状をなす。これは高坏脚部の径とほぼ合致し、有蓋高坏の蓋に認められた溶着痕の径よりも少し大きめである。よって、無蓋高坏の坏部に更に無蓋高坏脚部を乗せ、重ね焼きを行ったと推測できる。甕・壺類は口縁部内面、肩部外面に灰を被ったものが多い。SKN 7出土の甕(第37図15)の口縁部内面には更に壺か甕類を積み重ねて焼いたらしく、底部の破片が一部溶着してみられる。

輪羽口 (第33・60図1~3; 図版271、第10表)

輪羽口は沖積段丘面において、古墳時代の包含層である茶黑色粘質土層、黒色粘質土層、SDN 2のⅠ~Ⅲ期の堆積層より合計62点出土した。このうち、茶黑色粘質土層出土のものは48点と最も多く、鉄滓、製塩土器を共伴しているものが過半数を占める。出土地点でみると茶黑色粘質土層では建物周辺に多く、黒色粘質土層では建物周辺からのみ少量出土しており、古墳時代の包含層では、上、下層ともに建物周辺に集中するのが特色である。SDN 2ではⅡ期堆積層に集中してみられる。他に沖積段丘面の灰白色細砂層から1点出土している。

形状は直径5~6cmの少し先細りの筒状をなす。外面はナデによる雑な面取りを施し、内面はなめらかである。内径は先細りないし一定している。色調は外面では先端から基部に向けて黒色、褐灰色、灰色、浅黄褐色と変化し、内面では先端から基部に向けて黒色、暗赤褐色、橙色、浅黄褐色と変化している。胎土は緻密である。

1(第60図)は先端部のみ残存する。残存長7.2cm、中央部外径5.2×5.3cm、内径2.2×2.3cmで、内径は先端に向けて径が小さくなり、上部は5mm程垂下している。色調は外面が黒色、褐灰色、浅黄褐色、内面が黒色、暗赤褐色、橙色である。SDN 2Ⅱ期の茶黑色粘質土層および黒色

第10表 沖積段丘面輪羽口数量表

遺構・地点・層位		個体数	
SKN 7		1	
SKN 6		1	
SBK 1・2		2	
茶黑色粘質土		44	
SDN 2	I期	トレンチ南端西層部 黒色粘土	8
	II期	南端西層部 灰黒色粘土	3
		下層 中央SEC室部(底部)10層 青灰色シレット	1
	III期	上層 南端西層部 青灰色砂礫	2
合 計		62	

粘質土層より出土している。

2 (第60図) は先端部のみ残存する。残存長9.0cm、中央部外径5.3cm、内径2.5×2.6cm、先端部外径4.5cm、基部外径5.8cm、内径は先端部・基部ともに一定である。先端部は内径よりも1.3cm程垂下している。色調は外面が黒色、褐灰色、灰色、内面が黒色、暗赤褐色、褐色、浅黄褐色である。河川内堆積層である青灰色シルト10層より出土している。

3 (第60図) は先端部の欠損した基部破片である。残存長8.0cm、先端部外径5.5cm、基部外径6.4cm、中央部外径6.4×5.4cm、内径3.0×3.1cmで内外径ともに先端部に向けて小さい。断面形は中央部でみると、内径が左側に偏って位置する。色調は外面が青灰色、灰色、淡褐色、内面が褐色、浅黄褐色である。茶黒色粘質土層より出土している。

砥石 (第61図; 図版 272 下段、第11表)

砥石は古墳時代包舎層の茶黒色粘質土層より7点、SDN2の両部の茶黒色粘質土層および黒色粘質土層より1点、黒色粘質土層より2点、SDN2堆積層Ⅱ期(青灰色砂礫土層)より1点出土している(第11表参照)。SDN2Ⅰ期・黒色粘質土層出土の(図版272下段-2)は六角柱状に面をなし、そのうちの四面の平滑な砥石面、残る二面は剝離を多く残す。一端は割れ面をなし角部分のみ砥がれているが、他端は二面の平滑な面よりなる。長さ7.4cm、幅×厚さ6.9×5.4cmである。SDN2Ⅰ期・茶黒色粘質土層および黒色粘質土層出土の1(図版272下段)は正面が三面よりなる平滑な砥石面で、背面および両端部は割れ面である事から、多角柱状の砥石の破片と思われる。長さ9.5cm、幅5.6cm、厚さ2.4cmである。この砥石と共に多量の鉄滓が出土した。茶黒色粘質土層出土の(第61図1)は正面に砥石面である浅い2つの凹みを有し、背面は大きな割れ面をなす。大きな石塊から欠き取り、自然面の方を砥石面として使用したものか。長さ10.8cm、幅12.7cm、厚さ3.5cmである。茶黒色粘質土層出土の2(第61図)は六角柱状をなし、

第11表 遺構・地点・層位別砥石一覧表

図番号	写真番号	遺構・地点	層位	重さ(g)	石材
61-1	272下段 5	E5-b ₁	茶黒色粘質土	510	凝灰岩質砂岩
61-2	4	E5-a	茶黒色粘質土	266.5	流紋岩
61-3	3	SDN-2(Ⅱ期) 南壁西側部	青灰色砂礫	266	和泉 砂岩
	1	SDN-2トレンチ(Ⅰ期) 東端壁北側口	茶黒色粘質土 黒色粘質土	115.5	流紋岩
	2	SDN-2トレンチ(Ⅰ期) 南端壁西側部	黒色粘質土	360	花崗岩質砂岩
		"	"	5.5	"
		E5-a	茶黒色粘質土	59	流紋岩?
		E5-b ₃	茶黒色粘質土	682	凝灰岩質砂岩
		E5-d ₁	茶黒色粘質土	4.5	砂岩?
		E4-d	茶黒色粘質土	89.5	スレート?
		北側溝中	黒色砂質土及び暗青灰色シルトの ブロック状北東側より5~6枚目	85.5	和泉 砂岩

一端の各面毎に長軸と直交した鋭い線条痕が認められる(幅2mm、断面形V字状)。他端は折損している。長さ11.6cm、幅4.6cm、厚さ3.7cmである。SDN2堆積層Ⅰ期(青灰色砂礫層)出土の砥石(第61図3)は一端が細くなる六角柱状(五角形に近い)をなし、両端ともに割れ面で角が丸くなっている。砥ぎ面には長軸に沿った方向の条痕が認められる。この砥石と共に多量の鉄滓が出土した。長さ14.2cm、幅×厚さ5.6×4.6cm、2.4×1.6cmである。

古墳時代の砥石には多角(六角?)柱状を呈したものが多く、材質は砂岩、凝灰岩質砂岩、流紋岩を用い、鉄滓、鑄羽口、製塩土器等を共伴するものが多いのが特徴である。

鉄滓 (第60図4・5; 図版271下段、第12表)

沖積段丘面出土の鉄滓は合計11278.9gある。沖積段丘面の古墳時代包含層(主に茶黒色粘質土層)、SDN2堆積層より検出されたものであり、その地点別出土状態は第33図に示した。SDN2のⅠ期にあたる土層からの出土量が最も多く、次いで遺構周辺に偏ってみられる。

形状は碗状に底が丸く、上面は凹面をなす。表面には無数の空気孔があり、底部が泥状に固まった感じのもの、上部に小礫の付着したものなどみられる。鉄滓には体積の割合に軽いもの、重いものの二種類があり、軽いものの方が圧倒的に量が多い。比重の重いものは軽いものに比べ、体積が小さく泥土や小礫を含む量が少ないようである。

4(第60図; 図版271下段-5)は楕円形の長軸両端がない形で、底部の丸い碗状を呈する。上面は青灰色ないし暗青灰色で胎状に一部溶けた凹面をなし、底面は泥土が付着し凸面をなす。底面の泥土付着部分と上面の胎状に溶けた部分以外は無数の気孔を有し、その表面は錆びて橙色ないし明褐色を呈する。大きさは121×101×41mm、重さ331gである。SDN2Ⅱ期の灰褐色砂礫8層より出土している。

5(第60図; 図版271下段-1)は楕円形のごく浅い碗状を呈する。上面は黒褐色で一部胎状に溶けた凹面をなし砂が付着している。底面は灰オリブ色を呈し、僅かに木炭をかんだ浅い凸

第12表 遺構・層位別鉄滓重量表

遺構・地点・層位			個体数	重量計(g)	
SKN 7			12	307.1	
SBK 1・2			4	315.9	
茶黒色粘質土			278	3571.9	
S	I期	東端北西部	茶黒色粘質土 黒色粘質土	127	3298.8
		トレンチ南端 壁西部	黒色粘質土	5	1048
	D N	南壁西部	灰黒色粘土	1	71.5
		2 下層	灰褐色シルト 9層	1	105.5
			青灰色シルト (包含層混じる) 10層	1	11.5
III期	2 上層	灰褐色砂礫 8層中部1	1	331	
		青灰色砂礫	7	1703.2	
		灰褐色砂礫(第1層) 灰褐色シルト (第2層)	1	38.5	
南壁西部 灰白色細砂			2	476	
計			440	11278.9	

面をなす。表面全体は錆びており橙色ないし明褐色を呈し、無数の気孔を有する。大きさは98×85×26mm、重さ163gである。SDN 2Ⅰ期の茶黒色粘質土層および黒色粘質土層より出土している。

4 (図版 271 下段) は平面形が菱形状で、断面形は上面の凹んだ凸レンズ状の碗形蹄である。上面に特に多く砂礫をかんでおり、色調は上面の一部と底面の約1/3が黒褐色を呈し、他の部分は錆びて橙色ないし明褐色を呈する。上面の胎状になっている部分はオリブ黒色である。表面には気孔が無数あり、内部は一部空洞になっている。大きさは132×91×34mm、重さ242gである。SDN 2Ⅱ期の青灰色砂礫層より出土している。

2 (図版 271 下段) は平面形が四角く、断面形が片面凸レンズ状をなす。小ぶりだが重く、色調は黄灰色を呈する。表面の気孔は他と比べて小さくや少ない。上面中央は凹み、一部泥土をかんでいる。大きさは73×65×25mm、重さ132gである。SDN 2Ⅰ期の茶黒色粘質土層および黒色粘質土層より出土している。

3 (図版 271 下段) は平面形が三角形状、断面形が扁平な四角形状をなし、小ぶりだが重い。片面に礫を1個かんでいる他は殆ど不純物らしきものは含まず、鉄の塊状を呈する。色調は地の色は黒褐色だが、表面の錆がほぼ全面におよび黄褐色である。表面には細かな気孔が一部みられるが2 (図版 271 下段) よりもなめらかである。大きさは63×31×24mm、重さ48gである。茶黒色粘質土層のE5-b3地点より出土している。

古墳時代遺物のまとめにかえて

古墳時代の遺構および包含層出土の須恵器について観察した結果、生焼けのもの、ゆがみのあるものなどが多くみられた。河川内堆積層出土のものは窯体の破片と溶着したものもある。河川内堆積層Ⅰ期出土のものはⅠ型式の初め位からⅡ型式の終わり頃までの期間の須恵器がみられ、河川内でローリングを受け、器表面、割れ口ともに磨耗したものが多く、これは上流の集落ないし窯跡から押し流されてきたものと思われる。河川内堆積層でも下層Ⅱ期にあたる部分出土の土器は、上層Ⅲ期出土のものに比べて余り磨耗して、時期は包含層と同じⅠ型式の後半期に属する。土層もシルト層であり、包含層の遺物が転落または廃棄された可能性の高いものである。

包含層出土の土器は下層(黒色粘質土層)出土の数量が少なく、上層(茶黒色粘質土層)出土のものと比較対照する事は困難だが、出土土器総量のうち土師器の占める割合は下層の方が高い。須恵器、土師器の型式で見た上、下層の差は殆ど認められなかったが、下層よりも上層において新しい傾向を示すものが多いようである。

SKN7・6、SBK1・2周辺の包含層上層出土の土器と遺構内出土の土器を合計したものが第14表の円グラフである。『須恵器大成』によると「須恵器の用途は、基本的には実用の容器と葬祭供献用の二つに分けることができる。実用の容器の中には、貯蔵用と供膳用とがあり、それに極、僅かではあるが調理用及び生産用具が加わる。葬祭供献用としては、古墳副葬品と祭祀供膳用がある。」と記述されている。太平寺遺跡の沖積段丘面の遺構には土壇や祭祀遺構が認め

られなかった事から、出土土器は先ず実用の容器と仮定した。次に、壺類は土師器、須恵器ともに貯蔵用に入れ、須恵器の甕も貯蔵用とした。器種組成を供膳、調理、貯蔵⁶⁾によって区別すると、SKN 6にだけ土師器の供膳形態が認められ、特異な存在である事が分る。他にSKN 6周辺出土の土師器には他地域産と思われる土器3点(坏一河内の胎土、甕一紀伊の胎土)、製壺土器2点(茶色を呈する)がある。SKN 7からも製壺土器1点(茶色を呈する)が出土しているが、SKN 6の様に顕著でなく、SKN 6のものと、SKN 7、SBK 1・2のものには質的な違いが認められる。これはI型式後半の陶器内における1つの集落のあり方として、実際には2つの質的に異なった遺物組成をなすものが存在した事を示唆するものかも知れない。

D 沖積段丘面 中近世遺構内出土遺物

SBP 1 (第29図1~7; 図版266-1~3・5) ビットから黒色土器B類⁷⁾の壺が3点(口縁部)、瓦器壺4点(口縁部1点、高台部3点)、土師器では壺口縁部2点、小皿1点、羽釜1点⁸⁾が出土している。

黒色土器B類の壺は口縁部内面に沈線⁹⁾を有するもの(第29図4)が1点、端部が内傾した平坦(第29図5)ないし浅い凹面を呈するものが2点ある。暗文は残存状況が悪く図化しえていないが、一部に暗文の痕跡が認められた。4(第29図)では内面にやや粗い暗文、5(第29図)では外面全体にやや密な横方向のヘラミガミが施されている。

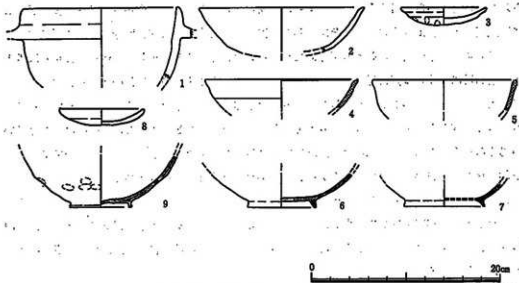
瓦器壺の口縁部破片は口縁がゆるく内彎ぎみに立ち上がり、端部はほぼ平坦で内傾した面をなす。体部内面には横方向のやや密な暗文、外面にはナデが施され、やや浅めで、壺の退化した形を呈する為、混入と考えられ、図化していない。瓦器壺高台部破片は高台が断面三角形に外方へしっかりとみんばっており、壺体部はゆるやかに内彎ぎみに立ち上がる。6(第29図)は内底面に数かに暗文の痕跡を留めるが、どの様な暗文であるか不明である。6にのみ二次的に火をうけた痕があり、器表面には炭素の吸着がみられない。6(第29図)は黒色土器の可能性もある。

土師器の壺には口縁端部が内傾したほぼ平坦な面をなすもの(第29図2)と口縁端部内面がナデにより浅い凹みをなすものがある。2(第29図)の口縁部内外面には一部ヘラミガミの痕跡が認められる。

土師器の小皿(第29図3)は約1/6個体残存し、口縁部は斜め上方に開き浅い。器壁は底部に厚く口縁部では薄い。成形調整は底部外面を指押え、口縁部には横ナデを施しているが、底部外面には更に2~3本を1単位とするナデ状の線がみられ、調整時のものか不明である。

土師器の羽釜(第29図1)は口縁部が僅かに内傾して短く立ち上がり、口縁端部上面がほぼ平坦な面をなす。鈎部は貼りつけた後ナデしており、先端部の形状は欠損して不明である。調整は口縁部に横ナデ、体部の外面にナデ、内面にハケ目を施している。外面鈎部以下は火にかかり赤変し、鈎部下面に煤が付着している。

鉄釘は1点(図版270-7)出土した。残存値3.4cm×1.9cmの板状のものに0.4cm角、長さ3.2cmの釘を2本打ちつけ、1本はほぼ完形、もう1本は半ばで折損した状態で残存する。表面



第29図 SBP1・2、床土出土土器

全体に錆がまわっており、詳細は不明である。数値は錆の上から計測した。

以上、SBP1では黒色土器B類、瓦器が出土している事から、平安時代後期に属すると思われる。

SBP2(第29図8) ビットより検出された遺物には、黒色土器A類の細片が1点、土師器では小皿2点、細片2点がある。

黒色土器は細片だが、埴の可能性が高いものである。

土師器の小皿は1点は完形、もう1点は口縁部細片である。完形の小皿(第29図8)は口縁部がゆるやかに内彎ぎみに立ち上がる。器壁は全体に均一でやや薄い。調整は底部に指押え、口縁部に横ナデを施している。

SBP2では、和気遺跡19工区堀3に類似した土師器小皿が求められ、和気遺跡ではⅡ期に属する事から、平安時代末～鎌倉時代初頭のものと思われる。

SKA4・5(第59図9・10; 図版266-9) 近世水田耕作面より土師器の大きな埋変が2点出土しており、器形・寸法ともに類似している。形態はやや丸みを帯びた底部から体部で斜め上方に立ち上がり、肩部が僅かに張った形状を呈する。口縁部は肥厚してほぼ直立する。器壁は底部で一番薄く、口縁部で一番厚い。調整は底部外面に指頭丘痕を留めるがほぼ平滑な面をなし、内部はナデが施されている。底部は丸く突出し、器壁が薄いにも関わらず、ヘク削り調整が施されていない点から、底部の成形には型を用い、離れ砂を撒いて作ったものかと考えられる。離れ砂は底部外面では殆ど認められないので、多少無理が生じるかも知れないが…。体部調整は外面では口縁直下まで粗い平行叩きを斜めないし横方向に施し、底部寄りでは叩きののち下→上へヘク削りを施している。底部直上は横方向にナデている。内面はやや粗い横ないし斜方向のハケ目を施している。SKA4・5の換桃大甕は18世紀代³⁰に属する。

E 氾濫原出土の遺物

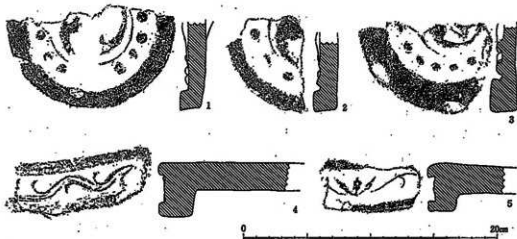
室町時代洪水堆積層出土遺物(第30図4、第54・55図;図版267) 室町時代洪水堆積層からは縄文前期以降、中世までの遺物が出土しており、その殆どは河川内でローリングを受け、器表面が磨耗している。

縄文式土器は前、後、晩期のものが、弥生式土器は中、後期のものが少量だが出土している。

古墳時代以降、奈良時代に属する遺物には須恵器、土師器があり、5～6世紀代の須恵器が最も多い。2(第46図)の高环形器台はSDN2のⅡ期堆積層出土のものと同室町時代洪水堆積層出土のものが接合した唯一の例である。甕の中にはⅠ型式1段階のものが1点(第55図9)あり、口縁部寄り外面に貼付凸帯を1条施し、口縁部は丸く約めている。全体にシャープさに欠けた鈍い感じのつくりである。

平安時代以降、中世の遺物には黒色土器、土師器、須恵器、瓦、灰粘陶器、陶磁器がみられる。黒色土器は埴底部を含む細片が少々認められた。土師器には埴、小皿(第55図1・2)、羽釜(第54図1・2・4・6)、甕(第55図6)が計約20点あり、羽釜が多い。瓦器には埴(第55図3・4)、小皿、羽釜(第54図3・5)、甕(第55図5・7)、播鉢(第55図11)の計約80点があり、埴が半分弱を占め、羽釜、播鉢が次いで多い。埴は高台のしっかりしたものから退化したものまであり、前者の方がやや多いが細片である。羽釜は(第54図3)の様な形態をなすものが約半数を占める。甕の出土量は少ないが、土師器、瓦器ともに各形態がみられる。播鉢は出土量が少ないが、11(第55図)の形態が少し多い様である。他に須恵器の煎鉢も数点だが出土している(第55図10)。

瓦は唐草文軒平瓦(第30図4)1点、平瓦約80片、丸瓦約40片が出土している。軒平瓦は凹面は磨耗して不明だが平滑面をなし、凸面には細かい砂の付着が認められる。側面はヘラによる削りまたはナデである。凸面と頭の付け根はほぼ直角で、ヘラによりナデられている。平、丸瓦ともに2種類の調整技法が認められた。平瓦では凸面に粗砂と粗い叩き目、凹面に櫛の模様の痕



第30図 氾濫原出土瓦拓影図

跡と布目があるもの、凹凸面に細かい砂が付着し、ナデが一部施されているものがある。丸瓦では凸面に粗い叩きの後ナデ、凹面に斜方向の筋と布目があるもの(第55図8)、凸面に粗砂と粗い叩き目、凹面に布目があるものがある。

灰釉陶器かと思われる破片が1点、陶磁器片は10数点みられ、常滑焼甕体部片、備前焼、信楽焼搦鉢、瀬戸焼の蓋片等がある。

江戸時代洪水跡出土遺物(第30図3・5、第56図; 図版268-1~4) 江戸時代洪水堆積層からは縄文晩期以降、近世までの遺物が出土しており、その内容は近世遺物を除くと室町時代洪水堆積層出土の遺物と基本的に同じで、器表面は殆どのものが磨耗している。

縄文式土器は後、晩期のものが、弥生式土器は中・後期のものが数点認められた。

古墳から奈良時代にかけての遺物には須恵器、土師器があり、5~6世紀代のものが多い。

平安時代以降、中世の遺物には土師器、瓦器、瓦、中国製磁器、須恵器がある。土師器には羽釜、埴、小皿があり、羽釜が多い。瓦器には埴、羽釜、搦鉢、小皿、甕があり、埴が過半数を占め、次いで羽釜、搦鉢が多い。瓦は軒平瓦(第30図5)が1点、平瓦、丸瓦が出土している。中国製磁器には皿が2点(第56図6・9)あり、6は青磁、9は白磁である。須恵器では鉢が1点ある。

近世の遺物には土師器、陶磁器、瓦がある。土師器では焙烙、甕、火舎、皿が計10点出土し、甕は沖積段丘面のSKA4・5の甕口縁部と類似する。陶磁器は備前焼搦鉢、染付碗、陶器埴等が計10点ある。瓦には巴文軒丸瓦が1点(第30図3)、唐草文軒平瓦1点、他に平瓦、丸瓦がある。

蛇行州および後背湿地堆積層出土遺物(第30図2、57図; 図版268-5~8) この層からは古墳時代と中世の遺物が少量出土している。

古墳時代の遺物には須恵器、土師器があり、時期は5世紀後半~7世紀に属するものがある。

平安時代以降、中世の遺物には瓦器、土師器、瓦、黒色土器、磁器、木製品がある。瓦器では羽釜(第57図2~5)、埴、甕(第57図1)の破片が認められた。土師器では羽釜、埴の破片が認められ、羽釜(第57図6)は室町時代洪水堆積層出土のもの(第54図6)よりも少し遡るかはほぼ同じ時期のものと思われる。瓦には軒丸瓦(第30図2)の他に平瓦、丸瓦の破片があり、須恵器のものが各1片づつ認められた。磁器は中国製の破片が1点出土している。木製品は人形と思われるものが1点(第57図7; 図版268-8)ある。これは長さ19.7cm、幅3.0cm、厚0.7cmの小さい板状で、上辺を外彎させ、正面からは小さく、背面からは大きく薄く上部を削り出したものである。上辺より約1/3の位置の両側縁部に切り込みを入れ、裏面では切り込み部分をつなぐ横方向の圧痕がある。板取りは柁目で、中心部を外れている。

江戸時代シルト堆積層出土遺物(第58図3~16; 図版269-2~4、270-6) この層からは弥生時代の遺物が少量と、古墳時代から中・近世にかけての遺物が出土している。弥生時代の遺物は時期は不明である。古墳時代以降、奈良時代に属する遺物には須恵器、土師器、窯体の各

破片がみられる。

中世以降、近世までの遺物には、瓦、陶磁器、土師器、瓦器、土管、須恵器の各破片があり、瓦以下の順に出土量が多い。瓦には平瓦、丸瓦、巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、棧瓦があり、須恵質のものも僅かだが認められた。陶磁器には中国製白磁碗（第58図11）、染付碗（第58図7～10）や皿、京焼の土瓶（第58図4・5）、瀬戸焼の皿（第58図6）、唐津焼の甕（第58図3）等があり、染付碗の破片が最も多く、これらの染付の破片から、この堆積層は18世紀代ないし19世紀に入るものかもしれない。土師器には小皿、羽釜、炮烙（第58図12～14）、火舎、火消し壺、所謂淡焼大甕の各破片がある。瓦器には碗、小皿、羽釜、甕、摺鉢、火舎等があり、土師器、瓦器ともに羽釜が多い。土管は4点中2点（第58図15、16）が完形で残り、内面に粗い布の織ぎ目を留める（図版270-6）。その他にどろめんこが1点出土している。磁石の破片は4点あり、直方体状を呈し、材質には流紋岩、砂岩？、スレート？がみられる。鉄釘は1点（図版270-8）H6北壁の灰褐色粘土および青灰色粘土より検出された。0.4cm角、長さ4.7cmで先端に向けて細い。釘の頭部分は0.4cm×0.6cmと少し大きい。表面全体に丹が付着している。他にもう1点（9）沓原出土の釘があるが、地点、層位は不明である。先述の釘を一まわり大きくした形で、釘の頭部分は1.2cm×0.7cm、0.5cm×0.7cm角、長さ7.1cm、先端へ向けて細い。頭頂部は一部剥がれて浮き上がっているが、本来は8と同じく平らな面をなす。9は先端から1/4の位置で折れ曲っており、表面全体は丹が付着している。

江戸時代水田跡と牛の足跡面出土遺物（第58図1・2；図版269-1） 1（第58図）の瀬戸焼灯明皿は水田面上に残る牛の足跡の小落ち込みより検出されたもので、18～19世紀代に属するものか。他にこの小落ち込みより中世の丸瓦片が1点出土している。

江戸時代水田跡出土遺物には瓦、陶磁器、須恵器、土師器、瓦器、土管片等があり、瓦以下の順に出土量が多い。瓦には平瓦、丸瓦、不明の破片がある。陶磁器には染付碗、徳利、小皿、肥前系碗、備前焼摺鉢（第58図2）等があり、染付片の中には明治時代に属すると思われるものがある。須恵器は5世紀～6世紀代のものである。土師器は羽釜、炮烙、火鉢の破片がある。瓦器には碗、火舎の破片がある。

SDN3出土遺物（第30図1、第59図1～8；図版269-5～8） 古墳時代以降、近世までの遺物が出土している。古墳時代の須恵器には6世紀代のものがみられる。中世以降の遺物は土師器では小皿、羽釜、炮烙、火舎が、瓦器では碗、羽釜、摺鉢が合計10数点ある。陶磁器は約20点出土しており、陶器摺鉢（第59図2～4）、染付碗（第59図5～8）、皿などがある。瓦は軒丸瓦（第30図1）、丸、平瓦あわせて計20点出土し、棧瓦も数点みられる。

分類に際してのメモ

分類は形態・手法上の特徴により行うべきであるが、今回の報告では形態上の特徴により行った。その結果、明確な分類はできなかったが、以下の疑問が生じたのでメモ程度に述べたい。

太平寺遺跡の主として茶黒色粘質土層からは、陶色編年のI-3～5（I-1までか？）に該

当する須恵器が多く出土した。このうち、坏に限定して見た場合、『陶色Ⅲ』⁹⁾の編年では、Ⅰ-1、2では口縁端部は丸い。Ⅰ-3で口縁端部は細い平面をなすか僅かに段をなして内傾する。Ⅰ-4では口縁端部の丸いもの、段をなすものが併存する。Ⅰ-5では口縁端部が明瞭な段をなす。Ⅰ-1では口縁端部の段が消失する過渡期で、端部は明瞭な段をなすとされている。口径で見ると、Ⅰ-4で小型化の傾向を示し、Ⅰ-5で最も小さくなり、Ⅰ-1では大型化する過渡期であると記述されている。太平寺遺跡における坏の変化は、体部高の低い口縁端部に段をもつものから、体部高の高い口縁端部の丸いものへ移行し、口径もそれにつれて小型化していく傾向をもつ。最も小型化するの陶色編年のⅠ-5で、口縁端部は明瞭な段をなす筈である所が、当遺跡出土の坏には口縁端部を丸く納める傾向があり、両者に違いが認められた。

陶色では坏・杯蓋を編年の指標としているが、Ⅰ-4、5の型的な区別が私には理解できず、分類の際の支障となった。また、高坏の脚の様に、陶色内でも地区毎に型的異なる特色をもつ傾向にあるものは、同時期のものかどうか判断に苦しむ。高坏の脚端部は甕口縁部のつくりとも共通し、甕についても同じ事が言える。形態的な違いで分けた類の中には、時間的な要因、地区毎の違い、窯毎の違い、工人差等、色々な要素が重なっており、形態のどの部分に何の要因が表出しているのか判断する事は難しい。ある器種では時間的な要因で、他の器種では同時期併存での形態上の違いにより分類してしまった感が強い事を残念に思っている。

註

- 1) 早期末～前期、前期の土器は泉拓良氏、網谷克彦氏に教えて頂きました。
- 2) 星田式の可能性については大野薫氏に教えて頂きました。
- 3) 「八尾南遺跡」 八尾南遺跡調査会 1981年
- 4) 尾谷雅彦 「久空寺遺跡出土の渡米系土器」 『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第7回)資料』 1982年
- 5) 石材は奥田尚氏に鑑定して頂きました。石材に？が付いているものは未鑑定のもの。
- 6) 田辺昭三 「須恵器大成」 1981年
- 7) 田中 冢 「古代中世における手工業の発達(窯業)一換内一」 『日本の考古学』Ⅵの分類により、黒色土器A類は内黒を、B類は内外面黒色を呈したものを指す。
- 8) 堺市教育委員会の樋口吉文氏より教えて頂きました。
- 9) 「陶色Ⅲ」 大阪府文化財調査報告書第30冊 1978年